

(26-1) Pasādabahulabrahmaṇavatthu 淨心に溢れた婆羅門の物語 383

◆ chinda sotanti imam dhammadesanam satthā jetavane viharanto pasādabahulam brāhmaṇam ārabbha kathesi.

この法話は、師がジエータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、淨心に溢れた婆羅門について語られたものである。

彼は世尊の法話を聴いて心淨められ、自分の家で十六人の比丘たちにいつも食事を用意させ、比丘たちが来る時間に鉢を受け取って、「尊い阿羅漢さま方はどうぞお入りください。阿羅漢さま方はおすわりください」と、誰と話すときでも「阿羅漢」という呼び名を使って話した。

比丘たちのうち、普通の者たちは「彼は我々を阿羅漢だと思っている」と思った。煩惱を滅した者たちは「彼は私たちが煩惱を滅した者だということを知らない」と、比丘たちはみな、得心が行かず、彼の家に行かなくなつた。婆羅門は悲しく憂鬱になり、「どうしてお上人さま方は来ないのだろう」と、精舎へ行って師を礼拝し、そのことを訴えた。

師は比丘たちに話しかけられ、「比丘たちよ、これはどういうことですか」とお訊ねになり、比丘たちがその事実を申し上げると、「比丘たちよ、あなた方は阿羅漢と呼ばれることを喜ばないのでですか。」「喜びません、尊師よ。」「たとえそうでも、人々にとってこれは淨心の言葉です。比丘たちよ、淨心の言葉に罪はありません。しかも、あの婆羅門は阿羅漢たちにとても大きな敬愛を抱いています。ですから。あなたがたも執着の流れを断ち切って、阿羅漢界に到達するべきです」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「383流れを断ち切れ、勇敢であれ、諸々の欲望を取り去れ、婆羅門よ。〔存在を作る〕諸々の要素が滅びることを知り、作られざるもの(涅槃)を知れ、婆羅門よ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.236 (2014年10月) 聖者になる道 修行者は不可能を可能にする Path of purity is open to all.

383.Chinda sotam parakkamma, Kāme panuda brāhmaṇa; Sankhārānam khayam ānatvā, Akataññūsi brāhmaṇa.

383.バラモンよ 断ち切れ 流れを 努力せよ 諸欲を離れ もろもろの現象の滅尽知り究め 無爲知るものたれバラモンよ
訳：江原通子

五つの「流れ」を切る

「sotam流れ」。お釈迦様が仰っているのは、心の流れのことです。思考の流れのことです。感情の流れのことです。切るべき心の流れは五つあります。1. tanhā sota 渴愛の流れ 2. ditthi sota 見解の流れ 3. kilesa sota 煩惱の流れ 4. duccarita sota 悪行為の流れ 5. avijjā sota 無明の流れ

諸々の欲を離れる

「kāme panuda諸々の欲を離れ」。無意識のところで存在欲が顕れ、意識するところで、見えたものが美しい、さらに美しいものを見たい、という気持ちになるのです。この二次的に顕れる感情に「欲 (kāma)」と言うのです。

涅槃を体験する

「sankhārānam khayam ānatvā 現象の滅尽知り究め」。まず、「一切の現象は無常である」と発見する。無常とは、生じて滅する流れのことです。それから、現象の滅する姿に集中するのです。「一切は消えてゆくものである」という、さらに優れた智慧が顕れるのです。この智慧によって、すべての執着を断つことができるようになります。

次の単語は、「akataññūsi 無爲知るものたれ」です。この言葉は駄洒落のようなものです。パーティ語を知っている人々は、akataññū とは「恩知らず」という意味であると知っているのです。お釈迦様は、真理を面白く語りたいのです。ですから少々、謎かけをするのです。經典を読む人は、「恩知らず？」 あり得ない。この意味は何だろう？」と思ってしまうのです。akatam とは、涅槃のことです。因縁によって顕れない、という意味です。因縁によって作られたものではありません。それを知りなさいと仰るのです。要するに、「涅槃を体験しなさい」という意味です。それで真の brāhmaṇa になるのです。

383. Chinda sotam parakkamma, kāme panuda brāhmaṇa; Saṅkhārānam khayam ānatvā, akataññūsi brāhmaṇa.

383.婆羅門よ、〔渴愛の〕流れを断て。〔道心堅固に〕勤しんで、諸々の欲望を除け。婆羅門よ、諸々の形成〔作用〕〔諸行：形成されたもの・現象世界〕の滅尽を知って、〔あなたは〕作られざるもの（涅槃）を知る者として〔世に〕存するのだ。

チンド Chinda	ソータン sotam	パラッカンマ parakkamma,	カーメ kāme	パヌダ panuda	ブーラーフマナ brāhmaṇa;
断て。 Chinda/chindati(v.imper.2sg)[chid,chind,ched]切る,断つ,切断す	[渴愛の]流れを [道心堅固に]勤しんで、 [para-kram]【桁外れの努力】努力す,はげむ,	sotam/sota : ①(n)[śru]耳②(m.n.sg.acc)[śru]流,流水,流口	諸々の欲望を 除け。 akataññūsi=ā+kata/karoti(v.pp)[kr]なす,行う,作る+ññū/ñū→-ññū : -ññū(m.suffix)	婆羅門よ、 brāhmaṇa/brāhmaṇa : ①(m.sg.vov)[〃]婆羅門,婆羅門族;(仏を指すこともある)②(n)[= brahmañña]梵位,梵天たること;	

サンカーラーナン Saṅkhārānam	カヤン khayam	ニヤトウワー ñatvā,	アカタンニュースイ akataññūsi		ブーラーフマナ brāhmaṇa.
諸々の形成〔作用〕の 滅尽を Saṅkhārānam/saṅkhāra(m.pl.gen)[Sk.BSk.samskāra<saṃ-kr]行,為作,(行為とその習慣力),形成力,現象	知って、 [あなたは]作られざるものを作ることとして存するのだ。 [Sk.kṣaya]尽,尽滅,滅尽 ñatvā/jānāti(v.ger)[〃]知る, akataññūsi=a/+kata/karoti(v.pp)[kr]なす,行う,作る+ññū/ñū→-ññū : -ññū(m.suffix)[Sk. -jñā<jñā]知れる,知者+asi/attihi : ①(v.pr.2sg)[Sk.asti<as]ある,存在する②[Sk.asti]有,存在	brāhmaṇa.			

(26-2) Sambahulabhikkhuvatthu 大勢の比丘たちの物語(6) — 「二つの法」について質問した比丘たち 384

◆ yadā dvayesūti imam̄ dhammadesaṇam̄ satthā jetavane viharanto sambahule bhikkhū ārabbha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、大勢の比丘たちについて語られたものである。

ある日、三十人の遠方に住む比丘たちがやって来て、師を礼拝してすわった。サーリップッタ長老は彼らに阿羅漢果を得る機根があるのを見て、師に近づいて立ったまま、次のような質問をした。「尊師よ、『二つの法』と言われますが、二つの法とは何でしょうか。」すると、師は「サーリップッタよ、『二つの法』とは止と内観を言います」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「384 二つの法(止と内観)において、婆羅門が彼岸に到達するとき、[このように] 知る彼のあらゆる束縛は、消滅に到る。」と。

法話が終わったとき、これらすべての比丘たちは阿羅漢果に確実に立った。

No.237 (2014年11月) 執着を落とす方法 科学的なアプローチで心を育てる Concentration and wisdom are compulsory.

384. Yadā dvayesu dhammesu, Pāragū hoti brāhmaṇo; Athassa sabbe samyogā, Attham gacchanti jānato.

384.止観二法で彼の岸の 極みに至りし バラモンぞ これなる智者に一切の結縛(けばく)は消えて義に至る 訳:江原通子

サマタを卒業して観察に入る

大雜把に言えば、呼吸したり、歩いたり、座ったり、見たり、聴いたり、話したり、考えたりすることが、生きることです。それ以外、何も不思議なことをやってないです。それをそのまま観察すると、見たい、聴きたい、食べたい、などの衝動を発見します。この衝動は、体の感覚によって現れるのだとも発見します。要するに、感覚があるから生きているのだと発見します。生きていきたいという気持ちも、死後永遠になりたいという気持ちも、感覚から現れるもう一つの衝動にすぎないのです。感覚は無常で、苦で、虚しいものです。このように客観的に事実を発見していくのです。もし集中力さえあれば、精密に観察することができるのです。そうなると、すべては無常で瞬間瞬間変化しているのだと発見します。「生きる」と一般人が大雜把に、大げさに言うことは、なんのことない、ただの幻覚に過ぎないのだと発見します。瞬間瞬間の無常を発見すると、生きるという幻覚が破れる。同時に、生きることに対する執着も無くなる。それが、苦しみを乗り越えたことだと言うのです。なぜならば、観察瞑想をする人は、「生きることは苦以外のなんでもない」と客観的に発見しているのです。

修行は観察瞑想からはじめられる

修行はヴィパッサナー瞑想からはじめたほうが結果は早いのです。ヴィパッサナー瞑想を実践すると、必要な集中力も同時に現れます。修行者は、集中力と観察能力のバランスだけ気にすればよいのです。サマタ瞑想のみを先に実践すると、サマーディに達するまで、けっこう時間がかかります。ひとによって、高度なサマーディが生まれない場合もあります。ヴィパッサナー瞑想から修行を始めると、この問題は起きません。必要なサマーディの力が現れます。解脱に達するためにには、サマタから得られる心の力と、ヴィパッサナーから得られる智慧が欠かせないです。集中力だけでは解脱に達しません。智慧だけがあっても執着は落ちません。両方が必要なのです。

384. Yadā dvayesu dhammesu, pāragū hoti brāhmaṇo; Athassa sabbe samyogā, attham gacchanti jānato.

384.婆羅門が、〔対立する〕二つの法(事象)について、彼岸に至る者(善惡の彼岸にいる者)として〔世に〕有る、そのとき、しかして、〔あるがままをあるがままに〕知っている彼の、一切の束縛は〔自ずと〕滅却に至る。

ヤダー ドウワイエース ダンメース パーラグー ホーティ ブラーフマノー
Yadā dvayesu dhammesu, pāragū hoti brāhmaṇo;
[対立する]二つの 法(事象)について、 彼岸に至る者として 有る、 婆羅門が、

Yadā/yadā(adv)...の時に dvayesu/dvaya(a.n.pl.loc)[〃]二種の;偽の;一対,両者. dhammesu/dhamma(m.n.pl.loc)法,教法,真理,正義, pāragū/pāra(n.a)[〃]<para>彼岸,彼方,他の-gū 彼岸に到れる hoti/hoti(v.pr.3sg)= bhavati brāhmaṇo/brāhmaṇa : ①(m.sg.nom)[〃]婆羅門,婆羅門族;(仏を指すこともある): ②(n)[= brahmañña]梵位,梵天たること;

アタッサ サッベ サンヨーガー アッタン ガッチャンティ ジャーナトー
Athassa sabbe samyogā, attham gacchanti jānato.
そのとき、彼の、 一切の 束縛は〔自ずと〕 滅却に 至る。 [あるがままをあるがままに]知っている
Athassa=atha/atha:atho(ind)時に、また+assa/ima(指代 m.n.sg.gen)これ sabbe/sabba(a.代的 m.n.pl.nom)[Sk.sarva]一切の、すべて、一切のも samyogā/samyoγa(m.pl.nom)[〃=saññogo < sañ-yuj]結縛,結縛,繫縛;偶合, attham/atha : ①=attha(m.n)[Sk.artha]義,利益,道理,意味,必要,裁判②(n.sg,acc)[Sk.astha]attham gacchati[日が西に]没す,帰る gacchanti/gacchati(v.pr.3pl)[〃<gam]行く
jānato/jānanto(a.m.sg.gen) ←jānāti(v.ppr)[〃 jñā]知る.

(26-3) Māravatthu 魔王マーラの物語(4) — マーラが師に質問した話 385

◆ yassa pāranti imam̄ dhammadesanam̄ satthā jetavane viharanto māram̄ ārabbha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、魔王マーラについて語られたものである。

マーラがある日、ある男の姿をして師に近づき質問した、ということである。「尊師よ、彼岸、彼岸と言われますが、いったい何が彼岸でしようか。」師は、「これはマーラだ」と見抜かれて、「悪しき者よ、あなたに彼岸は何の意味がありますか。それは執着を離れた者たちが到達すべきものです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「385 彼(か)の岸と此(こ)の岸もなく、かれこれ彼の岸もなく、怖れを去り、束縛がない人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.238 (2014年12月) 彼岸此岸の物語と事実 両岸を知って執着を捨てる Strayed in this world and the other world.

385.Yassa pāram apāram vā, Pārāpāram na vijjati; Vītaddaram visamyuttam, Tamaham brūmi brāhmaṇam̄

385.彼の岸も此の岸も また彼此(ひし)両岸も非存在 悩みを離れ縛(ばく)を解く そをバラモンと我は説く 訳：江原通子
彼岸も此岸も見られない 彼岸此岸も見られない 恐れも離れて、束縛もない かれを私はバラモンと呼ぶ 訳：片山一良
『ダンマパダ全詩解説』大蔵出版より

この世を理解しましょう

仏教のこの世の話とあの世の話は、それほど複雑なものではないのです。ただ迷信と神話物語が無いだけです。「この世」とは、自分自身のことです。自分自身には、「生きている」という実感があるのです。その実感はなんなのかと調べると、眼耳鼻舌身意なのです。それが「この世」です。眼耳鼻舌身意があっても、活動はしないのです。眼耳鼻舌身意に色声香味触法が触れなくてはいけないのです。色声香味触法は外にあるのです。それは「あの世」です。眼耳鼻舌身意に色声香味触法が触れると、感覚が生じるのです。それで「私がいる」という錯覚が起こるのです。「私がいる」とするならば、「私を」守らなくてはいけない。「私は」生きていきたい。「私が」死ぬのも怖い。「私に」必要なものを獲得しなくてはいけない。「私の」邪魔するものを攻撃したり壊したりしなくてはいけない。このように、妄想の世界が限りなく拡がるのです。限りなく苦しみが拡がるのです。眼耳鼻舌身意という「この世」に、色声香味触法という「あの世」が触れただけの話です。それで感覚が起きたのです。その感覚に「私」という錯覚が起きたのです。

あの世も幻覚です

色声香味触法は「あの世」ですが、それも無常です。瞬間瞬間、変わります。私たちが、いくら外の世界を知っていると言っても、その知識は当てになりません。客觀性はないのです。ということは、「あの世」も、正しく観察する人には実在しないものになるのです。「私」という気持ちが錯覚であるならば、「この世」だとする眼耳鼻舌身意が無常であるならば、「あの世」だとする色声香味触法が無常であるならば、「あの世を知っている」という言葉が当てにならない主觀であるならば、この世もあの世も、実在しないことになるのです。「私」という実体が錯覚であると発見するのです。

では、渴愛という存在欲は成り立ちますか？成り立ちません。執着に値するものはありませんか？ありません。心に悩み苦しみ苛だちなどが起こり得ますか？起こりません。ということは、正しく物事を観察する人は、究極の安穏に、解脱に達するのです。この世とあの世を如実に知る人は、聖者なのです。

385. Yassa pāram apāram vā, pārāpāram na vijjati; Vītaddaram visamyuttam, tamaham brūmi brāhmaṇam̄

385.彼に、彼岸が〔見い出されず〕、あるいは、此岸が〔見い出されず〕、彼岸と此岸が〔両者ともに〕見い出されないなら、懊惱を離れ、束縛を離れた者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヤッサ パーラン アパーラン ワー パーラーパーラン ナ ウィッジャティ
Yassa pāram apāram vā, pārāpāram na vijjati;
彼に、彼岸が此岸が、あるいは、彼岸と此岸が、ないなら、〔両者ともに〕見い出され
Yassa/ya(関代 m.sg.gen)[Sk.yah]～である人、～であるもの pāram/pāra(n.a.sg.nom)[// <para]彼岸、彼方、他の apāram/apāra(n)[a-pāra]此岸、この世 vā/vā(adv.conj)または、或は、pārāpāram/ na/ vijjati/;

ウィータッダラン ウィサンユッタン タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Vītaddaram visamyuttam, tamaham brūmi brāhmaṇam̄
懊惱を離れ、束縛を離れた者であり、彼をわたしは、説く。「婆羅門」と
Vītaddaram=Vīta/vīta : ①(a 有持)[vi-ita<i の pp]離れたる、なき②(a)[vāyati vā ①vināti vi の pp]織られた+d/
+daram/dara(m.sg.acc)[//]恐れ、悲しむ、悩み visamyuttam/visamyutta:visāññutta(a)[<vi-samyuj]離縛せる、離繫せる者、軛を離れた
る、tamaham=tam/ta(人指示代 m.sg.acc)彼、その、彼女+aham/aham(人代 sg.nom)私 brūmi/brūti(v.pr.1sg)[brū cf.Sk.bravīti,brūte]言
う、告げる、のべる brāhmaṇam/brāhmaṇa : ①(m.sg.acc)[//]婆羅門、婆羅門族(仏を指すこともある)②(n)[= brahmañña]梵位、梵天た
ること、

(26-4) Aññatarabrahmañavatthu ある婆羅門の物語(4) — 師が弟子たちを婆羅門と呼ぶのはなぜか 386

◆ jhāyinti imam dhammadesanam satthā jetavane viharanto aññataram brāhmañārabbha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ある婆羅門について語られたものである。

その婆羅門は考えた。「師は自分の弟子たちに『婆羅門』と言う。私は、生まれも家柄も婆羅門だ。私にもそのように呼ぶのがふさわしい。」彼は師に近づいて、そのことを訊ねた。師は、「私は、生まれと家柄だけによって『婆羅門』とは言いません。最高の目的である阿羅漢果に到達した者こそを、そのように言うのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「386 静慮あり、汚れなく、[独りで]すわり、為すべきことをして、煩惱を減し、最高の目的に到達した者、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、その婆羅門は預流果に確実に立った。居合わせた人々にとっても、法話は意義深いものであった。

No.239 (2015年1月) 幸福とは心の成長です 心の穢れに注意しましょう Absolute victory against the competitive world.

386. Jhāyim virajamāśinam, Katakiccamanāśavam; Uttamatthamanuppattam, Tamaham brūmi brāhmañam

386. 彼の岸も此の岸も 穢(けがれ)をはなれ独り坐し なすべきことをなしおえし 無漏最上義の禪定者 そをバラモンと私は説く 訳：江原通子

聖者は完全勝利者です

Brāhmañā家の一人が出家したのです。お釈迦様がたびたび brāhmañā という語を使って弟子を賛嘆するのを聴いて、彼は考えたのです。「最も優れているのが brāhmañā であるならば、私も brāhmañā 家で生まれたので、最も優れた人々の一員ではないでしょうか?」と。それを釈尊に確かめなくてはいけないのと思って、伺ったのです。お釈迦さまはその人に、どのような人物を真の brāhmañā と称するべきかと説明したのです。

Jhāyim 心を統一している人。瞑想修行によって心を統一して、サマーディに達しなくてはいけないのです。サマーディは二種類です。サマタ瞑想で達するサマーディと、観察瞑想で達する出世間サマーディです。

Virajam 世間との関わりを断っているのです。ふつうの人々の生きかたとは、世間との関わりを持つことです。世間と関わりを持たなからず、生きる事ができないのです。心のなかに、物事に依存する弱い状態が無くなったら、関わりを断つことになります。要するに、真の孤独者なのです。Āśinam とは、坐っている、という単純な意味になります。Virajamāśinam とは、世間との関わりを断つて真の孤独者として生活する人、という意味になります。

Katakiccam とは、なすべきことをなし終えた人、という意味です。ひとがなすべきことは、心を成長させること、心の汚れを落とすことです。心を究極の位まで成長させて、一切の煩惱を滅尽したならば、なすべきことをなし終えたことになります。要するに、最終解脱に達した聖者、という意味です。Anāśavam は、Katakiccam の同義語です。煩惱は一切無い(無漏)、という意味です。この二つの言葉で、修行者が阿羅漢果に達していることを表しているのです。

Uttamattham 最高の意義に、anuppattam 達している。最終解脱(阿羅漢果)に達している聖者のことです。Tamaham brūmi brāhmañā この聖者に対して、私(釈尊)は brāhmañā と言うのです。

質問した比丘は、brāhmañā 家で生まれたことは仏道において何の意味も無いのだ、と理解したことでしょう。Brāhmañā とは、心清らかにする仕事を完成した人に使う尊称なのです。

新年の抱負

仏道は、究極の幸福に達する道を教えるのです。家内安全、学業成就などの一時的な幸福のみを教える道ではありません。たとえ家内安全を確保しても、他のところで不幸に陥る可能性があります。学業成就できても、まともなところに就職できなくなる場合もあります。無病息災といつても、病や災難が減ることはあれども消えることは決してありません。万が一、ひとが無病息災で一生を過ごせたとしても、心は汚れたまま、老いて死ぬのです。このような幸福は、美しいシャボン玉を手に載せてみるようなものです。不可能ではないが、夢いものです。「ひとは心の汚れによって不幸や苦しみに陥るのだ」と理解した人は、際限なく神社仏閣パワースポットなどを巡ることをやめて、できるだけ自分の心を清らかにしようと励むのです。

たとえわずかでも心が清らかになったら、その分、幸福になるのです。人生を好転させる道は、仏法僧を信頼するところから始まります。次の一步は、道徳を守ることです。それから、自己観察して心の汚れを徐々に落としていくのです。「仏道に挑戦して、真の幸福に自分の努力で達します」ということを、今年の抱負にしてみては如何でしょうか?

386. Jhāyim virajamāśinam, katakiccamanāśavam; Uttamatthamanuppattam, tamaham brūmi brāhmañam.

386. [世俗の]塵を離れ[林に]坐す瞑想者を、為すべきことを為した煩惱なき者を、最上の義(目的)を獲得した者を——わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ジャーイン ウィラジャマースイーナン

Jhāyim virajamāśinam,

瞑想者を、[世俗の]塵を離れ[林に]坐す

カタキッチャマナーサワン

katakiccamanāśavam;

為すべきことを為した煩惱なき者を、

Jhāyim/jhāyin(a.m.sg.acc)禪定ある, 静慮する; 禪定者, 静慮者, 禪師 virajamāśinam=virajam/viraja(a.m.sg.acc)離塵の, 塵を離れた +āśinam/āśīna(a)āśati<ās の pp>坐せる←āsati(v)[ās]坐す 2sg.āśi; pp.āśīna, katakiccamanāśavam=kata/karoti(v.pp.有持)[kr]なす, 行う, 作る+kiccam/karoti(v. ger.m.sg.acc)[kr]なす, 行う, 作る+anāśavam/anāśava(a)漏なき, 無漏の m. pl. nom. anāśavāse. cf. nirāśava;

ウツタマッタマヌッパッタン

Uttamatthamanuppattam,

最上の義(目的)を獲得した者を 彼をわたしは、

タマハン

tamaham

彼をわたしは、

ブルーミ

brūmi

彼をわたしは、

グラーフマナン

brāhmañam.

「婆羅門」と

Uttamatthamanuppattam=Uttama/uttama(a 代的.持)[ud:最上級]最上の, 最高の-aṅga 最上肢, 頭-attha 最上義+attham/attha :

①=attha(m.n)[Sk. artha]義, 利益, 道理, 意味, 必要, 裁判②(n)[Sk. asta]attham gacchati[日が西に]没す, 帰る

+anuppattam/anuppatta, anupatta(a.m.sg.acc)[anupāpuñāti の pp.]到達せる, 得たる←anupāpuñāti(v)[anu-pāpuñāti]到達す, 得る, 見出す, tamaham/ brūmi/ brāhmañam/.

(26-5) Ānandattheravatthu アーナンダ長老の物語(2) — 師の輝きはすべてを凌ぐ 387

◆ divā tapatī imam dhammadesanaṃ satthā migāramātupāsāde viharanto ānandattheraṃ ārabbha kathesi.

この法話は、師が〔サーヴァッティー市の近くの〕鹿母講堂に滞在しておられたときに、アーナンダ長老について語られたものである。

コーサラ国王パセーナディは、雨安居の大終了式に、あらゆる装身具で身を飾り、香などを持って精舎に行った、ということである。そのとき、カールダーイン長老は、瞑想に入つて会衆の端にすわっていた。彼の身体は金色に輝いて美しかった。ところがそのとき、月が上り太陽が沈んだ。アーナンダ長老は沈みゆく太陽と上つてくる月の光を見て、また王の身体の光とウダーイン長老の身体の光と如来の身体の光を見た。その中で、あらゆる光を凌いで師が輝いていた。アーナンダ長老は師を礼拝して、「尊師よ、今日、私が光を見ておりましたら、あなたさまの光が美しく輝いています。あなたさまのお身体がすべての光を凌いで輝きわたっています」と言った。

すると、師は彼に、「アーナンダよ、太陽というものは昼間に輝きます。月は夜に、王は装身具をつけたときに、煩惱を滅し尽くした阿羅漢は群れと交わるのをやめて瞑想に入つていて輝きます。しかし、ブッダたちは昼も夜も輝きます。五種類の威光によつても輝きます」とおっしゃつて、次の詩句を唱えられた。「387 昼は太陽が燃え、夜は月が光輝を放つ、武具をつけたクシャトリヤは輝き、禪定に入った婆羅門(阿羅漢)は輝く。しかし、昼も夜もすべて、ブッダは威光により輝く。」と。

法話が終わつたとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

KN 18 - patisambhidāmaggapāli 無碍解道 1. mahāvaggo mātikā 37. sallekhaṭṭhañānaniddeso

◆ 37. puthunānattatejapariyādāne paññā sallekhaṭṭheñānam.別性・異性・一性・威力・水盡の慧が漸損の義の智なり

◆ 88. --♦ tejoti pañca tejā — caraṇatejo, guṇatejo, paññātejo, puññātejo, dhammatejo.威力とは、五威力あり、行威力、徳威力、慧威力、福威力、法威力なり。

No.240 (2015年2月) 輝ける人生を目指して 心配しなくとも生きられる Glory of life

387. Divā tapati ādicco, Rattimābhāti candimā; Sannaddho khattiyo tapati, Jhāyī tapati brāhmaṇo; Atha sabbamahorattim, Buddha tapati tejasā.

387.日、昼に輝き 月、夜に照る 王族、武装に輝き バラモン、禪思に輝き ブッダ威光もて、昼も夜も すべての時に光り輝く
訳：江原通子

性格は私(わたくし)、キャラは公(おおやけ)

ひとの公の側面はその人のキャラです。単語は間違つてゐるが、その人のアイデンティティです。その人に生きるために必要な収入を与えてくれる、仕事のタイプでもあります。世界は、自分をそのキャラで受け入れるのです。医者、弁護士、政治家、投資家、起業家、銀行員、公務員、教職員、サラリーマン、専業主婦などなどは、キャラなのです。その能力で生きなくてはいけないので。他人のキャラを羨ましがつたり、真似したりしてはいけないので。自分のキャラを見つけた時点から、生きることが樂になります。それが業ということです。

輝ける人生とは？

太陽のキャラは日中、輝くことです。月のキャラは夜、輝くことです。クシャトリヤ・カーストのキャラは、国を軍人として守ることと、政治活動です。クシャトリヤの人は、武装していると輝くのです。大將軍は国王です。王も冠をかぶつて玉座に坐つてると輝くのです。出家のキャラは、修行することです。修行中である時、禪定に入つていてる時、出家修行者は見事に輝いて生きているのです。各人の輝きより、はるかに優れた輝きを持っている人、すべてを超えて輝いて生きている人とは、誰のことですか？答えは、ブッダです。ブッダにも、正覚者というキャラがあるのです。お釈迦様は八十歳になるまで。正覚者としてご自分の仕事をなさつてきたのです。ブッダが行なつた仕事に勝る仕事は、世に存在しないのです。

387. Divā tapati ādicco, rattimābhāti candimā; Sannaddho khattiyo tapati, jhāyī tapati brāhmaṇo; Atha sabbamahorattim [sabbamahorattam (?)], buddho tapati tejasā.

387.太陽は、昼に輝き、月は、夜に明からむ。士族は、武装者として輝き、婆羅門は、瞑想者として輝く。しかして、覚者は、昼夜全てに、威光もて輝く。

ディワー タパティ アーディッチョー ラッティマーバーティ チャンディマー

Divā tapati ādicco, rattimābhāti candimā;

昼夜に 輝き、 太陽は、 夜に明からむ。 月は、

Divā/divā[adv][diva の abl]日中に tapati/tapati(v.pr.3sg)[〃 <tap>輝やく, 熱す, 苦しめる ādicco/ādicca(m)[Sk.āditya]太陽, 日,

rattimābhāti=rattim/ratti(f.sg.acc.adv)[Sk.rātrī,rātri]夜+ābhāti/ābhāti(v.pr.3sg)[ā-bhā 輝く]光る, 輝やく

candimā;candima(m.f)[Sk.candramas m., candrimā f.]; 月;

サンナッドー カッティヨー タパティ ジャーイー タパティ ブラフマノー

Sannaddho khattiyo tapati, jhāyī tapati, brāhmaṇo;

武装者として 士族は、 輝き、 瞑想者として 輝く。 婆羅門は、

Sannaddho/sannaddha(a)[sannayhati の pp]よく結べる,武装せる,付けたる←sannayhati(v)[sam-nah]結ぶ,付ける,武装す

khattiyo/khattiya(m.sg.nom)[Sk.kṣatriya]刹帝利王族 tapati/, jhāyī/jhāyin(a.m.sg.nom)禪定ある, 静慮する, 禪定者, 静慮者, 禪師 tapati/ brāhmaṇo/brāhmaṇa : ①(m.sg.nom)[〃]婆羅門, 婆羅門族; (仏を指すこともある)②(n) [= brahmañña]梵位, 梵天たること;

アタ サッバモホーラッティン ブッドー タパティ テージャサー

Atha sabbamahorattim, buddho tapati tejasā.

しかし、昼夜全てに、 覚者は、 輝く 威光もて。

Atha/atha:atho(ind)時に、また sabbamahorattim=sabbam/sabba(a.代的 m.n.sg.nom)[Sk.sarva]一切の,すべて,一切のもの

+aho/aho,aha(n)相)[Sk.ahan,ahas]日 adv.-rattim,-rattim 昼夜に+rattim/ratti(f.sg.acc.adv)[Sk.rātrī,rātri]夜(sg)acc.rattim 夜に,

buddho/buddha(a.m.sg.nom)[bujjhati の pp]覚つた, 目覚めたる, 覚知せる; 覚者, 仏陀, 仏 tapati/ tejasā/tejo:=teja(n.sg.inst)[Sk.tejas]火, 威光, 威力, 火天 instr.tejasā, tejena.

(26-6) Aññatarabrahmañapabbajitavatthu ある出家者の物語 388

◆ bāhitapāpoti imam̄ dhammadesanam̄ satthā jetavane viharanto aññataram̄ brāhmañapabbajitam̄ ārabbha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ある出家者について語られたものである。

ある婆羅門が仏教以外の出家をして、「修行者ゴータマは自分の弟子たちを『出家者 pabbajita』と呼んでいる。私も出家者だから、私のこともそう呼ぶべきだろう」と考えて、師に近づいてそのことを訊ねた。師は、「私はそれだけのこと『出家者』とは呼びません。煩惱の汚れから出離したから kilesamalānam̄ pana pabbajitattā『出家者』という呼び名があるのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「388 罪悪を取り除いたために、婆羅門と言い、静かに落ち着いた行動ゆえに修行者と言われる。自分の罪垢から出離するがゆえに、出家者と言われる。」と。

法話が終わったとき、その出家者は預流果に確実に立った。居合わせた人々にとっても、法話は意義深いものであった。

No.241 (2015年3月) ブッダの教えはオリジナルです 仏教用語の定義 Buddha's teaching is unique.

388. Bāhitapāpoti brāhmaño Samacariyā samanoti vuccati Pabbajayamattano malam Tasmā “pabbajito”ti vuccati

388. 離悪の故にバラモンと 物靜か故沙門(サマナ)とぞ 我が垢 常に拂う故 出家者(パッバジタ)とこそ呼ばるなれ 訳: 江原通子 ※原詩はすべて語呂合せ (bāhitapāpo 悪を捨ててしまった人→brāhmañana Samacariyā 身口意の行為を清浄な状態に

バラモンの定義

brāhmañā という語は、成長する、という語幹からできたものです。おそらく一般人は、r の発音はなまって使ったでしょう。お釈迦様がこのように定義します。「bāhitapāpo 悪を捨ててしまった人は、brāhmañā です。」これは精密な言語学的な定義ではないのです。音が似ているだけです。悪から心を完全に離した聖者を示すために、brāhmañana という言葉を使うのです。お釈迦様が、「眞の brāhmañana」と説く場合は、必ず「解脱者」という意味になります。時々、出家者に対して軽く brāhmañana という単語を使う場合もあります。お釈迦様の教えは、バラモン教の教えと違います。バラモン人の教えはほとんど間違っているのだ、と批判することもあります。しかし、仏道を歩んで解脱に達した人は、brāhmañā なのです。あえて brāhmañā という単語を使うことによって、バラモン教に対して反対の立場をとられたのです。

沙門の定義

お釈迦様が samāna という単語を使ったのは、ご自身の教えはバラモン教の伝承と違うからです。カースト制度は関係なく、誰でも自由に出家できるからです。「自由な宗教の世界」という意味で、samāna という単語を使ったのです。その単語に定義をします。Samacariyā (身口意の行為を清浄な状態に保つ) という意味で、samana と言うのです。

出家の定義

正しいバラモンは、年老いたら sanyāsin(遊行者)になるのです。バラモン伝承以外の宗教家は、サンニャーシンという単語ではなく、pabbajita という単語を使ったのです。Pravarjita というサンスクリット語の単語が、パーリ語になると pabbajita になります。Pravarjita とは、離れる、厭う、嫌う、という意味です。「自分の心の汚れ(煩惱)から離れる」という意味で、pabbajita という言葉を使用されているのです。眞の pabbajita は解脱者です。煩惱を無くす修行をする出家も、(見習い) pabbajita なのです。

388. Bāhitapāpoti brāhmaño, samacariyā samanoti vuccati; Pabbajayamattano malam, tasmā “pabbajito”ti vuccati.

388. 悪を拒否した者、ということで、「婆羅門」[と呼ばれる]。性行が平靜なるがゆえに、「沙門」と呼ばれる。自己の垢を[常に]払っている者は、それゆえに、「出家者」と呼ばれる。

バーヒタパーポーティ ブラフマノー サマチャリヤー サマノーティ ウッチャティ
Bāhitapāpoti brāhmaño, samacariyā samanoti vuccati; Pabbajayamattano malam, tasmā “pabbajito”ti vuccati;
拒否した者、悪を、ということで、「婆羅門」[と呼ばれる]。性行が平靜なるがゆえに、「沙門」と呼ばれる。
Bāhitapāpoti=bāhita/bāhita(a 有持)←bāhēti : ①(v.pp)[bāhiのdenom]拒斥す,拒外す pp.bāhita : ②(v) [=vāheti< vahati のcaus]運ぶ+pāpo/pāpa(a.n→m.sg.nom)悪き,悪,悪人,-+ti/ti(ind)[itiの略]と,かく brāhmañō/rāhmana : ①(m.sg.nom)[/]婆羅門,婆羅門族;(仏を指すこともある)②(n) [=brahmañā]梵位,梵天たること; , samacariyā=sama/sama : ①(m相)[<śam]寂,靜,平靜②(m)[śram]疲労③(m相)[/]同じ,同一の,平等の,正しき,まさしき-cārin 正行者;寂靜行者+cariyā=cariyā:,cariya(n.f.sg.nom)[Sk.cārya]行,行為,所行;性格 samanoti=samano/samana(m.sg.nom)[Sk.śramañā<śram]沙門+ti/ vuccati/vuccati:vuccate(v.pr.3sg)[vac:pass]言われる←vatti(v.pp)[Sk.vakti<vac]言う,語る,説く;

パッバージャヤマッタノー マラン タスマー パッバジトー ティ ウッチャティ
Pabbajayamattano malam, tasmā “pabbajito”ti vuccati.
[常に]払っている者は、自己の 垢を それゆえに、「出家者」と呼ばれる。
Pabbajayamattano=pabbajayam/pabbajayanta(m.sg.nom)←pabbajati(v)[pa-vraj cf.Sk.pravrajati]=pavajati[~から去る,出る,家から離れてゆく,出家する,遁世する]出家する,遁世する+attano/attan(m.sg.gen)[Sk.ātman]我,自己,我体 malam/mala(n.sg.acc)[/]垢,垢穢, tasmā/tasmā(a 代的)[ta の abl]それより,彼より,それ故に “pabbajito/pabbajita(a.m.sg.nom)[pabbajati の pp.,BSk.pravrajita]出家,出家者,隠遁者”ti/ vuccati/.

(26-7) Sāriputtatheravatthu サーリピッタ長老の物語(3)サーリピッタ長老を怒らせようとした婆羅門389-390

◆ na brāhmaṇassāti imāṇi dhammadesanāni satthā jetavane viharanto sāriputtatheram ārabba kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、サーリピッタ長老について語られたものである。

ある場所で、おおぜいの人々が「何と我々のお上人さまは、忍耐力を使えていることだろう。人々が誹謗しても打っても、怒りすらも表さない」とサーリピッタ長老の徳を話していた。すると、間違った見方をするある婆羅門が「その怒らない人というのは誰ですか」と訊ねた。「私たちの長老さまです。」「怒らせないようによくしているに違いありません。」「そんなことはありません、婆羅門よ。」「それなら、私が怒らせてやろう。」「できるなら、怒らせてみなさい。」

婆羅門は、「まあよい、私はどうすればよいかわかっている」と、長老が托鉢のために市内に入ったのを見て、後ろから付けていき、長老の背中に思い切り平手打ちをくらわせた。長老は、「これはなんだろう」と調べもせずに、先へ行った。婆羅門の体全体に、焼けるような痛みが生じた。婆羅門は、「お上人さまはなんという徳を具えているのだろう」と、長老の足元にひれ伏して、「尊師よ、私をお救しください」と言った。「どうしたのですか」と長老が言うと、「私は試そうと思つて、あなたさまを叩きました」と言った。「まあまあ、あなたを赦します。」「尊師よ、もしお救しくださいなら、私の家にすわって、托鉢の食をお受け取りください」と長老の鉢を受け取ろうとした。長老も鉢を与えた。婆羅門は長老を家に連れていき、もてなした。

人々は怒つて、「あの婆羅門は私たちの罪もないお上人さまを叩いたのだから、罪から逃れることはできない。さあ、彼を殺そう」と土塊や棒を持って婆羅門の家の戸口に立った。サーリピッタ長老は「食事を済ませ」立ち上がって帰ろうとして、婆羅門の手に鉢を渡した。人々は婆羅門が長老と一緒に歩いてくるのを見て、「尊師よ、あなたさまの鉢を取り戻して、婆羅門を止めてください」と言った。「在家信者たちよ、これはどういうことですか。」「婆羅門にあなたさまが叩かれました。私たちは彼にどうすべきか知っています。」「彼に叩かれたのはあなたがたですか、それとも私ですか。」「あなたさまです、尊師よ。」「彼は私を叩いて、謝りました。あなたがたは帰りなさい」と人々を解散させ、婆羅門も帰らせて、長老は精舎に帰った。

比丘たちは不満に思った。「いったいこれはどういうことだろう。サーリピッタ長老は婆羅門に叩かれたのに、その婆羅門の家にすわって托鉢の食を受けて戻つて来ました。長老が叩かれたときから、今、彼は誰に恥じているというのですか。他の人々も叩いてまわるでしょう。」師が来られて、「比丘たちよ、いったい何の話で今ここに集まつてすわっているのですか」とお訊ねになると、「しかじかのことござります」と比丘たちが答えたので、「比丘たちよ、婆羅門が婆羅門を叩くということはありません。家に住む婆羅門が修行者の婆羅門を叩いたのでしよう。不還果に到達した者に、怒りというものは完全に滅んでいます」とおっしゃつて、法を説き明かしつつ、次の時句を唱えられた。「389 婆羅門を打つな、婆羅門は打つた人に怒りを放つな、婆羅門を打つ者は恥を知れ、彼に【怒りを】放つ者は恥を知れ。」と。「390 好ましく思うものから心を制御するならば、婆羅門にとつてそれより良いことはない。害したい思いを制するにつれ、それだけ苦悩は静まる。」と。

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.242 (2015年4月) 聖者をモデルにして生きる 聖者と付き合うことで幸福になる Follow the footsteps of the enlightened ones.

389.Na brāhmaṇassa pahareyya Nāssa muñcetha brāhmaṇo Dhī brāhmaṇassa hantāram Tato dhī yassa muñcati

390.Na brāhmaṇassetadakīñci seyyo Yadā nisedho manaso piyehi Yato yato himsamo nivattati Tato tato sammatimeva dukkham

389. バラモンを打つことなけれ バラモンに憤り放つことなけれ バラモンを打つは厭(いと)わしい [バラモンに] 憤り放つことはさらに厭わしい

390. それよりも優れたことあり [バラモンに] 好意を持ち心制御すること [バラモンへの] 害意を消してゆくこと その度に苦しみは消えてゆく 訳：アルボムッレ・スマナサーラ

389. Na brāhmaṇassa pahareyya, nāssa muñcetha brāhmaṇo; Dhī [dhi (syā. byākarañesu)] brāhmaṇassa hantāram, tato dhī yassa [yo + assa = yassa] muñcati.

389.婆羅門を打たないように。婆羅門は、彼(婆羅門を打つ者)に、【怒りの思いを】解き放たないように。婆羅門を傷つける者は、厭わしい。彼(婆羅門を打つ者)に、【怒りの思いを】解き放つなら、彼(婆羅門を打つ者)よりも、厭わしい。

ナ ブラーフマナッサ パハレッヤ ナッサ ムンチエータ ブラーフマノー¹
Na brāhmaṇassa pahareyya, nāssa muñcetha brāhmaṇo;
ないように。婆羅門を 打た ないように。彼(婆羅門を打つ者)に、【怒りの思いを】解き放た 婆羅門は、
なけれ バラモンを 打つこと なけれ 憤り放つこと
Na/ brāhmaṇassa/brāhmaṇa : ①(m.sg.dat)[〃]婆羅門,婆羅門族; (仏を指すこともある)②(n)[= brahmañña]梵位,梵天たること
pahareyya/paharati(v.opt.3sg)[pa-hr]打つ,伐つ, nāssa=na/+assa/ima(指代.m.sg.gen)これ muñcetha/muñcati(v)脱す,のがれる,自由になる,放つ(言葉を) brāhmaṇo/brāhmaṇa : ①(m.sg.nom);

ディー ブラーフマナッサ ハンターラン タト一 ディーヤッサ ムンチャティ
Dhī brāhmaṇassa hantāram, tato dhī yassa muñcati.
厭わしい。婆羅門を 傷つける者は、彼(打つ者)よりも、厭わしい。彼(打つ者)に、【怒りを】解き放つなら、
厭(いと)わしいバラモンを 打つは【攻撃非難侮辱】 さらに 厦わしい [バラモンに] 憤り放つことは
Dhī/dhi:,dhī(interj)[Sk.dhik][acc.gen.と共に]厭わしきかな,いやらしい brāhmaṇassa/brāhmaṇa : ①(m.sg.gen) hantāram/hantar(m)
[<han hanati]殺害者←hanati:hanti(v)[han]殺す,害す,破壊す,打つ←garahati(v)[Sk.garhati garh]呵責す,叱る,非難す., tato/tato[taのabl]そこから;それより,それ故に,その後 dhī/ yassa/ya(関代 m.sg.dat)[Sk.yah]~である人,~であるもの muñcati/muñcati(v)脱す,のがれる,自由になる,放つ(言葉を).

390. Na brāhmaṇassetadakiñci seyyo, yadā nisedho manaso piyehi; Yato yato himsamanō nivattati, tato tato sammatimeva dukkham.
390. すなわち、諸々の愛しいものからの慎みの意あるとき、婆羅門にとって、このことは、〔他の何よりも〕少なからず、より勝っている。害する意が消える、そのたびごと、そのたびごとに、苦しみは、まさしく、静まる。

ナ ブラーフマナッセータダキン セッヨー ヤダー ニセード マナソー ピイエーヒ
Na brāhmaṇassetadakiñci seyyo, yadā nisedho manaso piyehi;
婆羅門にとって、このことは、少なからず、より勝っている。すなわち、慎みの意あるとき、諸々の愛しいものからの
それよりも優れたことあり
Na/ brāhmaṇassetadakiñci=brāhmaṇassa/brāhmaṇa : ①(m.sg.gen)+etad/eta,etad(pron.a.n.sg.nom)これ+kiñci/ka(pron.interr 疑代.有持)[Sk.kah](m)ko(f)kā(n)kim 何,誰,どの seyyo/seyya(a.n.sg.nom)よりよき,よりすぐれた, yadā/yadā(adv)...の時に
nisedho/nisedha : ①(m.sg.nom)[Sk.niṣedha <nisedheti]防止,抑止,禁止② nisedheti の imper←nisedheti(v)[Sk.nisedhayati.ni-sidh の caus]防ぐ,抑止す,禁止す manaso/mano:manas(n.sg.gen)意,心 piyehi/piya : ①(a.m.n.pl.abl)[Sk.priya]愛,可愛の,所愛②(m)[=phiya]櫂,かい;

ヤトーヤトーヒンサマノーニワッタティ タトータトー サンマティメーワ ドウッカン
Yato yato himsamanō nivattati, tato tato sammatimeva dukkham.
そのたびごと、害する意が消える、 そのたびごと、まさしく、静まる。 苦しみは、
〔バラモンへの〕害意を消してゆくこと【社会の非難から守る】 その度に 消えてゆく 苦しみは
Yato/yato(adv)[ya:abl]そこから,なるが故に,何となれば←ya(関代)[Sk.yah]~である人,~であるもの yad-agge,yad-aggena=yato patṭhaya それより以来 yato/ himsamanō =himsa/himsā(f依属)[〃 <hims]殺,害-mano 害意,殺意+mano/ mano:manas(n.sg.nom)意,心 nivattati/nivattati(v.pr.3sg)[Sk.nivartati <vr̥t]戻る,逃げる,消失す, tato/tato[taのabl]そこから;それより,それ故に,その後~tato/ sammatimeva=sammati/sammati : ①(v.pr.3sg)[Sk.śamyati śam ①静まる,寂止す,休息す,住む②(v)[Sk.śrāmyati śram]疲れる③(v)[Sk.śamyati śam ②働く,満足する④(f)[=sammuti <sam-man]-ñāna 世俗智-deva 世俗天-santi 世俗寂+eva/eva(adv)が,こそ,のみ,だけ[yeva,ñeva,va,となることがある] dukkham/dukkha(a.n.sg.nom)苦,苦痛,苦惱.

(26-8) Mahāpajāpatigotamīvathu マハーパジャーパティー・ゴータミーの物語 391

◆ yassa kāyena vācāyāti imam dhammadesanam satthā jetavane viharanto mahāpajāpatim gotamim ārabbha kathesi.
この法話は、師がジャーヴァナ精舎に滞在しておられたときに、マハーパジャーパティー・ゴータミーについて語られたものである。

この話の前に、世尊によって〔比丘尼の〕ハつの尊敬の法が定められたとき、飾りを好む人が芳香のある花輪を頭で受けるように同意して、仲間の女性たちとともにマハーパジャーパティー・ゴータミーが(師から直接)具足戒を受けた。彼女には〔師以外〕他に和尚も阿闍梨もなかった。bhagavatā hi anuppanne vatthusmiñ paññātatte atṭha garudhamme mañḍanakajātiyo puriso surabhipupphadāmām viya sirasā sampaṭicchitvā saparivārā mahāpajāpati gotamī upasampadām labhi, aññō tassā upajjhāyō vā ācariyo vā natthi.

このようにして具足戒を受けた長老尼について、後に〔他の比丘尼たちの間で〕話が持ち上がった。「マハーパジャーパティー・ゴータミーには阿闍梨も和尚もいません。自分の手で袈裟をまといました」と、このように言って、比丘尼たちが(ゴータミーの具足戒について)疑念をもち、マハーパジャーパティー・ゴータミーと一緒に布薩も雨安居の終了式も行わなかった。ゴータミーは行って如米にそのことを申し上げた。師は比丘尼たちの話をお聞きになって、

「私はマハーパジャーパティー・ゴータミーにハつの尊敬の法を授けました。私が彼女の阿闍梨であり、私が和尚です。身体による悪い振る舞いなどがない煩惱を滅し尽した阿羅漢たちに、疑いを抱くべきではありません」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「391 その人に、身体による、言葉による、心による悪い振る舞いがなく、これら三つの場所で制御されているその人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。
法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.244 (2015年6月) 権威の導き 正しい生き方を選ぶガイドライン Authority

391.Yassa kāyena vācāya Manasā natthi dukkataṁ Samvutam tīhi thānchi Tamahām brūmi brāhmaṇam
391.身にも語にもまた意にも 悪しき行為が見られない 三処に防護している者 かれを私はバラモンと呼ぶ
訳:片山一良『ダンマパダ全詩解説』大蔵出版より
解脱者を調べる方法

修行を始める仏弟子が、解脱に達している指導者を dhamma と vinaya に照らし合わせて発見しようと思っても、お手上げ状態になるのです。お釈迦様もそれを知っていたので、「人の身口意の行為を調べなさい」と、分かりやすい言葉で説かれたのです。

391. Yassa kāyena vācāya, manasā natthi dukkataṁ; Samvutam tīhi thānchi, tamahām brūmi brāhmaṇam.
391.彼に、身体(身)と言葉(口)と意(意)による悪行が存在しないなら、三つの境位(身・口・意の三業)によって〔自己が〕統御された者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヤッサ カーイエーナ ワーチャーヤ マナサー ナッティ ドウッカタン
Yassa kāyena vācāya, manasā natthi dukkataṁ;
彼に、身体と 言葉と 意による 存在しないなら、 悪行が
Yassa/ya(関代 m.sg.gen)[Sk.yah]~である人,~であるもの kāyena/kāya(m.sg.inst)身,身体,集まり vācāya/vācā(f.sg.inst)語,言, manasā/mānasa(n.sg.inst)mānasāna(a)[=manas]意,心意 na/+atthi/atthi : ①(v.pr.3sg)[Sk.asti <as]ある,存在する②[Sk.asti]有,存在 dukkataṁ/dukkata:;dukkata(n.sg.nom)[Sk.duṣṭṛta]悪作,突吉羅-ajjhāpanna 突吉羅犯戒者-kamma 悪行;

サンウタン ティーヒ ターネーヒ タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Samvutam tīhi thānchi, tamahām brūmi brāhmaṇam.
統御された者であり、三つの 境位(身口意の三業)によって 彼をわたしは、説く。 「婆羅門」と
Samvutam/samvuta(a.m.sg.acc)←samvarati(v.pp)[sam-vr]防護す,制御す tīhi/tayo(num.n.inst)[ti の m.Nom.Acc.Sk.trayas.trayo]三 thānchi/thāna(n.pl.inst)[Sk.sthāna <sthā]処,場所,住処,在定,状態,点,理由,原因,道理, tamahām/ brūmi/ brāhmaṇam/.

(26-9) Sāriputtatheravatthu サーリプッタ長老の物語(4)方角を礼拝していると誤解されたサーリプッタ長老 392
◆ yamhāti imam dhammadesaññā satthā jetavane viharanto sāriputtatherañā ārabba kathesi.
この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、サーリプッタ長老について語られたものである。

サーリップタ長老は尊者アッサジ長老から法を聴いて頂流果に達したときから、どの方角にアッサジ長老がいると聞くと、そちらに合掌し、そちらに頭を向けて寝た、ということである。比丘たちは、「サーリップタは間違った見方をする者だ。今日も方角を礼拝している」と、そのことを如来に告げた。

師はサーリップタ長老を呼びにやらせて、「サーリップタよ、あなたが方角を礼拝しているというのはまことですか」とお訊ねになると、「尊師よ、私が方角を礼拝しているのかそうでないかは、あなたさまがご存知です」と答えた。師は、「比丘たちよ、サーリップタは方角を礼拝しているのではありません。阿闍梨によって法を知った比丘は、婆羅門が火を拝むように、阿闍梨を礼拝すべきです」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「392 正しく覚ったお方に
よって説かれた法を誰かから教えられたら、その人を歩しく礼拝すべし、婆羅門が火の神を祀るよう。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.245 (2015年7月) 師匠 正しい生き方を選ぶガイドライン Authority

392. Yamhā dhammam vijāneyya, Sammāsambuddhadesitam; Sakkaccaṁ tam namasseyya, Aggihuttamva brāhmaṇo.

ブッダの説きし教法をいかなる人から学ぶとも それなる人を敬(けい)すべし 火(アッギ)神を祀(まつ)るバラモンが祭火を
敬(うやま)い拝すごと 訳:江原通子

師匠は尊敬に値する

サーリップタ尊者は出家してから、真理を探し求める旅に出ました。様々な宗教家の教えをいただいたが、納得いく答えは得られなかつたのです。最後に、いかなる問題に対しても明確な答えを何一つも出さない、という主張を持つサンジャヤ師（六師外道と言われる宗教家の一人です）のところに留まつていたのです。

ある日、托鉢しているときに、お釈迦さまの最初の五人弟子の一人だったアッサジ尊者と出会います。完全たる安穩に達していたアッサジ尊者にこころ惹かれて、教えを請うたのです。アッサジ尊者は、自分は釈尊の弟子であるが、詳しく説法できないと述べて辞退します。サーリップタ尊者は、「私に詳しく説法する必要はありません。ご自分が知っている真理を、一行だけでも充分なので教えてください」と頼んだのです。アッサジ尊者は、一偈を教えます。

Ye dhammā hetuppabhavā Tesam hetum tathāgato āha

Tesañca yo nirodho Evamvādī mahāsamano

すべての現象は原因により生じます。如来はその原因を説かれました。

またその原因が滅することも。これが大沙門の教えです。

〔211 Vinayapitake 律藏 2.Khandhaka 健度 1.Mahāvaggapāli 大品(大篇) 1. Mahākhandhako 大建度 23-5.〕
という偈です(律藏大品)。

サーリップタ尊者は、「すべての現象は原因により生じます」という一行目を聴いた瞬間で、預流果に覺ります。そして、その瞬間に仏弟子となったのです。要するに、サーリップタ尊者に真理を教えた師匠はアッサジ尊者なのです。サーリップタ尊者は、智慧の第一であるだけでなく、謙虚な方としても第一の方です。たとえ一偈であっても、自分に真理を教えて、一切の苦から脱出する方法を示してくれたアッサジ尊者を、一生、師匠として尊敬したのです。アッサジ尊者がどこに住んでいても、その方角には脚を向けて休みません。毎日、休みに入る前に、師匠に礼をするのです。師匠がそばにいてもいなくとも、サーリップタ尊者はその習慣を絶やさなかったのです。お釈迦さまは、「サーリップタ尊者はバラモン教の迷信を続いているのではなく、聖火を命と同じく大事にするバラモン人のように、自分に真理を教えた師匠を大事にしているのだ」と、比丘たちに教えてあげたのです。

392. Yamhā dhammam vijāneyya, sammāsambuddhadesitam; Sakkaccam tam namasseyya, aggihuttamva brāhmano.

392. 彼から、正自覺者によって説示された法（真理）を識知するなら、謹んで、彼を礼拝するがよい——婆羅門が、祭火に捧げものを【献じる】ように。

ヤンハ一	ダンマン	ヴィジャーネッヤ	サンマーサンブッダデースイタン
Yamhā	hammadam	vijāneyya,	sammāsambuddhadesitam;
彼から、	法(真理)を	識知するなら、	正自覺者によって説示された
Yamhā/ya(関代 n.sg.abl)[Sk.yah]~である人,~であるもの			dhammadam /dhamma(m.n.sg.acc)法,教法,真理,正義
vijāneyya/vijāneyya(opt.3sg)←vijānāti(v.opt)[// vi-jñā]了知す,了別す,識知す,			sammāsambuddhadesitam=sammā : ①(adv)
[Sk.samyak]正しく,完全に			sammāsambuddha 正等覺者,三藐三佛陀②[samma ①の pl] 友等よ+sambuddha/sambuddha(a.m)
[sambujjhati の pp]よく覚れる,正覺者,等覺者+desitam/desita(am.n.sg.acc)←deseti(v.pp)[disati diś: caus]示す,指示す,教示す,懲悔す;			

サッカッチャン タン ナマッセッヤ アッギフタソワ ブラーフマノ
 Sakkaccaṃ tam namasseyya, aggihuttamva brāhmaṇo.
 謹んで、 彼を 礼拝するがよい 祭火に捧げものを〔献じる〕ように。 婆羅門が、
 Sakkaccaṃ/sakkacca: sakkaccaṃ(adv)[sakkaroti の ger]恭敬して、尊敬して、うやうやしく tam/ta(人指示代 m.sg.acc)彼、その、彼女 namasseyya/namassati(v.opt.3sg)[Sk.namasyati.namo の denom]礼拝す、拝む、aggihuttamva=aggi/aggi(m 依与)火、火神、火天 +huttam/hutta(n.sg.acc)[Sk.hotra]供儀、供物+iva/iva(indecl) // BSk.viva]如く=viva.va brāhmaṇo/brāhmaṇa: ①(m.sg.nom).

(26-10) Jatilabrahmaṇavatthu 結髪外道の婆羅門の物語 393

◆ na jaṭāhiti imam dhammadesanam satthā jetavane viharanto ekam jaṭilabrahmaṇam ārabbha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ある結髪行者の婆羅門について語られたものである。

彼は、「私は母方からも父方からも、生まれの良い婆羅門の家に生まれた。修行者ゴータマは自分の弟子たちを『婆羅門』と呼んでいる。私をも同じように呼ぶべきだろう」と、師のもとへ行き、そのことを訊ねた。すると、師は彼に、「婆羅門よ、私は結髪しているだけで、生まれや家系だけで、婆羅門とは呼びません。真理をよく洞察した者を、私は『婆羅門』と呼ぶのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「393 結髪により、家柄により、生まれにより、婆羅門なのではない。真理と法がある人、その人こそは幸せであり、婆羅門である。」と

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.246 (2015年8月) 宗教と迷信は仲がいい 閉鎖的宗教 VS 開放的仏教 Religions are closed systems.

393.Na jatāni na gottena Na jaccā hoti brāhmaṇo Yamhi saccañca dhammo ca So sucī so ca brāhmaṇo

393.螺髪(らほつ)にぞより はた姓により 生れ乍(なが)らのバラモンなし 彼に真理と法あらば 彼は幸(さち)ある婆羅門
(ブーラーフマナ)訳:江原通子

393.螺髪を結うことによって、また氏姓によって、生まれによって、バラモンなのではない。誰かに真理と法があるならば、その人こそ清らかな者であって、その人こそバラモンである 訳:スマナサーラ長老

聖職者

仏教の聖職者は、出家と言います。「俗世間的な生きかたから離れた」という意味です。出家に定まった住所はありません。旅人です。目的地があって旅するのではなく、修行しながら旅をするのです。ブッダの時代、出家は皆、遊行者でした。仏教が世に広まり始めると、寺や修行道場などが建立されたので、遊行することも無くなりました。聖職者を指す英語の単語はたくさんあるが、仏教の出家に相応しい単語は見当たらないのです。

仏教の出家は単独行動しません。出家というコミュニティの決まりを厳密に守らなくてはいけないです。出家の一人暮らしは強く推薦されていますが、月二回、コミュニティのメンバーたちは一ヵ所で集わなくてはいけないです(布薩)。このコミュニティをサンガと呼ぶのです。仏教の出家を指す「僧侶」とは、サンガの一員という意味の言葉です。この言葉を使う時も、問題が起きます。サンガ組織を定めたのはお釈迦様です。その決まり・規則などは、勝手に変えることも改良することもしないのです。要するに、規則に反する生きかたをするならば、サンガの一員として問題児になります。資格を失う可能性もあります。正しく言えば、お釈迦さまの定められた規則・決まり・戒律を守るコミュニティがサンガになるはずです。

しかし、他の宗派も仏教を実践するコミュニティなので、「異端者、余所者」などの批判的な単語を使って排除することはできないと思います。それから、仏教のサンガによく見える問題は、結婚する僧侶もしない僧侶もいることです。時々、同じ宗派のなかにも、二種類の僧侶が混在しています。仏教を英語で学ぶ人々は、Buddhist priest と Buddhist monk という二つの単語でこの区別を理解します。Priest とは結婚する僧侶で、monk とは結婚しない僧侶です。テーラワーダ仏教の聖職者は、すべて monk のです。

職業

宗教家が俗世間の要求に応じて、祈りなどのサービスをして報酬を得ているならば、それは明らかに職業です。聖職者という単語に相応しいのです。職業としての宗教は、祈り・祈祷などを行なって、人々の迷信を応援する組織です。

真のバラモン

お釈迦さまは迷信・占いなどはすべて、無知な人々の無駄な行為であると批判しました。占い学、占星学、方位学などは「畜生の学問」であると言われたのです。この場合の畜生とは、「理性のあるまともな人間ならやらない」という意味です。

(私見ですが、占い師も占ってもらう人も、お釈迦さまには原始人のように見えたことでしょう。)

人々の迷信を応援するのではなく、理性ある人間に成長させて、現実をありのままに把握できる能力を育ててあげることが、宗教の仕事でなければならないのです。そこでお釈迦さまは、ご自身の説かれた「中道」を実践して心を完全に清らかにした方々に、ある名前をつけました。「バラモン」という称号です。生まれのバラモンたちから、聖職者としての専売特許を剥奪したのです。お釈迦さまはバラモンの血筋に生まれた人のことも「バラモン人」と呼びますが、聖職者としての立場は認めないので。特別な衣装を着ているからといって、髪を螺髪形にしたからといって、両親がバラモン・カーストであるからといって、人はバラモンになりません。真理を発見して、心を完全に戒めた人こそが、真のバラモンなのです。

393. Na jatāhi na gottena, na jaccā hoti brāhmaṇo; Yamhi saccañca dhammo ca, so sucī so ca brāhmaṇo.

393.結髪にあらず、氏姓にあらず、出生にあらず——〔彼が〕婆羅門と成るのは。彼において、しかし、真理があり、かつまた、法(教え)があるなら、彼は、清らかな者であり、しかし、彼は、婆羅門と〔成る〕。

ナ ジャターヒ ナ ゴッテーナ ナ ジャッチャー ホーティ ブラーフマノー^ナ
Na jatāhi na gottena, na jaccā hoti brāhmaṇo;
結髪にあらず、氏姓にあらず、出生にあらず——〔彼が〕婆羅門と
Na/ jatāhi/jāta(a.f.pl.inst) // janati の pp]生ぜる,発生の,生起の na/ gottena/gotta(n.sg.inst)[Sk.BSk.gotra]姓,氏姓,種姓,家系, na/
jaccā/jacca(a.f.sg.inst)[Sk.jātya,jāti-ya]生れの,生来の hoti/hoti(v.pr.3sg)=bhavati(v)[bhū] ある,存在する brāhmaṇo/brāhmaṇa :
①(m.sg.nom)

ヤンヒ サッチャンチャ ドンモー チヤ ソー スチー ソー チヤ ブラーフマノー^ヤ
Yamhi saccañca dhammo ca, so sucī so ca brāhmaṇo.

彼において、真理があり、かつまた、法(教え)があるなら、彼は、清らかな者であり、彼は、婆羅門と〔成る〕。

Yamhi/ya(閑代 n.sg.loc)[Sk.yah] ~である人, ~であるもの saccañca=saccañ/sacca(n.sg.nom)[Sk.satya,sat-ya]真実,諦,真理
+ca/ca(conj)~と,また,しかし,~も,そして dhammo/ dhamma(m.n.sg.nom)法,教法,真理,正義 ca/, so/ta(人指示代 m.sg.nom)彼,そ
の,彼女 sucī/suci(a.n.sg.nom)[Sk.suci]淨き,清淨の,清淨 so/ ca/ brāhmaṇo/brāhmaṇa : ①(m.sg.nom).

(26-11) Kuhakabrahmaṇavatthu 嘘つき婆羅門の物語 394 Godha-jātaka(138) Godha-jātaka(325) Romaka-jātaka(277)
◆ kim teti imam dhammadesanaṁ satthā kūtagārasālāyam viharanto ekam vaggulivatam kuhakabrahmaṇārabbha kathesi.
この法話は、師が〔ヴェーサーリー市の近くの大森林〕重閣講堂に滞在しておられたときに、蝙蝠(こうもり)の真似をする、ある嘘つき婆羅門について語られたものである。

この婆羅門は、ヴェーサーリー市の門の一本のカクダ樹に登って、二本の足で枝を掴み、頭を下にしてぶら下がって、「私に百カピラを与えよ、カハーバナ金貨を与えよ、妻を与えよ。もし私に与えないなら、ここから落ちて死んで、都を都でないように破壊してやる」と言っていた。

如来が比丘サンガに囲まれて都に入るとき、比丘たちがこの婆羅門を見て、都から出るときにも同じようにぶら下がっているのを見た。都の人々も「彼は朝早くからあのようにぶら下がっているが、落ちて都を都でないように破壊するかもしれない」と考え、都が破壊される恐怖から、彼が要求するものすべて聞き入れて与えた。彼は木から降りて、「差し上げます」というものをすべて持って立ち去った。

比丘たちは、精舎の近くで彼が牝牛のようにうろついて歩いているのを見て、その婆羅門だとわかり、「婆羅門よ、あなたは望んだ通りに手に入れましたか」と問うと、「いかにも、私は手に入れましたよ」と答えるのを聞いて、精舎の中の如来にそのことを申し上げた。

師は、「比丘たちよ、彼が嘘つきの泥棒なのは、今生だけではありません。過去世でも嘘つきの泥棒でした。今は愚かな人々を欺いていますが、過去世では賢人たちを欺くことはできませんでした」とおっしゃって、比丘たちに請われて過去の事を取り出された。

過去物語

昔、ある農村の近くに、嘘つきの苦行者が住んでいた。彼をある家族が面倒をみていた。昼は用意した硬い食べ物と軟らかい食べ物から、自分の息子たちに与えるように、彼にも一人分の食事を与えた。夕方にも用意した一人分の食事を取り分けておき、次の日に与えた。

さてある日、夕方にトカゲの肉が手に入ったので、家の人々は美味しく調理して、そこから一人前を取り分けて次の日に苦行者に与えた。苦行者は肉の匂いを嗅いで、肉の味に執着し、「これは何の肉ですか」と尋ねて、「トカゲの肉です」と聞くと、托鉢に歩いて、ギーとヨーグルトと香辛料などを手に入れて草庵に帰り、一箇所に置いた。

草庵のほど遠からぬところに蟻塚があり、トカゲの王が住んでいた。トカゲ王は折々、苦行者を礼拝しに来ていた。しかしその日、苦行者は「あれを殺そう」と棒を隠し持って、その蟻塚の近くで眠ったふりをしてすわっていた。トカゲ王は蟻塚から出て苦行者のそばに近づいたときに、その姿を見て思い巡らし、「今日は、師匠の様子が私には好ましくない」と、そこから引き返した。

苦行者はトカゲ王が引き返したことを知ると、トカゲ王を殺そうと棒を投げた。棒は逸れて飛んだ。トカゲ王は蟻塚に入り、そこから頭を出して見回しながら、苦行者に向かって唱えた。「あなたを修行者と思い、自制のない者に私は近づいた。そのあなたは私を棒で打とうとした、修行者にあるまじき者として。愚か者よ、あなたの髪は何になろう、あなたの鹿皮の衣は何になろう。あなたの内には〔執着の〕密林があるのに、外だけ綺麗に磨いている。」と。

すると、苦行者は自分の持っているもので彼を誘おうとして、次のように唱えた。「来たまえ、トカゲよ、戻っておいで、サーリ米のご飯を食べたまえ。私はゴマ油も塩も持っている。私にはたっぷりの胡椒もある。」と。それを聞いてトカゲ王は「あなたが語れば語るほど、私は逃げなくなりますよ」と言って、次の詩句を唱えた。「それならいっそう、私は、百人の高さの蟻塚に入ろう。あなたはゴマ油や塩を讚えるが、私に胡椒は益にならない。」と。

このように唱えて、「私はこれまでのあいだ、あなたを修行者だと思っていました。しかし今、あなたが私を打とうとして棒を投げました。棒が投げられたまさにそのとき、あなたは偽修行者になりました。あなたの頭の悪い人間に〔修行者の印の〕髪は何になります。蹄のついた鹿皮の衣は何になります。というのも、あなたの内には〔欲望などの〕密林があり、ただ外だけを磨いているのですから」と言った。(過去物語終わり)

師はこの過去物語を取り出されて、「そのとき、この嘘つきは苦行者でした。そしてトカゲ王はこの私でした」とおっしゃって、過去物語を締めくくられ、そのときトカゲ賢者によって偽苦行者が打ち負かされたことを示しつつ、次の詩句を唱えられた。「394 愚か者よ、あなたの髪は何になろう、あなたの鹿皮の衣は何になろう。あなたの内には「執着の」密林があるのに、外だけ綺麗に磨いている。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.247 (2015年9月) 納得することが仏道の初歩です 信仰は不治の疑を生む Faith goes with ignorance; confidence goes with wisdom.

394. Kim te jatāhi dummedha Kim te ajinasātiyā Abbhantaram te gahanam Bāhiram parimajjasi

394. 愚かなものよ 髪を結(ゆ)い 皮衣(かわごろも)着て何になる おんみら内に欲茂り 外は見掛けを掃き清む 訳:江原通子

394.愚者よ、結髪が何になる そなたに皮衣が何になる そなたは内に密林があり 外を磨いているばかり 訳:片山一良 『ダンマパダ全詩解説』大蔵出版より

一番の難問

「ブッダの教えは宗教ではない」ことが、仏教を拡げるうえで一番の難問なのです。シッダールタ王子は出家して、宗教家の仲間にいました。宗教のお世話をならず、自分一人の努力で真理を発見したのに、世界はお釈迦さまが宗教の仲間から脱出したことを認めないのでした。もし釈尊が在家に戻って真理を語ったならば、仏教は宗教ではないと思われたことでしょう。しかし、一切の煩惱を断った釈尊は、煩惱の衝動で生きる俗世間に戻れないのです。肥溜めから抜け出した人が、再び

肥溜めに身を沈めるはずはないのです。

世界は「釈尊も宗教家の一人である」と固く信じているのに、お釈迦さまは信仰となんの縁も無い科学的な教えを広めなくてはいけなかったのです。それから、地球は平らであると思っていた時代に、宇宙は無限の広がりを持つと説かなければいけなかったのです。お釈迦さまの時間間隔は、日夜に限られたものではありません。時を数える単位は、ひとつの宇宙（もしかすると太陽系かもしれません）が現れて消えるまでの時間（劫）なのです。現代的な知識を持っているならば簡単に語られる事実を伝えるために、さまざまな比喩やエピソード、例え話などを駆使しなくてはいけなかったのです。

一般人にいちばん分かりにくい難解な教えは、因果法則です。一切の生命も、物理的な宇宙も、因果法則によって一時的に成り立っているのです。「人間は死にますが、神になったら死なない生命体になります」と信じていた人々に、因果法則に沿った無常論を説得することは、不可能に近い仕事です。物質の因果関係をある程度発見することで、現代科学があらわれているのです。しかし科学者は、因果法則のすべては発見していません。特に、こころに関わる因果法則を発見する努力は、いまだに行われていないのです。お釈迦さまは、現代的な科学の思考が無かった次代に、完成された科学を説き明かさなくてはいけなかったのです。

昔も今も、知識は五根から入る情報を合成することで成り立っています。正しく言えば、知識とは真理ではなく、捏造した主観なのです。お釈迦さまはこの捏造した主観の壁を破って、ありのままの真理を説かなくてはいけなかったのです。お釈迦さまが行なった仕事は、人間にも神々にもできる業（わざ）ではありません。正覚者であるブッダにしかできない仕事なのです。

宗教と仏教の違い

常識的な服装を身に纏わないことも、魂を浄化する一つの方法です。方法はいくらでも考えられますが、根本的に間違っています。魂が実在するか否かを誰も知らないのです。ブッダは明確に、「永遠不滅の魂は存在しない」と語られています。すべて因果法則なので、すべての現象は無常です。

ある日、お釈迦さまが一人の螺髪を結った行者に会ったのです。螺髪を解いて洗ったりはしないで、頭はシラミだらけです。彼はけっこう苦しんでいたことでしょう。また、服の代わりに鹿の皮を纏っていたのです。鹿の皮は、硬くて着られるものでもありません。鞣（なめ）すこともしないで、自然のままの皮を着なくてはいけないです。現代的な革ジャンを着て、革パンツを履いていても、修行しているとは言えないでしょう。この行者は、「自分は眞面目な修行者である」と傲慢な態度でいたのです。

お釈迦さまにしてみれば、その人がやっていることはなんの意味も持たない無駄な行為です。鹿の皮を着て、汚い身体で苦労しても、存在もしない魂が浄化されるはずはないのです。結果は、精神的に悩むことだけです。苦行する自分を苦行しない俗世間と比較して、傲慢になっているのです。こころのなかは、怒り・嫉妬・憎しみ・傲慢・無知などで激しく汚れています。そこでお釈迦さまは、彼にこのように語りかけるのです。「あなたの螺髪にはなんの意味もありません。あなたが着ている鹿の皮にはなんの意味もありません。あなたのこころには藪が茂っています。あなたは見かけを整えようとしているだけです。」

この言葉にも、宗教的な世界を背景にして科学的な真理を語ることの難しさを感じます。老いて壊れてゆく肉体を整えても、なんの意味もありません。人々は、こころを清めるべきです。こころを清める前に、こころがどのように汚れているのか、なぜ汚れるのか、汚れはどれくらいあるのか、などを明確に知ってから、こころ清らかにする実践に励むべきなのです。

宗教は、外のみかけを気にする儀式・儀礼・祈祷・供養・祈り・信仰・迷信の神秘的な世界です。仏教は、宗教的なものに一切頼らず、こころを整えて清らかにする具体的な世界です。

394. Kim te jatāhi dummedha, kim te ajinasātiyā; Abbhantaram te gahanam, bāhiram parimajjasi.

394.思慮浅き者よ、あなたにとって、諸々の結髪が、何になるというのだろう。あなたにとって、皮衣が、何になるというのだろう。あなたには、内なる収め取り（執着）がある。〔あなたは〕外に〔見てくれを〕縫っている。

キン テー ジャターヒ ドウンメーダ キン テー アジナサーティヤー
Kim te jatāhi dummedha, kim te ajinasātiyā;
何になるというのだろう。あなたにとって、諸々の結髪が、思慮浅き者よ、何になるというのだろう。皮衣が、
何になるというのだろう。あなたにとって、諸々の結髪が、思慮浅き者よ、何になるというのだろう。皮衣が、
Kim/ ka(pron.interr 疑代 n.sg.nom)[Sk.kah](m)ko(f)kā(n)kim 何,誰,どの te/tvam:tumha(人代 sg.gen)汝,あなた jatāhi/jatā(f.pl.inst)
[BSk.jatāf]結縛,縛,結髪 dummedha/dummedha(a)[du-medha,Skt.durme-dha]愚かな,暗愚の,浅はかな,無知の,愚癡の,智慧の乏しき, kim/ te/tvam:tumha(人代 sg.gen)汝,あなた ajinasātiyā=ajina/ajina(n 依属)[〃]羊皮,羚羊(かもしか)皮,皮衣
+sātiyā/sāta(m),sāf(f.sg.gen)[cf.Sk.sāta]衣,衣服;

アッバントラン テー ガハナン バーヒラン パリマッジャスイ
Abbhantaram te gahanam, bāhiram parimajjasi.
内なる あなたには、収め取り(執着)がある。 外に [見てくれを]縫っている。
Abbhantaram/abbhantara(a.n.sg.nom)[abhi-antara] : ①=antara 内の,真中の; 内部 : ②[長さの量]14 肘(腕尺) te/tvam:tumha(人代 sg.gen)汝,あなた gahanam/gahana(n.sg.nom)[〃]密林,薮,叢,くさむら, bāhiram/bāhira(a.m.sg.acc)[<bahi]外の,外部の parimajjasi/parimajjati(v.pr.2sg)[pari-mrj]掃く,触れる,こする,磨く.

(26-12) Kisāgotamīvatthu キサー・ゴータミーの物語(3) — 畿掃衣をまとう比丘尼の第一 395

◆ pamsukūladharanti imam dhammadesanam satthā gijjhakūte pabbate viharanto kisāgotamī ārabba kathesi.

この法話は、師が〔ラージャガハ市の近郊の〕〈鷲の峰〉に滞在しておられたときに、キサー・ゴータミー比丘尼について語られたものである。

そのとき、サッカは夜の最初の更の終わりに神々を伴にして師に近づき、礼拝し、記憶に残る法話を聴きながら一隅にすわっていた。ちょうどそのとき、キサー・ゴータミーは「師にお会いしよう」と空を飛んでやって来たが、サッカを見て戻って行った。サッカは彼女が礼拝してから引き返すのを見て、師に質問した。「尊師よ、やって来て、あなたさまを見て帰ったのは、どなたですか。」師は、「キサー・ゴータミーです、大王よ。私の娘で、畿掃衣(粗末な衣)をまとう長老尼たちの第一です」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「395 畿掃衣をまとう人、瘦せて〔浮き出た〕静脈が広がり、独り森で瞑想する、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.248 (2015年10月) ほどほどは「中道」ではない 修行は見た目より中身 Practice is not a ritual.

395.Pamsukūladharam jantum Kisam dhamanisanthatam Ekam vanasmim jhāyantam Tamaham brūmi brāhmanam.

395.畿掃衣(ふんぞうえ)着て いと瘦せて 血の管浮かび 森深く たゞ独り坐す禪定者 そをバラモンと我は説く 訳:江原通子

みにくいボロ服をまとい、やせほそった身体には血管が浮き出ている。人間のすみかから離れて森のなかに住み、孤独を重んじ、修行に励んでいる。彼女は真のバラモン(阿羅漢・聖者)と言うべき人です。

贅沢を求める

お釈迦さまは最初の説法(初転法輪)で、「両極端の道を避けて聖なる中道を歩むことで、真理を発見して解脱に達するのだ」と説かれたのです。それは、「人間が求める究極の目的には、どのようにすれば達するのか?」という問題に対する答えかも知れません。

二つの極端の第一は、娯楽に執着し耽る道です。この道は、一般人なら誰でも実行しているのです。Kāmasukhaliṇīyogaと言います。Kāmaとは、欲です。欲とは、眼・耳・鼻・舌・身に、色・声・香・味・触という刺激を与えることです。Sukhaとは、楽しみという意味です。Allikaとは、執着することです。Anuyogaとは、その道を歩むことです。「五欲に耽つて生きていれば、やがて究極の幸福に達するのだ。人間の生きる道はそれしかないのだ」と、頭のなかで思っているのです。

苦行を避ける

こころの根本的な反応は、貪瞋痴と言われるものです。修行者は怒り(瞋)と無知(痴)に依存しなくてはいけなくなっているのです。ですから、苦行という修行は無駄な行為なのです。

中道

八項目〔八正道〕を実行すると、智慧が現れて、こころが必ず安穏に達します。俗世間の人々にも、修行者たちにも、この道を発見することができなかったのです。

食事: 托鉢

中道の場合は、そのどちらでもなく、「命をつなぐため」に食事を摂るのです。美味しく感じたならば、直ちに気づいて、こころが欲に汚れないようにする。食べているのがとても不味いものであるならば、嫌な気持ち(怒り)にならないように気をつける。美味しいものを期待することからも、不味いもの避けたい気持ちからも、離れるのです。

服: 畿掃衣

お釈迦さまが教えるポイントは、「肉体を守るために衣服が必要ですが、決してこころを汚す目的で衣服を身にまとってはならない」ということでした。

住居: 森住

人間は建築技術まで駆使して、豪華絢爛な家を建てるのです。それは贅沢な生きかたであり、色声香味触に依存する生きかたでもあります。出家は住居本来の意味から逸脱しません。在家信者が寄付した立派な家に住む出家が堕落しているわけでも、死体捨場に住んでいる出家が精神的に優れているわけでもないのです。食べるものの、衣服、住居では、出家の善し悪しは区別できません。ものごとに執着していないこと、こころの安穏に達する道を歩んでいることが、出家の務めです。

395. Pamsukūladharam jantum, kisam dhamanisanthatam; Ekam vanasmim jhāyantam, tamaham brūmi brāhmanam.

395. 畿掃衣(ぼろ布)を〔身に〕付ける人を、痩せ細り〔浮き出た〕血管が〔身体中に〕広がった者を、林のなかで、独り、瞑想している者を——わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

パンスクーラダラン

Pamsukūladharam

糞掃衣(ぼろ布)を〔身に〕付ける

Pamsukūladharam=pamsukūla/pamsukūla(n 依対) (pamsu-kūla, Skt.pāmsu-kūla)ぼろの布切れ, 畿掃衣←pamsu(m)
[Sk.pāṁśu, pāmsu]塵, 塵垢, 塘土, 汚物-kūla 畿掃衣, 弊衣, 塘堆衣←kūla(n)[〃]斜面, 土手, 堤防+dharam/dhāra(a.m.sg.acc)[〃 cf.dhara]
保持する, 有する jantum/jantu(m.sg.acc)[〃]: ①人, 有情②草, kisam/kisa(a.m.sg.acc)[Sk.krśa]痩せたる, 憔悴した
dhamanisanthatam=dhamani/dhamani(f 依具)[〃]血管, 静脈-jāla 静脈網-santhatagatta 青筋が全身にみなぎる, やせ細った
+santhatam/santhata(a.n)[santharati の pp]広布せる, 拷げた, 覆える, 有隔の, 敷物, 臥具←santharati(v)[sam-str]広げる, 敷く;

エーカン ワナスミン ジャーヤンタン

Ekam vanasmim jhāyantam,

独り、林のなかで、瞑想している者を

キサン

kisam

痩せ細り

[浮き出た]血管が〔身体中に〕広がった者を、

ダマニサンタタン

dhamanisanthatam;

ダマニサンタタン

dhāra(a.m.sg.acc)[〃 cf.dhara]

保持する, 有する jantum/jantu(m.sg.acc)[〃]: ①人, 有情②草, kisam/kisa(a.m.sg.acc)[Sk.krśa]痩せたる, 憔悴した

dhamanisanthatam=dhamani/dhamani(f 依具)[〃]血管, 静脈-jāla 静脈網-santhatagatta 青筋が全身にみなぎる, やせ細った

+santhatam/santhata(a.n)[santharati の pp]広布せる, 拷げた, 覆える, 有隔の, 敷物, 臥具←santharati(v)[sam-str]広げる, 敷く;

ブルーミ

brūmi

brāhmaṇam.

ブーフマナン

brāhmaṇam.

「婆羅門」と

Ekam/eka(a.num.m.sg.acc)[〃]一, 一つ, 或る vanasmim/vana(n.sg.loc)森林; 欲林, 欲望 jhāyantam/jhāyanta(m.sg.acc)←jhāyati :

①(v.ppr)[Sk.dhyāyati dhyai] 静慮す, 禅定をなす, 思念す②(v)[Sk.ksāyati ksai]燃える, 引火す, 燃ける, 消尽す, tamaham/ brūmi/

brāhmaṇam/.

(26-13) Ekabrāhmaṇavatthu ある婆羅門の物語(5) なぜ自分が婆羅門と呼ばれないのか 396

◆ na cāhanti imam dhammadesanam satthā jetavane viharanto ekam brāhmaṇam ārabba kathesi.

この法話は、師がジャエータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ある婆羅門について語られたものである。

その婆羅門は、「修行者ゴータマは自分の弟子たちを『婆羅門』と呼ぶ。私も婆羅門の母胎に生まれた。私をもそのように呼ぶべきだろう」と、師のもとに行き、そのことを訊ねた。すると、師は彼に、「私は婆羅門の母胎に生まれただけで婆羅門と呼ぶのではありません。何物も持たず、何ものにも執着しない人、その人を私は婆羅門と呼ぶのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「396 [婆羅門の] 母胎に生まれ、[婆羅門の] 母から生まれたからとて、私は婆羅門と呼ばない。彼は「君よ」と呼びかける者であり、彼は所有物にとらわれる者である。何物も持たず、何ものにもとらわれない人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終ったとき、その婆羅門は預流果に確実に立った。居合わせた人々にとっても、法話は意義深いものであった。

No.249 (2015年11月) 差別と区別の違い 心清らかな人は優れている Difference and discrimination.

396. Na cāham brāhmaṇam brūmi Yonijam mattisambhavam Bhovādi nāma so hoti Sace hoti sakiñcano Akiñcanam anādānam Tamaham brūmi brāhmaṇam

396. 母より生まれた胎生者を バラモンなりと、私は呼ばず かれがもしも所有するなら 「君よ、と呼ぶ者」となる 無一物にて無執着の者 かれを私はバラモンと呼ぶ 訳：片山一良『ダンマパダ全詩解説』大蔵出版より

お釈迦さまの差別否定

お釈迦さまは差別感情に反対なのです。自我の錯覚を無くす道を説かれたのです。自我の錯覚が無くなったら、一切の差別感情は消えるのです。また、社会にある差別も批判しました。個人個人の能力に適した仕事を選んで生計を立てるべきという立場をとったのです。ひとが出家を求める時は、カーストを問わなかったのです。出自ではなくて、精神を育てる能力があるか否かを調べるのです。生命は輪廻転生するという立場から考えると、すべての生命は平等です。いまの生まれは一時的な現象に過ぎないのです。ですから、一切の生命を慈しむべきであると説かれたのです。ひとは生まれた家に、生まれた地方に、一生束縛されなくてはいけない、という立場も否定したのです。自分の能力を活かせるところに住むことが、幸福になる原因の一つであると説かれたのです。

人々の知識はさまざまです。経験も理解能力もさまざまです。ですから、お釈迦さまの教えを理解する時に、差が現れるのです。学識のある一部の出家は、この現象を心配しました。如来の教えが誤解されてしまうと思った彼らは、ブッダの説かれた教えもヴェーダ聖典と同じく人工語（古いサンスクリット語）で編集したほうがよいのだと提案したのです。しかし、お釈迦さまはこの提案に反対したのです。仏教がある一つの言語に限ってしまったれば、他の人々にそれを理解する機会が無くなります。教えは人類に平等に開放しなくてはいけないのです。ですから、ブッダの教えを自分の言葉で学ぶことも理解することも許可したのです。差別意識は、こころか煩惱で汚れていることの結果です。仏教はいかなる場合も、差別は認めません。

396. Na cāham brāhmaṇam brūmi, yonijam mattisambhavam; Bhovādi nāma so hoti, sace hoti sakiñcano; Akiñcanam anādānam, tamaham brūmi brāhmaṇam.

396. しかし、わたしは、[婆羅門の] 胎から生じ、[婆羅門の] 母から発生する者を、「婆羅門」と説かない。彼が、もし、[執着ある] 所有者として[世に] 有るなら、彼は、「ボーヴァーディン（「君よ」と呼びかける者）」という名で[世に] 有る[だけのこと]。無一物で、無執取の者を——わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ナ チャーハン ブラーフマナン ブルーミ ヨーニジャン マッティサンバワン
Na cāham brāhmaṇam brūmi, yonijam mattisambhavam; Bhovādi nāma so hoti, sace hoti sakiñcano; Akiñcanam anādānam, tamaham brūmi brāhmaṇam.
ない。わたしは、「婆羅門」と 説か [婆羅門の] 胎から生じ、 [婆羅門の] 母から発生する者を、
Na/ cāham=ca/ca(conj)~と、また、しかし、～も、そして +aham/aham(人代 sg.nom)私 brāhmaṇam/brāhmaṇa : ①(m.sg.acc).
brūmi/brūti(v.pr.1sg)[brū cf.Sk.bravīti,brūte]言う、告げる、のべる, yonijam=yoni/yoni(f 依具)胎, 子宮, 生; 起源, 原因-ja 胎生
+jam/ja(m.sg.acc)←-ja(a)suffix[<jan. cf. janati] 生せる mattisambhavam=matti/matti(f)[=mātu<mātar]母-gha 殺母者-sambhava 母
から生まれた, 母系の+sambhavam/sambhava(m.sg.acc)[<saṃ-bhū]発生, 生起, 生成;

ボーヴァーディ ナーマ ソー ホーティ サチエ ホーティ サキンチャノ
Bhovādi nāma so hoti, sace hoti sakiñcano;
「ボーヴァーディン」という名で 彼は、[世に] 有る[だけのこと]。もし、彼が、[世に] 有るなら、[執着ある] 所有者として
Bhovādi=bho/bho(interj 有持)[bhavantのvoc]君よ, 友よ[バラモンが相互に用いる, 同僚または目下の者への呼称, 目上の者に対し
てはbhanteを用いる]-vādika,-vādin 君よと言ふ者, バラモン+vādi/vādin(a.m.sg.nom)[vāda-in]説者, 主張者, 論師
nāma/nāma(n.sg.acc.adv)名 so/ta(人指示代 m.ssg.nom)彼, その, 彼女 hoti/hoti(v.pr.3sg)=bhavati(v)[bhū] ある, 存在する,
sace/sace(conj)もし cf. ce. hoti/ sakiñcano/sakiñcana(a.m.sg.nom)[sa-kiñcana]有所得, 有執著の, 何物かを有する←kiñcana(a.n)
[kin-cana=kiñci]何か, 何ものか, 障碍, 障;

アキンチャナン アナーダーナン タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Akiñcanam anādānam, tamaham brūmi brāhmaṇam.
無一物で、 無執取の者を 彼をわたしは、 説く。 「婆羅門」と
Akiñcanam/akiñcana(a.m.sg.acc)[a-kiñcana]無所有の, 何物もなき. cf. ākiñcañña←ākiñcañña(n)[a-kiñcana-ya]無所有. -āyatana 無所
有处 anādānam/anādāna(n.sg.acc)[an-ādāna]無取, 無取著, tamaham/ brūmi/ brāhmaṇam/.

(26-14) Uggasenasetṭhiputtavatthu ウッガセーナの物語(2) — ウッガセーナは何も怖れない 397

◆ sabbasamyojananti imam dhammadesanañ satthā veļuvane viharanto uggasenam nāma setṭhiputtam ārabbha kathesi. vatthu

“muñca pure muñca pacchato”ti (dha. pa. 348) gāthāvannanāya vitthāritameva.

この法話は、師が〔ラージャガハ市の近くの〕竹林精舎に滞在しておられたときに、ウッガセーナについて語られたものである。

物語は「前を解き放て、後ろを解き放て……」という詩句の註釈で詳しく述べた〔24-6 Uggasenavatthu ウッガセーナの物語(I) — 芸人の娘と結婚した長者の息子 348〕。そのとき、師は比丘たちに「尊師よ、ウッガセーナは『私は怖れなかった』と言っています。ありえないことを言って虚言を言っていると思います」と言われると、「比丘たちよ、私の息子にも似た、束縛を断ち切った者たちは怖れないのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「397 あらゆる束縛を断ち切り、実際に怯えることなく、結び目を超越し捉われのない人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.250 (2015年12月) 聖者は束縛を断ち切る 存在欲とは脅しです Enlightened mind

397. Sabbasamyojanam chetvā Yo ve na paritassati Sangātigam visamyuttam Tamaham brūmi brāhmanam

397. 一切の縛断ち切りて 悩みおそれの更になく 執着をこえどらわれず そをバラモンと我は説く 訳：江原通子

397. すべての縛りを断ち切って 決して動搖することのない 執着を超え、縛りのない者 かれを私はバラモンと呼ぶ 訳：片山一良『ダンマパダ全詩解説』大蔵出版より

束縛が誤解を招く

私たちに、眼、耳、鼻、舌、身、意という感覚器官（六根）があります。ですから、見たいでしょう。聴きたいでしょう。香りをかぎたいでしょう。味を感じたいでしょう。身体で感じたいでしょう。頭でものごとを考えたいでしょう。それなら、見られるもの、聴こえるもの、香りのあるもの、味わえるもの、触れるもの、考えられるもの（概念）に頼らなくてはいけないでしょう。それらから、離れられますか？ 離れられませんね。ほら、束縛です。生きるとは、このように刺激を受け続けることです。この刺激によって、心が生滅という波をうって回転するのです。

心は、なんの刺激も受けない、という状態は理解できません。心の定義は、対象を認識することです。それなら、対象に触れないならば、心があるとも言えなくなるのです。私たちの心には、対象に触れないという瞬間は一つもないのです。ですから、ずっと心があるような錯覚をしています。それに「私、私という実体、いのち、タマシイ、靈魂、soul,spirit, ego, anima」などなどの言葉を使っているのです。心は瞬間瞬間に生まれては消えますが、消える瞬間に新たな対象を認識して、新しい心が現れるのです。心には、認識せざるを得ない、という欠陥があります。その欠陥に「束縛」と言うのです。

十種類の束縛

修行の役に立てるために、解脱に達することを早めるために、お釈迦さまが親切に束縛を十種類（十結）に分けて説かれています。① 有身見 sakkaya_ditthi（自分の肉体に対する愛着です。自分の尊い命は肉体である、という誤解）② 疑 vicikicchā（妄想に対する愛着です。真理である無常・苦・無我・因縁などを理解できず、ああではないか、こうではないかと心が彷徨っている状態）③ 戒禁取 silabbata_parāmāsa（儀式・儀礼・決まり・戒などに対する愛着）④ 欲貪 kāma_rāga（色声香味触に対する愛着）⑤ 瞠恚 patigha（色声香味触という対象に愛着できない場合に現れる怒り）⑥ 色貪 rūpa_rāga（瞑想でもして超越した次元《梵天》に生まれたいという愛着）⑦ 無色貪 arūpa_rāga（瞑想でもして身体さえも現れない精神だけで生きられる次元《無色界梵天》に生まれたいという愛着）⑧ 慢 māna（自分という気持ちを中心にして物事を認識するという愛着）⑨ 掉挙 uddhacca（何も明確に認識しないで混沌状態でいたいという愛着。ひとは酔った状態、麻薬を服用した状態、興奮状態が好きなのです。）⑩ 無明 avijjā（これはすべての束縛の親分です。真理とは無常・苦・無我です。それを発見する努力をしないで、ありとあらゆるものに愛着するので、すべての現象に束縛されます。）

397. Sabbasamyojanam chetvā, yo ve na paritassati; Saṅgātigam visamyuttam, tamaham brūmi brāhmanam.

397. 一切の束縛するものを断ち切って、彼が、まさに、思い悩まないなら、執着を超えて行く者であり、束縛を離れた者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

サッバサンヨージヤナン チェートゥワー ヨー ウエー ナ パリタッサティ

Sabbasamyojanam chetvā, yo ve na paritassati;

一切の束縛するものを 断ち切って、 彼が、まさに、 思い悩まないなら、

Sabbasamyojanam=sabba/sabba(a.代的.持)[Sk.sarva]一切の、すべて、一切のもの+samyojanam/samyojana(n.sg.acc)[=saññojana < samyūñjati]結、繫縛、結縛 chetvā/chindati(v. ger)[chid, chind, ched]切る、断つ、切断す, yo/ya[閏代.m.sg.nom][Sk.yah]～である人、～であるもの ve/ve[adv]実に na/ paritassati/Paritassati:paritasati(v.pr.3sg)[pari-tras]ふるえる、おそれる、悩む；

サンガーティガン ウィサンユッタン タマハン ブルーミ ブラーフマナン

Saṅgātigam visamyuttam, tamaham brūmi brāhmanam.

執着を超えて行く者であり、 束縛を離れた者であり、 彼をわたしは、 説く。 「婆羅門」と

Saṅgātigam=saṅga/saṅga(m 依対)[<sañj]着、染着、執着-ātiga 执着を越えたる者(=阿羅漢)+atigam/atiga(a.m.sg.acc)[ati-ga]超えたる、打ち勝てる saṅga-atiga 著を超えたる visamyuttam/visamyutta:visaññutta(a.m.sg.acc)[<vi-samyuj]離縛せる、離繫せる者、軛を離れたる, tamaham/ brūmi/ brāhmanam/

◆ chetvā naddhīnti imāpi dhammadesanāpi satthā jetavane viharanto dve brāhmane ārabba kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、二人の婆羅門について語られたものである。

彼ら二人のうち、一人は「小赤」という名前の牡牛を持っていた。もう一人は「大赤」という名前の牡牛を持っていた。彼らはある日、「私の牡牛のほうが、力が強い。」「私の牡牛のほうが、力が強い」と言い争い、「言い争っても仕がない。競争させれば、どちらが強いかわかる」と、アチラヴァティー河の岸で、荷車に砂を積んで牡牛たちを繋いだ。ちょうどそのとき、比丘たちが水浴しようとそこへやって来ていた。婆羅門たちは牡牛に鞭打って走らせようとした。しかし、荷車はびくともしなかった。牛を繋いだ縄紐だけがちぎれた。

比丘たちはそれを見て、精舎に帰ってそのことを師に告げた。師は、「比丘たちよ、それは外に見える縄紐であり、誰でもこの世で切ることができます。しかし、比丘は己の中にある怒りの縄と執着の紐をこそ断ち切るべきです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「398 縄と紐と縛めを、手綱もろとも断ち切って、門(かんぬき)を持ち上げて破り、目覚めた人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、五百人の比丘たちが阿羅漢果に確実に立った。居合わせた人々にとっても、法話は意義深いものであった。

No.251 (2016年1月) 執着は楽しみを壊す 輪廻のなかに眞の幸福はない Existence is not exciting

398.. Chetvā naddhim varattañca, Sandānam sahanukkamam; Ukkhittapaligham buddham, Tamaham brūmi brāhmanam.

398. ①紐 naddhim と②皮緒 varattam と③綱 Sandānam : ④付属 sahanukkamam : ⑤門(かんぬき)をまで引抜きて Ukkhittapaligham 障礙滅せる覺者こそ そをバラモンと我は説く 訳：江原通子

十種類の束縛

① 有身見 sakkāya_ditthi
② 疑 vicikicchā

④付属 sahanukkamam 隨眠 (anusaya, 煩惱)という手細 (anukkama)をともなった
③綱 Sandānam 六十二の見解

②皮緒 varattam ゆわえること (bandhana) があつて転起する渴愛 (tanha)
①紐 naddhim 結ぶこと(nayhana)があつて転起する怒り (kodha)

⑤門(かんぬき)paligham

③ 戒禁取 sīlabbata_parāmāsa
④ 欲貪 kāma_rāga
⑤ 瞑恚 patigha
⑥ 色貪 rūpa_rāga
⑦ 無色貪 arūpa_rāga
⑧ 慢 māna
⑨ 掉挙 uddhacca
⑩ 無明 avijjā

398. Chetvā naddhim [nandhim (ka. sī.), nandim (pī.)] varattañca, sandānam [sandāmam (sī.)] sahanukkamam; Ukkhittapaligham buddham, tamaham brūmi brāhmanam.

398.紐(憤怒)を断ち切って、さらには、緒(渴愛)を〔断ち切って〕、手綱(煩惱)と共に、綱(六十二邪見)を〔断ち切って〕、門(無明)を引き抜いた覺者を——わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

チェートウワー ナッディン ワラッタンチャ サンダーナン サハヌッカマン
Chetvā naddhim varattañca, sandānam sahanukkamam;
断ち切って、紐(憤怒)を さらには、緒(渴愛)を〔断ち切って〕、綱(六十二邪見)を〔断ち切って〕、手綱(煩惱)と共に、
Chetvā/chindati(v. ger)[chid, chind, ched]切る,断つ,切断す naddhiñ[nandhi(f. sg. acc)][Sk. naddhīrī cf. naddha]紐,革紐←naddha(a)〃
nayhati nah の pp]結縛,結べる←nayhati(v)[Sk. nayhati nah]結ぶ varattañca=varattañ[Varattā:varatta(n. f. sg. nom)[Sk. varatrā]緒,革緒,
かわお,革錠+ca/ca(conj)~と,また,しかし,~も,そして, sandānam/sandāna(n. sg. acc)[< sām-dā 結ぶ]綱,束縛
cf. sandhāna←sandhāna(n) [=sandahana < sārm-dhā]調停,結合,束縛 [=sandāna] sahanukkamam=saha/saha : ①(prep. pref)共に,俱に②
(a)堪える,我慢す,従う③(a)[sahati;imper]堪えよ,ご免なさい+anukkamam/anukkama(m)[cf. anukkamati, Sk. anukrama] : ①順次,次
第 instr.anukkamena 順次に②馬勒,手綱←anukkamati(v)[anu-kram]従う,隨順す,進む;

ウッキッタパリガン ブッダン タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Ukkhittapaligham buddham, tamaham brūmi brāhmanam.
門(無明)を引き抜いた 覚者を 彼をわたしは、 説く。 「婆羅門」と
Ukkhittapaligham=ukkhitta/ukkhitta(a 有持)[ukkhipati の pp]引き抜きたる,挙げたる,被拳の,擯斥されたる,排拒せる-paligha 障碍
を除去する←ukkhipati(v)[ud-khipati]挙げる,拳罪す+paligham/Paligha:palikha=parigha(a.m.sg.acc)[cf. parighan]かんぬき,門; 障碍
buddham/buddha(a.m.sg.acc)[bujjhati の pp]覚った,目覚めたる,覚知せる; 覚者,仏陀,仏, tamaham/ brūmi/ brāhmanam/.

(26-16) Akkosakabhāradvājavatthu アッコーサ・バーラドヴァーニャの物語 399

◆ akkosanti imam dhammadesanam satthā veļuvane viharanto akkosakabhāradvājam ārabbha kathesi.

この法話は、師が〔ラージャガハ市の近くの〕竹林精舎に滞在しておられたときに、アッコーサ・バーラドヴァーニャ(怒るバーラドヴァーニャ)について語られたものである。

彼の兄のバーラドヴァーニャにはダナンジャヤヤニーという婆羅門夫人がいて、預流果に到達していた。彼女は咳をしても、くしゃみをしても、躓(つまず)いても、「世尊・阿羅漢・正等覺者に敬礼します」とこの感興の語を発した。

ある日婆羅門への食事の給仕を行っているときに、彼女が躓いてそのように大きな声で発した。婆羅門は怒って、「そうやってあの性悪女は、どこでもかしこでも躍くたびに、あの禿頭の修行者を称賛する」と言い、「性悪女め、今から行ってあの師の説を論破してやろう」と言った。すると、婆羅門夫人は彼に「行きなさい、婆羅門よ。あの世尊の説を論破しよう」という人を私は見ません。それでも行って、あの世尊に質問をしてみなさい」と言った。

婆羅門は師のもとへ行き、礼拝もせずに片側に立って質問をしようと、次の詩句を唱えた。「何をよく捨てて、安樂に過ごすのか、何をよく捨てて、悲しまないのか、どの一つの事柄の破壊を勧めるのか、ゴータマよ。」と。

すると、師は彼の質問に答えて、次の詩句を唱えた。「怒りを捨てて、安樂に過ごす、怒りを捨てて、悲しまない。婆羅門よ、根は毒で、先だけ甘い怒りの破壊を、聖なる人々は称賛する、それを捨てれば悲しまないから。」と。婆羅門は師に心淨められて出家し、阿羅漢果に到達した。〔SN.7-1. Dhanañjanīsuttam ダナンジャーニー経〕

すると、彼の弟のアッコーサ・バーラドヴァーニャは「兄が出家したらしい」と聞いて、怒りながらやって来て、師を無礼で荒っぽい言葉で非難した。しかし、彼も師によって、見知らぬ客人に硬い食べ物などを与える警え話で納得させられると、師に心を淨められて出家して、阿羅漢果に到達した。〔SN.7-2. Akkosasuttam 謂説経〕その後、彼のスンダリ・バーラドヴァーニャ〔SN.7-3. Asurindakasuttam アスリンダカ経〕とビランギカ・バーラドヴァーニャ〔SN.7-4Bilaṅgikasuttam ビランギカ経〕という二人の弟も師に怒ったが、師に改心させられて出家し、二人とも阿羅漢果を得た。

さてある日、法堂で話が持ち上がった。「ブッダの徳というのは驚くべきものです。四人の兄弟が怒っていましたが、師はほとんど何も語らないうちに、後らの拵り所となられました。」師が来られて、「比丘たちよ、いったい何の話で今ここに集まつてすわっているのですか」とお訊ねになり、「しかじかのことござります」と比丘たちが答えると、「比丘たちよ、私は自分に忍耐の力を具えているので、怒る人々にも怒ることなく、多くの人々の拵り所となるのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「399 罪がなくても、罵詈(ばり)や鞭打ち捕縛を忍ぶ人、その人の忍耐の力は力強い軍隊に等しい、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.252 (2016年2月) 自己燃焼 輪廻のなかに真の幸福はない Existence is not exciting.

399. Akkosam vadhabandhañca, Aduttho yo titikkhati; Khantibalam balāñikam, Tamaham brūmi brāhmanam.

399. 心に瞋り抱かずに 馬(ののし)り、鞭打、縛(ばく)に耐え 心も猛き忍辱者(にんにくしゃ) そをバラモンと我は説く
訳：江原通子

M21Kakacūpamasuttam 鋸喻経 232. “Ubhatodanḍakena cepi, bhikkhave, kakacena corā ocarakā aṅgamaṅgāni okanteyyum, tatrāpi yo mano padūseyya, na me so tena sāsanakaro. 比丘たちよ、また、もし、凶悪な盜賊たちが、両側に柄のあるこぎりで手足を切斷しようとします。そのときでさえも、心を汚す者であるならば、彼は、私の教えの実践者ではありません。

怒りを収める方法

「ひとが他を非難侮辱する。また暴力を振るう。その場合は、怒りを抱かないで忍耐をするのです。忍耐を訓練して、力(ちから)になるまで育てるのです。自分の力が忍耐である人は、聖者であると私は説きます。」という説法をなさったのです。お釈迦さまは忍耐を推薦しています。忍耐とは、我慢することではありません。パーリ語でkhantīと言って、これは心が落ち着いている状態なのです。我慢する人の心は、落ち着いていないのです。落ち着くとは、実践して育てるべき能力です。我々の脳は、簡単に興奮してしまうのです。身体に入るデータを自分の都合で捏造することは脳の仕事です。自分の都合で捏造することが出来なくなったら、混乱状態に陥るのです。怒りはそのとき現れる反応なのです。自己防衛のつもりで怒りの反応をするが、それは自己破壊の結果になります。

399. Akkosam vadhabandhañca, aduttho yo titikkhati; Khantibalam balāñikam, tamaham brūmi brāhmanam.

399. 罪倒を、さらには、殴打と結縛を、彼が、怒ることなく忍受するなら、忍耐の力ある者であり、力ある軍隊〔に匹敵する者〕であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

アッコーサン ワダバンダンチャ アドゥットー ヨー ティティックカティ
Akkosam vadhabandhañca, aduttho yo titikkhati;

罵倒を、さらには、殴打と結縛を、怒ることなく 彼が、 忍受するなら、

Akkosam/akkosa(m.sg.acc)[Sk.ākrośa]悪罵,怒罵,そしり vadhabandhañca=vadha(m相)[<vadh]殺,殺戮,殺害,死刑.-bandhana殺と縛+bandhañ/bandha(m.n.sg.acc)[]縛,束縛,捕縛,縛刑+ca/ca(conj)～と,また,しかし,～も,そして, aduttho/aduttha(a)[a-duttha]無瞋,無邪瞋←duttha(a)[Sk.duṣṭha.duṣṭati の pp]邪惡の,瞋怒の,惡心の←duṣṭati(v)[Sk.duṣyati dus]怒る,邪惡をもつ yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]～である人,～であるもの titikkhati/titikkhati(v.pr.3sg)[Sk.titikṣate.tij の desid.cf.tikhiṇa]堪える,忍耐す;

カンティーバラン バラーニーカン タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Khantibalam balāñikam, tamaham brūmi brāhmanam.

忍耐の力ある者であり、力ある軍隊〔に匹敵する者〕であり、彼をわたしは、説く。

Khantibalam=khanti/khanti:f有属)[Sk.ksānti]忍,忍辱,忍耐,所忍,信忍,信仰+balam/bala : ①(a.n→m.sg.acc)強き;力,威力,軍隊②(m)バラ鳥 balāñikam=balā/bala : ①(a.n 有持)強き;力,威力,軍隊②(m)バラ鳥+anikam/anika(n→m.sg.acc)[]軍隊,軍勢,兵隊, tamaham/ brūmi/ brāhmanam/

(26-17) Sāriputtattheravatthu サーリプッタ長老の物語(5) — サーリプッタ長老の母親の罵り 400

◆ akkodhananti imam̄ dhammadesanam̄ satthā veļuvane viharanto sāriputtattheram̄ ārabbha kathesi.

この法話は、師が〔ラージャガハ市の近くの〕竹林精舎に滞在しておられたときに、サーリプッタ長老について語られたものである。

そのとき、サーリプッタ長老は五百人の比丘たちと一緒に托鉢に歩いて、ナーラカ村の母の家の門に行つた。すると、母親は長老をすわらせて、給仕しながら怒った。「この残飯食いよ。残り物の酸粥を得られずに、他の家々で柄杓の裏についた酸粥を食べるために、八億の財産を捨ててお前は出家した。私はおまえのために、不幸のどん底です。さあ、食べなさい。」比丘たちにも食事を与えながら、「あなたがたは、私の息子を自分たちの小間使いにした。さあ、食べなさい」と言った。

長老は托鉢の食を受け取って、精舎に帰つた。すると、ラーフラ尊者が托鉢で得た食を〔一緒に食べようと〕師を招いた。師はラーフラにおっしゃつた。「ラーフラよ、どこへ行つてきたのですか。」「〔サーリプッタ長老の〕母上さまの村です、尊師よ。」「お母上はあなたの〔サーリプッタ〕和尚に何を言いましたか。」「尊師よ、母上さまに和尚さまは怒られていました。」「何と言つて怒ったのですか。」「しかじかと言いました、尊師よ。」「それで、あなたの和尚は何を言いましたか。」「何も言いませんでした、尊師よ。」

「ご同朋よ、サーリプッタ長老の徳は驚くべきものですね。しかじかと長老の母上が怒つても、怒りを少しも表しませんでした。」この話を聞いて、法堂で話が持ち上がつた。師がこられて、「比丘たちよ、いったい何の話で今ここに集まつてすわっているのですか」とお訊ねになると、「しかじかのことござります」と答えたので、「比丘たちよ、煩惱を減し尽くした阿羅漢たちには、怒りがないのです」とおっしゃつて、次の詩句を唱えられた。「400 怒りのない者、勤めに励む者、戒を守る者、欲望を離れた者、抑制され、最後の身体を持つ者、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わつたとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.253 (2016年3月) 知識の限界 知識はこころを汚す Knowledge cannot reveal truth.

400. Akkodhanam vatavantam Sīlavantam anussadambr; Dantam antimasārīram Tamaham brūmi brāhmanam

400. つつしみありて戒を持し 瞞ることなく欲増さず 最後身をば保つ人 そをバラモンと我は説く 訳：江原通子

怒りからの解放

釈尊の教えを実践して解脱に達した人は、いかなる悪環境にいても安穏に過ごすのです。それは存在欲が無くなつたからです。(Akkodhanam 怒りのない)

道徳

存在欲・貪瞋痴を根絶した人にとっては、たとえ自分が殺されるような情況にいても、自己防衛のために相手を傷つける気持ちは起きないので。(Vatavantam, sīlavantam 道徳の人・戒を完成した人)

感情

真理を発見した聖者は、存在欲を根絶したので、何のデキモノもこころに無いのです。眼耳鼻舌身意にいかなるデータが触れても、精神的に安穏でやすらぎを感じて居られるのです。(Anussadam 煩惱が無い)

訓練

仏道を実践する方は、存在欲を根絶するので本物の調御を完成できるのです。表面的・一時的に、わがままを制御するのではないのです。ですから人格の完成者なのです。(Dantam 調御者)

輪廻の脱出

仏道を実践して成功したならば、存在欲は根絶されます。その細胞組織には、輪廻転生は成り立ちません。言葉として、解脱に達した、涅槃に入られたと言います。(Antimasārīram 最後身)

400. Akkodhanam vatavantam, sīlavantam anussadam; Dantam antimasārīram, tamaham brūmi brāhmanam.

400. 怒激せず、撻あり、戒あり、焦りなき者を—〔自分が〕調御され、最後の肉体ある者を—わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

アッコーダナン

ワタワンタン

スィーラワンタン

アヌッサダン

Akkodhanam

vatavantam,

sīlavantam

anussadam;

忿激せず、

撻あり、

戒あり、

焦りなき者を

Akkodhanam/akkodhana(a.m.sg.acc)[a-kodhana]忿なき、親愛なる vatavantam/vatavant(a.m.sg.acc)[vata ②vant]禁戒ある、

sīlavantam/sīlavant(a.m.sg.acc)戒ある、具戒者、持戒者 anussadam/anussada(a.m.sg.acc)[an-ussada]増盛(渴愛煩惱)なき←ussada(m)[<ud-syad]：①増盛、隆満②増地獄、小地獄；

ダンタン

アンティマサーリーラン

タマハン

ブルーミ

ブラーフマナン

Dantam

antimasārīram,

tamaham

brūmi

brāhmanam.

〔自分が〕調御され、

最後の肉体ある者を

彼をわたしは、

説く。

「婆羅門」と

Dantam/danta：①(m)[〃]歯、歯牙、象牙②(a.m.sg.acc)[Sk.dānta.dammati:pp.]調御されたる、訓練されたる←dammati(v)[Sk.dāmyati

dam]ならされる、おとなしくなる antimasārīram=antima/antima(a 有持)[anta の最上級]最終の、最後の-sarīra 最後身

+sārīram/sarīra(n→m.sg.acc)[Sk.sārīra]身、身体；舍利、遺身、遺骸、遺骨, tamaham/ brūmi/ brāhmanam/.

(26-18) Uppalavaṇṇātherīvatthu ウッパラヴァンナー長老尼の物語(2) — 阿羅漢に愛欲はない 401

◆ vāri pokkharapattevāti imam dhammadesanaṁ satthā jetavane viharanto uppalavannatherim ārabba kathesi. vatthu “madhuvā

maññāti bālo”ti gāthāvanṇanāya (dha. pa. 69) vitthāritameva.uttañhi tattha (dha. pa. Attha. 1.69) —

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ウッパラヴァンナー長老尼について語られたものである

物語は「愚か者は……蜜のように思う……」という詩句の註釈で詳しく述べられた [(5-10) Uppalavannatherīvatthu ウッパラヴァンナー長老尼の物語(I) — 比丘尼が森に住まなくなったわけ 69]。そこで次のように述べられた。

さて、後に法堂で多くの人々が話を始めた。「煩惱を減し尽くした阿羅漢たちでも、思うに、愛欲の樂を享受するのではな
いでしょうか、どうして享受しないことがありますでしょうか。彼らとて枯れた木や蟻塚ではなく、生身の肉の身体なのです。
だから、彼らも愛欲に身をまかすのでしょうか」と。師が来られて「比丘たちよ、何の話で今ここに集まつてすわっているの
ですか」とお詫ねになり、「しかじかのことござります」と彼らが答えると、「比丘たちよ、煩惱を減し尽くした阿羅漢
たちは、愛欲の樂を享受することもなく、愛欲に身をまかすこと也没有。ちょうど、蓮の葉に落ちた水滴が付着せず、
とどまらず、転がって落ちるように、あるいは、ちょうど錐の先端に芥子粒が付着せず、とどまらず、転がって落ちるよう
に、そのように、煩惱を減し尽くした阿羅漢たちの心には二種類の欲念(物質的な欲と汚れた欲 vatthu-kāmā kilesa-kāmā PTSD
s.v. kāma 参照)は付着せず、とどまらないのです」と結論を締めくくられて、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。
「401 蓮の葉の上の露のように、錐の尖の芥子粒のように、諸の欲念に汚されない人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.254 (2016年4月) 錐先に載せた芥子の種 普通のこころと聖者のこころ Detachment yields wisdom.

401. Vāri pokkharapatteva āraggeriva sāsapo; Yo na limpati kāmesu Tamaham brūmi brāhmanam

401. 蓮の葉の露の如くに 錐(けし)先の芥子(けし)の如くに 愛染(あいぜん)に染まらずあるを バラモンと 我は説くなり
訳: 江原通子

聖者の認識の仕方

「蓮の葉の上にある水の如く。」蓮の葉の上に水滴が溜まっていることを誰でも見ていると思います。ちゃんと水が溜ま
っているのに、葉は濡れてないのです。簡単に落ちるのです。水滴と蓮の葉の間には執着はないが、受け止めてあげること
ができるのです。「錐先に芥子の種を載せるように。」これも注意さえあればできる仕事です。しかし、簡単に落ちます。
錐先と芥子の種の間には執着はありません。

聖者にも眼耳鼻舌身意があります。色声香味触法が触れますし、認識もするのです。しかしその認識は、心と対象の間に
執着がなく、生きるという渴愛がなく起こる出来事なので、認識は蓮の葉の上にある水滴のような、錐先に載せた芥子の種
のような認識に過ぎないのです。だから、いかなる場合も心は揺らぎません。動搖しません。完全たる安穏な状態でいられる
のです。しかし一般人より明確に、如実に、外のデータを認識もしているのです。私たちは認識しようとしてデータを捏
造します。聖者はデータを捏造しないので、誰よりも智慧が優れているのです。認識能力も一般人よりはるかに優れている
のです。

401. Vāri pokkharapatteva, āraggeriva sāsapo; Yo na limpati [lippati (sī. pī.)] kāmesu, tamaham brūmi brāhmanam.

401. 蓮の葉にある水〔滴〕のように、錐の先にある芥子〔粒〕のように、彼が、諸々の欲望〔の対象〕に汚されないなら、わ
たしは、彼を「婆羅門」と説く。

ワーリ	ポッカラパッテーワ	アーラッゲーリワ	サーサポー
Vāri	pokkharapatteva,	āraggeriva	sāsapo;
水〔滴〕	蓮の葉にある	のように、錐の先にある	のように、芥子〔粒〕
Vāri/vāri(n.sg.nom) / / 水 pokkharapatteva=pokkhara/pokkhara(n 依属)[cf. Sk. puṣkara]蓮葉,蓮;樂器の一種-patta 蓮葉+patta/patta : ①(n.sg.loc)羽毛,翼;葉;琴柱②(m.n)[Sk. pātra]鉢,器③(a)[pāpuṇāti:pp. Sk. prāptā]已得の,得たる,得達の④(m)=patti, patti, kāma +iva/iva(indecl)[/ / BSk. viya]如く=viya,va, āraggeriva=āragge/āragga(n.sg.loc)[ārā-aggā]錐尖,きりの先←ārā : ①(f)[/]錐 cf.āragga. ②(adv)[āra の abl]離れて,遠く+r/+iva/ sāsapo/sāsapa(m.sg.nom)[Sk. sarṣapa]芥子(からし),けしの種;			

ヨー	ナ	リンパティ	カーメース	タマハン	ブルーミ	ブーラーフマナン
Yo	na	limpati	kāmesu,	tamaham	brūmi	brāhmanam.
彼が、	汚されないなら、	諸々の欲望〔の対象〕に		彼をわたしは、	説く。	「婆羅門」と
Yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk. yah] ~である人, ~であるもの na/ limpati/limpati(v.pr.3sg)[/ lip]塗る, けがす kāmesu/kāma(m.n.pl.loc) 欲, 愛欲, 欲念, 欲情, 欲樂, tamaham/ brūmi/ brāhmanam/						

(26-19) Aññatarabrahmaṇavatthu ある婆羅門の物語(6) — 逃げて出家した奴隸 402

◆ yo dukkhassāti imāñ dhammadesanāñ satthā jetavane viharanto aññatarāñ brāhmaṇāñ ārabbha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ある婆羅門について語られたものである。

その婆羅門の一人の奴隸が、〔まだ奴隸への授戒を禁止する〕戒律が定められていなかったときに、逃げて出家し、阿羅漢果に到達した。婆羅門は彼を探しても見つけられなかつたが、ある日、その元奴隸が師とともに托鉢に入つくるのを〔市の〕門の中で見つけて、衣をしっかりと握つた。師が振り返つて、「婆羅門よ、これはどういうことですか」とお訊ねになつた。「彼は私の奴隸です、君ゴータマよ。」「彼は重荷を下ろしました。」「重荷を下ろした」と言つたとき、婆羅門は「阿羅漢になったのだ」と理解した。そこで、婆羅門がふたたび、「わかりました、君ゴータマよ」と言つたとき、師は、「その通りです、婆羅門よ。重荷を下ろした者です」とおっしゃつて、次の詩句を唱えられた。「402 この世で己の苦しみの滅したことを知り、重荷を下ろし軛から解放された者、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終つたとき、その婆羅門は預流果に確実に立つた。居合わせた人々にとつても、法話は意義深いものであつた。

No.256 (2016年6月) 生きるとは多重債務に陥ること 生命の順位づけ Difference and discrimination.

402.Yo dukkhassa pajānāti, Idheva khayamattano; Pannabhāram visamyuttam, Tamaham brūmi brāhmaṇāñ.

402.現世に於て己が苦の 滅尽悟り荷を下ろし とらわれる事あらぬ人 そをバラモンと我は説く 訳：江原通子

釈尊は言葉の定義を変える

貧しい人々は、子供を育てることができないので、金持ちに売ることをするのです。金持ちはその人を奴隸として使います。売られた人には、たとえ大人になっても身代金を払えるはずはないのです。奴隸なので、仕事をしても個人で収入は得られないからです。このような奴隸たちは、パーリ語で pannabhāra (パンナバーラ) と言います。命が担保になった、という意味です。しかし、pannabhāra という言葉は、お釈迦さまが意図的に変えた可能性があります。命が担保になった、という場合は、正しい単語は pānabhāra か pannabhāra であるべきだと思います。

[pāna(m)[<pa-an Sk.prāṇa]生物、有情、生類、生命 panna(n)[Sk.parna]葉、樹葉、貝葉、手紙]

言語とは人々が日常使うものなので、訛(なまり)が入ることは避けられませんね。ですから、pānabhāra という言葉が、pannabhāra として使われたこともあったのではないかと推測できます。

〔奴隸であった〕阿羅漢は、自分がこの家の人の pannabhāra であると言いました。それに対してお釈迦さまは、pannabhāra とは araham という意味だと説かれたのです。釈尊は言語の元の意味を変えたのです。Panna とは、「捨てた、置いた」ということです。

Bhāra とは、「荷」です。五蘊に対する執着に「荷」というのです。人々は五蘊に執着しているので、生きることは苦になるのです。執着を捨てたことは、苦がなくなったことを意味します。

自分の苦を発見する

Yo dukkhassa pajānāti 「苦を知るものは」。この場合は、真理として、生きることは苦であると自ら発見しなくてはいけないのです。idheva khayamattano. Idheva とは、「ここで」という意味です。ここで、いまの瞬間に、自分自身が経験する苦なのです。Khayamattano とは、「自分自身はねに消えつつある存在です」という意味です。

無常の流れに苦という

瞑想実践する修行者は、高度な集中力で瞬間瞬間に起こる生滅変化の流れを観察するのです。瞬間瞬間、生滅変化する五蘊に対して、執着することも、私のものだと思うことも、私がいるという錯覚も、成り立たないと発見するのです。苦を発見した人には、なにをしてでも生き続けたいという渴愛がなくなっているのです。ですから、世間のなににも依存する必要がなくなったのです。生きていきたいという重荷が消えたのです。ですから、「荷を下ろした、捨てた」という意味で pannabhāram なのです。visamyuttam とは、「なにごとにも執着しない、関わりを持たない」という意味です。ここが本格的な自由に達したのです。Brāhmaṇa とは、バラモン・カーストではなく、「聖者」という意味で使っているのです。Tamaham brūmi brāhmaṇāñ 「真のバラモンとはこのようないる人であると私(釈尊)は説きます。」お釈迦さまが第一人称で語る場合は、言葉に別な意味を入れたことを示すのです。要するに、世間はバラモン・カーストの人にバラモンだと言つてゐるが、釈尊は解脱に達した聖者を真のバラモンであると説かれるのです。

執取〔の思い〕を有する者たちのなかにいながら執取〔の思い〕なき者を——わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

402. Yo dukkhassa pajānāti, idheva khayamattano; Pannabhāram visamyuttam, tamaham brūmi brāhmaṇāñ.

402.彼が、まさしく、この〔世において〕、自己の苦の滅尽を覚知するなら、〔生の〕重荷を降ろした者であり、〔世の〕束縛を離れた者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヨー ドゥッカッサ パジャーナーティ イデーワ カヤマッタナー

Yo dukkhassa pajānāti, idheva khayamattano; Pannabhāram visamyuttam, tamaham brūmi brāhmaṇāñ;

彼が、 苦の 覚知するなら、 この〔世において〕、まさしく、 滅尽を 自己の

Yo/ya(閑代 m.sg.nom)[Sk.yah]~である人、~であるもの dukkhassa/dukkha(a.n.sg.gen)苦、苦痛、苦惱 pajānāti/pajānāti(v.pr.3sg)[pa-jānāti<jñā]知る、了知す、idheva=idha/ida:,idam←ima(指代 n.sg.nom)これ+eva/eva(adv)が、こそ、のみ、だけ[yeva,ñeva,va, となることがある] khayamattano=khayam/khaya(m.sg.acc)[Sk.ksaya]尽、滅盡、滅尽+attano/atta : ①(a)得た、取れる②=attan(m.sg.gen)我、自己、我体;

パンナバーラン ウイサンユッタン タマハン ブルーミ ブラーフマナン

Pannabhāram visamyuttam, tamaham brūmi brāhmaṇāñ.

[生の]重荷を降ろした者であり、[世の]束縛を離れた者であり 彼をわたしは、 説く。 「婆羅門」と

Pannabhāram=Panna/panna(a 有持)[pajjati<pat の pp]落ちたる、おろした、倒した-bhāra 重荷をおろした+bhāram/bhāra(m)[bhr]①,重担、荷物-oropana 荷をおろすこと②[重さの量]バーラ、一荷 visamyuttam/visamyutta:visaññutta(a)[<vi-samyuj]離縛せる、離繫せる者、軛を離れたる←sañjuñjati(v.pp)[sañ-yuj]結ぶ、統一す、tamaham/ brūmi/ brāhmaṇāñ/.

(26-20) Khemābhikkhunīvatthu ケーマー比丘尼の物語 403

◆ gambhīrapaññanti imam̄ dhammadesanam satthā gijjhakūte viharanto khemam̄ nāma bhikkhunī ārabbha kathesi.

この法話は、師が〔ラージャガハ市郊外の〕〈鷺の峰〉に滞在しておられたときに、ケーマー比丘尼について語られたものである。

ある日、夜の最初の更が過ぎたばかりの時刻に、神々の王サッカがお伴の神々と一緒にやって来て、師のもとで記憶に残る法話を聴きながら走っていた。ちょうどそのとき、ケーマー比丘尼が「師にお会いしよう」とやって来たが、サッカを[169]見ると、空中に立ったまま師を礼拝して引き返した。サッカはそれを見て、「尊師よ、あれはどなたですか。やって来て、空中に立ったまま礼拝して帰っていきましたが」と訊ねた。

師は、「大王よ、彼女は私の娘のケーマーで、大きな智慧があり、正しい道と正しくない道に通じています」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「403 深い智慧があり、明察があり、善い道と悪い道に通曉し、最高の目的に到達した者、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.257 (2016年7月) 聖者のオーラは智慧です 覚醒者はこころの中身で発見する Characteristics of the enlightened person.

403.Gambhīrapaññam medhāvīm,Maggāmaggassa kovidam; Uttamatthamanuppattam, Tamaham̄ brūmi brāhmaṇam

403.智慧深遠に怜俐なる 道と非道を熟知して 阿羅漢果(あらかんか)をば得たる人 そをバラモンと我は説く訳：江原通子

制限された観察能力

聖者・バラモンとは Ggambhīrapaññam 「智慧は深遠なり」という意味です。智慧とは知識ではありません。知識の達人たちには、この世にいくらでもいます。頭でっかちなれば覚っているのだ、という意味ではないのです。智慧とは、ありのままに一切の現象を観察して達する結論なのです。すべての生命についている観察能力は、それぞれの命を維持することだけに制限されています。生命にとっては、ありのままに観ることは困るのです。生命には現象をありのままに観る能力がないだけではなく、さまざまな方法で、現象を「あってほしいまま」に見ようと工夫までしているのです。人間の知識、科学、技術、文学、芸術、文化、文明のすべては、人間という肉体のために作ったものです。そちらに、ありのままに観る智慧のひとかけらもないのです。

明日を知る

聖者は違います。生きていきたいという存在欲が消えているのです。一切の現象の本来の姿を、ありのままの智慧で発見しているのです。ですから、明日はどうなるのか、ということも、なにをすればよいのか、ということも、知っているのです。聖者の判断は間違わないので。聖者は過ちも犯さないので。「明日のことも知っている」と言葉でいいましたが、聖者は予言者ではないのです。予言者という概念は、欲に絡まっている、強烈な存在欲を持っている人々の夢物語です。明日を知るとは、真理を知るという意味です。過去・現在・未来という時間軸の問題ではありません。釈尊が、聖者は medhāvīm であると言うのは、この意味です。

道・非道を知り尽くす

聖者に向ってみれば、決められた寿命をまとうできる方法も、生きている間に余計に苦労しない方法も、教えてもらえます。それだけではなく、人格向上する方法も、知識の次元を破って超越した智慧に達する方法も教えられるのです。輪廻転生する生きかた（非道）、輪廻を脱出する生きかた（道）を知っているのです。聖者は maggāmaggassa kovidam 「道と非道を熟知している」と、お釈迦さまが説かれるのです。

最高の境地

存在欲を断ったならば、一切の現象を知る能力はクールな話になります。道・非道を知っていることも、それほど驚くべきことではないのです。すべてを脱出しているのです。それをお釈迦さまは、uttamatthamanuppattam 「最上の境地に達した者」と説かれています。要するに、阿羅漢果に達しているという意味です。「その人こそが眞のバラモンであると私は（釈尊）は説く（tamaham̄ brūmi brāhmaṇam̄）」というフレーズで、お釈迦さまは話を終了します。

403. Gambhīrapaññam medhāvīm, maggāmaggassa kovidam; Uttamatthamanuppattam, tamaham̄ brūmi brāhmaṇam

403.深遠なる智慧ある者を、思慮ある者を、道と道ならざるものと熟知する者を、最上の義（目的）を獲得した者を——わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ガンビーラパンニヤン

メダーウイン

マッガーマッガッサ

コーウィダン

Gambhīrapaññam

medhāvīm,

maggāmaggassa

kovidam;

深遠なる智慧ある者を、

思慮ある者を、

道と道ならざるものと

熟知する者を、

Gambhīrapaññam=Gambhīra/+paññam/ medhāvīm/, maggāmaggassa=magga/magga(m相)道,道路,正道

+amaggassa/amagga(m.sg.gen)[a-magga]邪道,非道 kovidam/kovida(a.m.sg.acc)[<ku-vid]熟知する,識知する;

ウッタマッタマヌッパッタン

タマハン

ブルーミ

ブーラーフマナン

Uttamatthamanuppattam,

tamaham̄

brūmi

brāhmaṇam̄.

最上の義（目的）を獲得した者を 彼をわたしは、

説く。 「婆羅門」と

Uttamatthamanuppattam=Uttama/uttama(a 代的.持)[ud:最上級]最上の,最高の-aṅga 最上肢,頭-attha 最上義+attham/attha :

①=attha(m.n)[Sk. artha]義,利益,道理,意味,必要,裁判②(n)[Sk. asta]attham gacchati[日が西に]没す,帰る

+anuppattam/anuppatta,anupatta(a.m.sg.acc)[anupāpuṇāti の pp.]到達せる,得たる←anupāpuṇāti(v)[anu-pāpuṇāti]到達す,得る,見出す, tamaham̄/ brūmi/ brāhmaṇam̄/.

◆ asamsatthanti imam dhammadesanam satthā jetavane viharanto pabbhāravāsītissattheram ārabbha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、岩窟に住むティッサ長老について語られたものである。

この長老は師のもとで瞑想の主題を教わり、森林に入って適切な住処を探し、ある岩窟に到った、ということである。到着したまさにそのときに、彼の心は集中した。彼は「私はここに住んで、出家者の勤めを果たすことができるだろう」と考えた。岩窟に棲む神靈は「戒を具えた比丘がやってきた。彼と一緒に一つの場所に住むのはつらい。しかし、彼はここに一晩だけ泊まって、出ていくだろう」と考えて、子供たちを連れて出ていった。

長老は翌日の朝早く、托鉢の村に乞食に入った。すると、一人の在家信女が長老を見て、息子に対するような愛情を抱き、家にすわらせて食事を与え、自分を頼りに〔雨安居の〕三カ月を過ごすように悲願した。長老も「この女性のおかげで、私は生存からの解放が達成できるだろう」と考えて同意し、岩窟に帰った。

神靈は長老が戻ってくるのを見て、「きっと誰かに招かれたに違いない。しかし、明日か明後日には出でいくだろう」と考えた。このようにして半月が過ぎたとき、「この長老はここで雨安居を過ごすつもりのようだ。戒を具えた者と一緒に、ひとつ所に子供たちと一緒に住むのはなし難いことだ。彼に『出て行け』と言うことはできない。この長老の戒に欠点があるだろうか」と天眼で観察したが、具足戒を受けた毘尼(戒壇)から始まって、彼の戒に一点の曇りも汚れも見つけられず、「この人の戒は清淨潔白だ。何か彼に言って〔怒らせて〕、悪い評判を立てよう」と、長老を支援している家の在家信女の長男の身体に取り憑いて、首を捻じ曲げた。

長男の両目は飛び出し、口から涎が流れた。在家信女はそれを見て、「これはどうしたことなの」と嘆き叫んだ。すると、神靈は彼女に姿を見せずに、次のように言った。「私が彼に取り憑いた。私に犠牲祭を捧げる必要はない。しかし、あなたの家に来る長老に甘草をくれるように頼んで、それで胡麻油を熱して彼の鼻から流し入れなさい。そうすれば、私は彼から出でていきます。」在家信女は「彼を破滅させないで。彼を死なせないで。私はお上人さまに甘草を求めるることはできません」と言った。「もし甘草を求めることができないならば、息子の鼻から茴香(ういきょう)の粉を入れるように言いなさい。」「それも言うことはできません。」「それならば、長老の足を洗った水を、息子の頭に振りかけなさい。」在家信女は「それはすることができます」と答え、食事の時間にやって来た長老をすわらせ、粥と硬い食べ物を捧げ、食事の合間にすわった長老の足を洗い、その水を取って、「尊師よ、この水を息子の頭に振りかけてよいでしょうか」と訊ねると、「それなら振りかけなさい」と長老が答えたので、そのようにした。

神靈はその途端、息子の身体から出でていき、岩窟の入り口に立った。長老は食事が終わると座から立ち上がり、瞑想の主題を忘れないように三十二の身体の要素を復唱しながら帰っていった。〔'atthi imasmiñ kāye kesā lomā nakhā dantā taco, maññam nāru atthi atthimīñjam vakkam, hadayam yakanam kilomakam pihakam papphāsam, antam antaguñam udariyam karñam, pittam semham pubbo lohitam sedo medo, assu vasā kheļo siñghāñikā lasikā mutta matthaluñgam'nti.〕

〈この身には、髪・毛・爪・歯・皮、肉・筋・骨・骨髓・腎臓、心臓・肝臓・肋膜・脾臓・肺臓、腸・腸間膜・胃物・大便、胆汁・痰・膿・血・汗・脂肪、涙・脂肪油・唾・鼻液・関節液・小便 脳みそがある〉と。〕

すると、岩窟の入り口に着いたとき、神靈が「偉大な医者よ、偉大な医者よ。ここに入るな」と言った。「私はここに住む神靈です。」長老はそこに立ったまま、「あなたは誰ですか」と訊ねた。長老は「私が医者の仕事をしたことがあつたどうか」と、具足戒を受けた毘尼の中に始まって以来の行動を振り返って考えたが、自分の戒にどんな汚点も見つけられなかつたので、「私は自分が医者の仕事をした覚えはありません。どうしてそのように言うのですか」と言った。神靈は「わかりませんか」と言った。「いかにも、わかりません。」「あなたに話しましょうか。」「どうぞ、話してください。」「まず、話は後ににおいておきましょう。今日、あなたは悪靈に取り憑かれた在家支援者の息子に、足を洗った水をその頭に振りかけましたか、振りかけませんでしたか。」「たしかに、振りかけました。」「それでわかりませんか。」「そのことについて、あなたは言ったのですか。」「その通りです。そのことについて言いました。」

長老は考えた。「ああ、なんと私の自己は正しい決意に向けられていることか。ああ、私の行為は教えに通っていることか。神靈でさえ私の四つの清淨な戒に汚点も疵(きず)も見つけられず、少年の頭に振りかけた足洗いの水だけを見たのだ」と、自分の戒について強烈な喜びが生じた。長老はその喜びを抑えると、足を持ち上げることもせず、まさにその場で阿羅漢果に到達し、「私のような完全に清淨な修行者を脅かしてこの住処に住むな。あなたこそ出でていきなさい」と神靈を諭して、次の感興の話を発した。「実に私の生活は淨らかだ、苦行を行う汚れなき私、清淨な私をあなたは悩ますな、あなたは岩窟から出て行け。」と。

長老はその岩窟に三カ月住み、雨安居が明けると師のもとへ行き、比丘たちに、「ご同朋よ、あなたの出家の勤めは完成しましたか」と問われると、岩窟で雨安居に入つてからのすべての出来事を比丘たちに話し、「ご同朋よ、あなたは神靈にどのように言われたとき、怒らなかったのですか」と問われると、「怒りませんでした」と答えた。比丘たちは如来に告げた。「尊師よ、この比丘は嘘を語っています。神靈にしかじかと言われたときにも「私は怒らなかった」と言っています。」

師は彼らの話を聞いて、「比丘たちよ、私の息子は怒りません。彼は在家の人々とも出家者たちとも、執着するような関わりというものはありません。彼は執着なく少欲で満足しているのです」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「404 在家の人々とも、出家の人々とも両方ともに執着することなく、執着なく、少欲な人、彼を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.258 (2016年8月) 無執着の境地 安穏の極みは絶縁です Detachment

404. Asamsattham gahatthehi, Anāgārehi cūbhayañ; Anokasārimappiccham, Tamaham brūmi brāhmanam

404. 在家の人とも交らず また出家とも交らず 家なき遍歴小欲者 そをバラモンと我は説く 訳：江原通子

無執着：絶縁

修行の結果として解脱に達する場合は、執着を根絶します。そうすると、俗世間と縁を切れます。出家社会とも縁を切りま

す。縁を切るといっても、どこかに逃げて隠れている必要はないのです。一般社会の人々とも、出家の人々とも、ふつうに仲良く生きているのです。しかし、執着は一切ないのです。意図的に縁をつくろうと努力することもないし、縁が切れたら困ると悩むこともないのです。極端に安穏な精神で生きているのです。お釈迦さまはこの状況を「asam̄ sattham̄ gahaṭthehi, anāgārehi cūbhayam̄」と説かれるのです。「在家という社会、出家という社会、この両方とも関わりは持たない」という意味です。

存在欲

われわれは何も理解しないで、生きていきたい、死にたくない、という感情に追われて生きているだけです。調べてみると、そちらにあるのは色受想行識という五蘊に対する執着です。それに気づかないので、生きていきたい、死にたくないと思っているのです。五蘊という五つの組織に、お釈迦さまは「家」という言葉を当てています。聖者は存在欲を脱したから、五蘊に依存することがないのです。ですから、家から離れているのです。「Anokasārim」とは、その意味です。

最小限

修行して存在欲を根絶したらどうなりますか？その聖者は、「この肉体が自然に壊れていくまで、適切に手入れすれば十分」という気持ちになります。ですから、すべてのものごとについて「少欲」になります。この場合の欲とは、欲ではなく「必要」という意味です。ひとにとて欲しいものは無限にあるが、必要不可欠なものといえば、それほどないでしょう。聖者は、肉体を維持管理するために必要不可欠な量だけを求めるのです。それが「appiccham（少欲）」ということです。

404. Asamsattham gahaṭthehi, anāgārehi cūbhayam; Anokasārimappiccham, tamaham brūmi brāhmaṇam.

404. 在家の者たちと、さらには、家なき者たちと、両者ともに交わらず、家なくして行く、求むこと少なき者を——わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

アサンサッタン ガハッテーヒ アナーガーレーヒ チューバヤン
 Asamsattham gahaṭthehi, anāgārehi cūbhayam;
 交わらず、 在家の者たちと、 さらには、家なき者たちと、 両者ともに
 Asamsattham/asamsattha(a.m.sg.acc)[a-samsattha]合会せざる,雑処なき←samsattha(a)[sam-srj の pp]交際接触せる,衆会の,相い雑
 われる,親近の←sajati : ①(v.pp)[srj]放つ,捨てる,遣わす②(v)[svaj]抱擁す,抱く gahaṭthehi=gaha-ttha(m.pl.inst)在家者←gaha :
 ①(n 依處)[Sk.gr̥ha]cf.geha 家,家居②(m)[Sk.gr̥ha < ganhāti]捕捉者,夜叉,鰐魚←tā→-tā(f) -tva, -tta(n)[抽象名詞を作る接尾辞(suf)]
 こと,性,状態(bhāva)の意, anāgārehi/anāgāra(a.m.pl.inst)[an-agāra]非家,出家 cūbhayam=ca/ca(conj)~と,また,しかし,~も,そして
 +ubhayam/ubhaya(a 代的.m.sg.acc)[ubha-ya]兩の,二つの;

アノーカ サーリン アピッチャン タマハン ブルーミ ブラーフマナン
 Anoka sārim appiccham, tamaham brūmi brāhmaṇam.
 家なくして行く、 求むこと少なき者を 彼をわたしは、 説く。 「婆羅門」と
 Anokasārimappiccham=Anoka/anoka(n 依具)[an-oka]無家,非家.-cārin 非家行者,無世欲者+sārim/sārin(a.m.sg.acc)[< sareti < sr] さ
 まよう者,行く者 aniketa~,anokāsa~,diṭṭhi~+appiccham/appiccha(a.m.sg.acc)[appa-iccha]少欲の,欲なき, tamaham/ brūmi/
 brāhmaṇam.

(26-22) Aññatarabhiikkhuvatthu ある比丘の物語(4) — 打ちすえられても怒りを生じなかった阿羅漢 405

◆ nidhāya danḍanti imam̄ dhammadesanam satthā jetavane viharanto aññataram̄ bhikkhum̄ ārabbha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ある比丘について語られたものである。

その比丘は師のもとで瞑想の主題をいただいて、森林で努力して阿羅漢果に到達し、「獲得した徳を師に報告しよう」とその森から出た、ということである。

一方、ある家で、ある女が夫と喧嘩をして、夫が外へ出ていったときに、女が「実家に行こう」と旅路に出たところ、道の途中でその比丘を見て、「この長老を頼りにして行こう」と、比丘の後ろからずっと歩いて歩いた。長老は彼女を見なかつた。

さて、彼女の夫は家に戻ってくると妻がいないので、「実家の村に行ったに違いない」とあとを追いかけたが、彼女が見つからないので、「彼女が一人きりでこの荒野に足を踏み入れることはできない。誰に頼って行ったのだろう」と探し、長老を見て、「この男が彼女を連れ出したに違いない」と考えて、長老を脅した。すると、女が夫に、「このお方は私を見ていませんし、話もしていません。そのお方に何も言わないでちょうどだい」と言った。夫は、「おまえは自分で自分自身を連れて出ていった、と私に言うのか。おまえに相応しいことをこの男にしてやろう」と怒り狂い、女への復讐心から長老を打ち殺して、妻を連れて戻つていった。

長老は体中が瘤だらけになった。さて、彼が精舎に着いたとき、比丘たちは長老の身体をさすって瘤を見つけ、「これはどうしたことですか」と訳ねた。彼は比丘たちにその出来事を話した。すると、比丘たちは彼に言った。「ご同朋よ、その男がこんなふうに打ち殺されたとき、あなたは何と言いましたか。どれほど怒りを生じましたか。」「ご同朋よ、私に怒りは生じませんでした。」

比丘たちは師のもとへ行って、その出来事を話した。「尊師よ、彼は『あなたに怒りが生じましたか』と言われたとき、『ご同朋よ、私に怒りは生じませんでした』とありえないことを言って偽りを語っています。」師は彼らの話を聞くと、「比丘たちよ、煩惱を減し尽くした阿羅漢たちというものは、仕返しを捨て去っています。彼らは打たれても怒りを発しません」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「405 怯えるものであれ強きものであれ、生けるものたちへの暴力を捨て、害さず殺さない者たち、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。法話が終わったとき、多くのひとびとが預流果などを獲得した。

No.259 (2016年9月) 武器を持たない精神 自我がないとは、味方も敵もないと Perfect non violence

405.Nidhāya dandam bhūtesu, Tasesu thāvaresu ca; Yo na hanti na ghāteti, Tamaham̄ brūmi brāhmanam̄.

405.強き弱きにかかわらず 生き物すべてに武器むけず 殺さずそして殺させず そをバラモンと我は説く 訳：江原通子

覚ったつもり

瞑想実践を行なうと、簡単にこころが落ち着いて安定した状態になります。このような状況に達した修行者は、自分のこころの中で睡眠している煩惱に気づかないのです。こころは常に清らかな状態であるから、解脱に達したのではないかと思つてしまうのです。この勘違いは、仏教で adhimāna 増上慢と言います。Adhimāna を atimāna 高慢と勘違いしないでください。

存在欲と恐怖感から派生する欲と怒り

存在欲は、ただではありません。絶えず苦労することで、やっと成り立つものです。少々の手違いで、すべてが崩れるのです。存在欲と敵に対する恐怖を維持管理するために、自我・自分という概念を使うのです。存在欲がなければ、自我という意識もなくなるのです。解脱に達したとは、存在欲がなくなった、ということです。言い換えると、生きることに対する執着が消えたのです。生きる競争に負けて、自殺願望を抱く失敗者の気持ちとは違います。存在欲は成り立たないと、解脱者は智慧によって発見しているのです。解脱は成功者のゴールで、自殺願望は敗者のゴールです。

武器を持たない精神

存在欲がないから、武器をもつこと自体が無意味なのです。存在欲がないから、聖者にとって他の生命は味方でも敵でもありません。ただの生命です。聖者は、たくさんの味方をつくろうという努力も、敵を排除しようという努力もしないのです。聖者にとって自分の身体は、自然の他の物質と同じものです。自分の身体、という気持ちもありません。こころも、ただの認識作用を行なう働きに過ぎません。自分のこころ、という気持ちはないのです。「自分」という気持ちが消えたら、相対する「他人」という気持ちも消えます。この状況を俗世間の人々に理解できるように語るならば、「聖者はすべての生命に對して武器を持つことは致しません。生命を殺したり、殺させたりすることは一切ないのです」という言葉になります。

405. Nidhāya danḍam bhūtesu, tasesu thāvaresu ca; Yo na hanti na ghāteti, tamaham̄ brūmi brāhmanam̄.

405.動くものたちにたいし、さらには、動かないものたちにたいし、[一切の] 生類にたいし、棒（武器）を置いて、彼が、[他者を] 殺さず、[他者をして他者を] 殺させないなら、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ニダーヤ	ダンダン	ブーテース	タセース	ターワレース	チャ
Nidhāya	danḍam bhūtesu,		tasesu	thāvaresu	ca;
置いて、	棒(武器)を	[一切の]生類にたいし、	動くものたちにたいし、	動かないものたちにたいし、	さらには、
Nidhāya/nidahati(v. ger)[nidheti, Sk.nidadhāti <dhā]	下に置く、置く、蔵置す	danḍam	danḍa(m.sg.acc)杖,棒,むち,琴のばち,罰,		
刑罰,罰金 bhūtesu/bhūta(a.m.pl.loc)[bhavati の pp]存在せる①真実,実②生物,生類,有類,万物,要素,大種③部多,鬼神,鬼類,物精④已生者,漏尽者, tasesu/tasa(a.m.pl.loc)[Sk.trasa.cf.tasati ②戦慄する,ふるえる,動搖する,凡夫 thāvaresu/thāvara(a.m.pl.loc)					
[Sk.sthāvara <sthā]動かざる,定立者.確立者[阿羅漢] ca/ca(conj)~と,また,しかし,~も,そして+;					

ヨー	ナ	ハンティ	ナ	ガーテー	タマハン	ブルーミ	ブルーフマナン
Yo	na	hanti	na	ghāteti,	tamaham̄	brūmi	brāhmanam̄.
彼が、[他者を]殺さず、		[他者をして他者を]殺させないなら、	彼をわたしは、		説く。		「婆羅門」と
Yo/ya(閏代 m.sg.nom)[Sk.yah]~である人、~であるもの na/ hanti/hanati:hanti(v.pr.3sg)[han]殺す,害す,破壊す,打つ na/							
ghāteti/ghāteti(v.pr.3sg)[ghāta:denom])殺す,殺害す,殺さしめる, tamaham̄/ brūmi/ brāhmanam̄/.							

ある婆羅門夫人が四人の比丘を選んで招待する食事を準備して、夫の婆羅門に言った。「精舎に行って、四人の年老いた婆羅門を選ばせて、連れてきてください。」夫の婆羅門は精舎に行って、「私のために、四人の年老いた婆羅門を選んでください」と言った。すると、サンキッチャ、パンディタ、ソーパーカ、レーヴァタという七歳の、煩惱を減し尽くした阿羅漢沙弥たち四人が与えられた。

婆羅門夫人は高価な座を用意して待っていたが、沙弥たちを見ると怒って、〔熱せられた〕鉄鍋に投げ入れた塩のようにタタタと舌打ちをして、「あなたは精舎に行って、自分の孫ほどの歳にも届かない四人の少年を連れて戻ってきた」と言って、沙弥たちにはその高価な座にすわらせず、低い座を敷かせて、「ここにすわりなさい」と言ってから、夫に、「婆羅門よ、行って、年配の方々を探して連れていらっしゃい」と言った。

婆羅門は精舎に行って、サーリップッタ長老に会ったので、「さあ、私の家に行きましょう」と連れて行った。長老は婆羅門の家に来て沙弥たちを見ると、「この婆羅門たちは、食事をいただきましたか」と訊ねた。「食事はもらっていない」と聞くと、四人分の食事が用意されていることを知って、「私の鉢を持ってきてください」と、自分の鉢を取り戻して帰ってしまった。婆羅門夫人が「彼は何と言ったのですか」と訊ねると、「このすわっている四人の婆羅門が食事をいただくのに相応しいと言って、自分の鉢を持ってきてくださいと、自分の鉢を持って帰ってしまったよ」と夫は説明した。「食べたくなかったのでしょう。急いで行って、他のお方を探して連れてきなさい。」

婆羅門はまた精舎に行くと、モッガッラーナ長老を見たので、同じように連れてきた。しかし、モッガッラーナ長老も沙弥たちを見ると、同じように言って鉢を取り戻して出ていった。

すると、婆羅門夫人は夫に言った。「彼らは食べたくないのでしょう。婆羅門たちの溜まり場に行って、年寄りの婆羅門を一人連れてきなさい。」沙弥たちは朝早くから何も得られずに、空腹に苦しめられながらすわっていた。すると、彼らの徳の偉大さによってサッカの石の座が熱くなった。サッカは念をこらして、沙弥たちが朝早くからすわって苦しんでいることを知り、「私があそこへ行くべきだろ」と、高齢でよぼよぼになった婆羅門の姿になって、婆羅門の溜まり場の上座にすわった。夫の婆羅門は彼を見て、「今度は妻も私に満足するだろ」と思い、「いらっしゃい。家に行きましょう」と彼を連れて家に帰った。

婆羅門夫人は彼を見て大喜びして、二つの座に敷物を一つ敷き〔一つの大きな座にして〕、「尊いお方、ここにおすわりください」と言った。サッカは家に入り、四人の沙弥たちに五体を地につけて礼拝し、彼らの座の末端の地面に足組みをしてすわった。すると、婆羅門夫人はそれを見て、夫の婆羅門に言った。「まあ、あなたはこのように父親ほどの婆羅門を連れてきたのね。自分の孫みたいな子供たちを礼拝している。こんな人に何の用があるの。彼を追い出しなさい。」老婆羅門は、肩や手や腰紐をつかまれて引きずられても、立とうともしなかった。すると、婆羅門夫人は夫に、「さあ、婆羅門よ、あなたは片方の手を取りなさい。私はもう一方の手を掴みます」と言って、二人で(老婆羅門の)両手を擋んで、背中をたたきながら家の門から外へ出した。サッカはすわっていた場所にふたたびすわって、手を元に戻した。

婆羅門夫妻は家の中に戻ると、老婆羅門がすわったままいるのを見て、恐怖の叫び声をあげて、追い出そうとした。その途端、サッカは自分がサッカであることを知らせた。すると、婆羅門夫妻は食事を捧げた。

五人は食事を受け取って、一人は〔屋根の〕尖塔の丸い穴から通り抜け、一人は屋根の前部分に、一人は屋根の後ろ部分に、一人は地面に潜り、サッカももう一つの場所から外へ出る、というように、五人が五通りの仕方で出ていった。それ以来、その家は「五つ穴の家」として知られるようになった、ということである。沙弥たちが精舎に帰ったとき、「ご同朋よ、いかがでしたか」と比丘たちが訊ねた。

「私たちに訊ねないでください。私たちを見てから婆羅門の奥さまは怒りにふるえ、用意した座にすわることも許さずに、『早く年寄りの婆羅門を連れてきなさい』と言いました。私たちの〔サーリップッタ〕和尚さまが来ると、私たちを見て、『これらすわっている婆羅門たちが受け取るのが相応しい』と自分の鉢を取り戻して帰っていました。『別の年寄りの婆羅門を連れてきなさい』と言われて、婆羅門の旦那さまはマハー・モッガッラーナ長老を連れてきました。しかし、私たちを見て、やはり同じように言って帰りました。すると、婆羅門の奥さまは『この人たちが食べたがっている。婆羅門よ、行って婆羅門の溜まり場から、一人年老いた婆羅門を連れてきなさい』と言いました。婆羅門の旦那さまがそこへ行くと、婆羅門の姿をしてやってきたサッカを連れていきました。サッカが来たときに、私たちに食事をくださいました。」

「婆羅門夫妻がそのような振る舞いをしたとき、あなた方は怒らなかつたのですか。」「私たちは怒りませんでした。」比丘たちはそれを聞いて師に告げた。「尊師よ、彼らは『私たちは怒りませんでした』と、ありえないことを言って偽りを語っています。」師は、「比丘たちよ、煩惱を減し尽くした阿羅漢たちというものは、敵意を持つ人々にも心悩ますことはありません」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「406 敵意を持つ人々のあいだで敵意を持たず、棍棒を持つ人々のあいだで心穏やかで、執着を持つ人々のあいだで執着を持たない人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.260 (2016年10月) 自我が消えたらどうなる?虚妄分別を破る Notion of self impedes the reality

406. Aviruddham viruddhesu, Attadan̄desu nibbutam; Sādānesu anādānam, Tamaham̄ brūmi brāhmaṇam.

406. 敵意のなかに敵意なく 武器執るなかで寂靜に 取著のなかで無取著に そをバラモンと我は説く 訳:江原通子

競争はない

砂がお城の形をとっている間は、同じ仲間である周りの砂はライバルです。お城の形が消えたら、周りの砂はもうライバルではありません。これが覚者の世界観です。Aviruddham viruddhesu 対立で成り立っている世界にあって、覚者のこころからは対立が消えているのです。

自己防衛

誰だって、自己防衛に必死です。言葉を換えると、自分を守るために武器をとる気持ちを抱いているのです。自分という自覚が本当は錯覚であるならば、武器を持つ意味がなくなるのではないか？覚者には、虚妄分別がないのです。ですから、attadan̄desu nibbutam 武器をとる気持ちが消えているのです。

自由

世間は執着があるからこそ、成り立っています。Sādānesu anādānam 執着のある世界で、覚者は執着から離れているのです。このような精神状態の人こそ、覚者です。真のバラモンなのです。

虚妄分別の正しい意味は、「物事の真相を間違えたまま理解し、判断すること」と言うよりは、「自分という錯覚に囚われていること」です。お釈迦さまのこの教えに従って、正しく覚者を見分けるべきです。覚者には「自分がいる」という錯覚がないので、決して「私が覚ったぞ」などと公言しません。ですから、ブッダの教えに従って、その人のこころの境地を調べなくてはいけなくなるのです。

406. Aviruddham viruddhesu, attadan̄desu nibbutam; Sādānesu anādānam, tamaham brūmi brāhmaṇam.

406. [道を] 遮る者たちのなかにいながら遮ることなき者（一切にたいし敵意なき者）を、棒（武器）を取る者たちのなかにいながら涅槃に到達した者を、執取〔の思い〕を有する者たちのなかにいながら執取〔の思い〕なき者を—わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

アヴィルッダン ウィルデース アッタダンデース ニップタン
Aviruddham viruddhesu, attadan̄desu nibbutam;
遮ることなき者を [道を] 遮る者たちのなかにいながら、棒(武器)を取る者たちのなかにいながら 涅槃に到達した者を、
Aviruddham/aviruddha(a.m.sg.acc)[a-viruddha]不相違の,不違背の,矛盾なき viruddhesu/viruddha(a.m.n.pl.loc)[vi-rudh]の pp]違和の,相違せる,妨害の,害意ある-gabbhakarana 墮胎←vrudh[動 7(能反)]妨げる,包囲する,阻む,阻止する, attadan̄desu=atta/atta : ①(a 有持)得た,取れる attadanda 棒を取れる attañjaha 得たるを捨てる attamana 適意の②=attan(m)我,自己,我体 +dandesa/danda(m.pl.loc)杖,棒,むち,琴のばち,罰,刑罰,罰金-antara 杖間-ādāna 執杖-kathālikā 柄杓,ひしゃく-kamma 罰業,受刑-parāyana 杖に凭れる-pahāra 杖の打擲,杖擊-pāñin 杖を手にした-bhaya 刑罰の怖畏-yuddha 杖闘-rājin 筏,いかだ-lakkhana 杖相,杖うらない-vākarā 棒上の網,わな-sattha 刀杖. nibbutam/nibbuta(a.m.sg.acc)[Sk.nirvṛta 実は nibbāta <nibbāti]疲滅せる,涅槃に達せる cf.abhinibbuta,parinibbuta;

サーダーネース アナーダーナン タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Sādānesu anādānam, tamaham brūmi brāhmaṇam.
執取を有する者たちのなかにいながら 執取〔の思い〕なき者を 彼をわたしは、説く。 「婆羅門」と
Sādānesu/sādāna(a.m.n.pl.loc)[sa-ādāna]取著ある,有取の anādānam/anādāna(n.sg.acc)[an-ādāna]無取,無取著, tamaham/ brūmi/ brāhmaṇam/.

◆ yassa rāgo cāti imam dhammadesanaṁ satthā veļuvane viharanto mahāpanthakam ārabbha kathesi.

この法話は、師が〔ラージャガハ市の近くの〕竹林精舎に滞在しておられたときに、マハー・パンタカについて語られたものである。

この尊者は〔弟の〕チュッラ・パンタカが四ヵ月かけても一つの詩句を覚えることができずにいたので、「おまえは教えに向いていない。家の財産を享受する能力もない。おまえがここに住んで何になるか。ここから出でいくべきだ」と言って精舎から追い出して、門に門(かんぬき)をかけた。比丘たちは話を始めた。

「ご同朋よ、マハー・パンタカ長老はこういうことをされました。煩惱を滅し尽くした阿羅漢たちにも、怒りは生じるのだと思います。」師が来られて、「比丘たちよ、何の話で今ここに集まつてすわっているのですか」とお訊ねになり、「しかじかのことございます」と比丘たちが答えると、「比丘たちよ、煩惱を滅し尽くした阿羅漢たちは、貪欲などの汚れはありません。私の息子は、〔出家者の〕目的を護るために、法を護るために、それをしたのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「407 その人に貪欲と憎しみと、慢心と偽善とが脱落した人、芥子粒が錐の先端から落ちるように。その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.261 (2016年11月号) 阿羅漢は場合によって怒る？ 自我の錯覚が煩惱を惹き起こす Unconditional purity

407. Yassa rāgo ca doso ca, Māno makkho ca pātito; Sāsaporiva āraggā, Tamaham brūmi brāhmaṇam.

407. 芥子粒が錐(きり)の先から落ちるごと 貪り瞋りと慢心と 隠しだてとが脱け落ちし そをバラモンと我は説く
訳：江原通子

二つの欲

欲とは二種類です。五根から色声香味触のデータを取り入れて刺激を受けること。これは五欲と言います。欲の二番目は、存在欲です。「生きていきたい」という衝動です。

二つの怒り

阿羅漢は五根に入る対象をそのまま認識するので、善し悪しの判断はしません。ですから、怒りが現れないのです。二番目の怒りは、恐怖感です。

自我が消えた時（慢）

阿羅漢には慢（māno）がありません。自我が存在しないと発見している阿羅漢は、自分と他人を一切比較しないのです。

自我が消えた時（隠しだて）

阿羅漢には隠しだて（makkho）がありません。隠しだても二つの立場で理解するのです。自分が持っていない徳があるかのように見せかけること。上辺を飾ることでもあります。次の側面は、他人を見下すことです。他人の徳を評価しないという性格です。

針先に載せるカラシの種

針の上にカラシの種をバランスよく載せようと思っても無理です。落ちます。そのように、阿羅漢を非難侮辱して怒らせようとしても無理な話です。虐待して身体に重傷を負わせて怒らせようとしても無理です。阿羅漢には、「私」が存在しないのです。虐待を受けることも、色蘿が攻撃を受けて壊れてゆく、受蘿が苦に変わってゆく、というだけの流れなのです。庭にある樹木の枝が折れたら、気になります。困ります。「私の」樹木だからです。森にある樹木の枝が折れても、どうでもよいことです。気になりません。「私の」樹木ではないからです。「私」という錯覚が消えることが、一切の悩み苦しみの終焉です。煩惱の終焉です。

407. Yassa rāgo ca doso ca, māno makkho ca pātito; Sāsaporiva āraggā [āragge (ka.)], tamaham brūmi brāhmaṇam.

407. 芥子〔粒〕が錐の先から〔落ちる〕ように、彼の、しかし、貪欲（貪）が、かつまた、憤怒（瞋）が、〔我の〕思量（慢）が、さらには、〔虚栄の〕偽装（覆）が——〔それらが〕打ち倒されたなら、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヤッサ ラーゴー チャ ドーソー チャ マーノー マッコー チャ パーティー
Yassa rāgo ca doso ca, māno makkho ca pātito;
彼の、貪欲が、しかし、憤怒が、かつまた、思量が、〔虚栄の〕偽装（覆）が、さらには、〔それらが〕打ち倒されたなら
Yassa/ya(閏代 m.sg.gen)[Sk.yah]～である人、～であるもの rāgo/rāga(m.sg.nom)[// cf.rajati]貪、貪欲、染、染色、色彩-aggi 貪火-ānusaya 貪隨眠-ussada 貪の増盛-kkhaya 貪欲の尽滅-carita 貪行者-cariyā 貪行-tthānīya 貪の原因となるべき-dhamma 染法-patha 貪路-ratta 貪欲に染まれる-vinā 貪の調伏-virāga 染欲捨離-salla 貪箭-sahagata 貪俱行、貪を俱なえる ca/ca(conj)～と、また、しかし、～も、そして doso/dosa: ①(m)[Sk.dosa]過悪、過失、欠点、病素②(m)[Sk.dvesa]瞋、瞋恚 ca/, māno/māna: ①(m.sg.nom)[// <man]慢、慢心、きょう慢-ātimāna 慢過慢-ānusaya 慢隨眠-ābhisaṁyā 慢現觀、慢の止息-gāha 慢執-tthaddha 驕慢、傲慢-papañca 慢障礙-vāda 慢の論議-samyojana 慢結-satta 慢に執着せる-sambhūto 慢所生-salla 慢箭②(n)[// <mā]量、量目、尺度-kūta 度量の詐り、偽量③(m.n)[cf.māneti]尊敬 makkho/makkha(m)[BSk.mrakṣa <mrkṣ]覆、偽善、悪の覆藏；悪意 pl.nom.makkhāse-vinaya 覆の調伏。 ca/ pātito/pātita(a.m.sg.nom)[pāteti(pp)落ちたる、破壊せる、倒された←pāteti(v)[patati pat の caus]落とす、倒す、投げる、殺す aor.pātayimsu;pp.pātita;caus.pātāpetih←patati(v)[// pat]落ちる、倒れる、とまる
(aor)pati(fut)patissati(ger)patitvā(pp)patanta(pp)patita(caus)pāteti(pass)patīyati;

サーサポーリワ アーラッガー タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Sāsaporiva āraggā, tamaham brūmi brāhmaṇam.
芥子〔粒〕が 錐の先から〔落ちる〕ように、彼をわたしは、説く。「婆羅門」と

Sāsaporiva=sāsapo/sāsapa(m.sg.nom)[Sk.sarsapa]芥子(からし)、けしの種-kutta,-kudda 芥子粉-tela 芥子油+r/+iva/iva(indecl)[// BSk.viya]如く=viya,va āraggā/āragga(n)[ārā-aggā]錐尖、きりの先←ārā: ①(f)[//]錐 cf.āragga. ②(adv)[āra の abl]離れて、遠く-cārin 遠行の、遠く離れて住む cf.ārakā,ārakatta, tamaham brūmi brāhmaṇam.

(26-25) Pilindavacchattheravatthu ピリンダヴァッチャ長老の物語 408

◆ akakkasanti imam dhammadesanam satthā veļuvane viharanto pilindavacchattheram ārabbha kathesi.

この法話は、師が〔ラージャガハ市の近くの〕竹林精舎に滞在しておられたときに、ピリンダヴァッチャ長老について語られたものである。

この尊者は「来なさい、賤民よ。行きなさい、賤民よ」などと言って、在家の人々にも出家者たちにも「賤民」という呼び方を使っていた。そこである日、大勢の比丘たちが師に告げた。「尊師よ、ピリンダヴァッチャ尊者は、比丘たちを呼ぶのに「賤民」という呼び方を使っています。」師は長老を呼び出させて、「ヴァッチャよ、あなたが比丘たちに「賤民」という呼び方を使っているというのはまことですか。」「その通りでございます、尊師よ」と答えたので、節はこの尊者の前世の暮らし方を思いめぐらされて、「比丘たちよ、あなたがたはヴァッチャ比丘に不満を抱いてはなりません。比丘たちよ、ヴァッチャは心に憎しみを抱いて比丘たちに「賤民」という呼び方を使っているのではありません。ヴァッチャ比丘の五百の前身は途切れることなく、すべて婆羅門の家柄に生まれたのです。彼は長いあいだ『賤民』という呼び名を使っていました。煩惱を減した者には、荒く、粗暴で、他の人々の急所を傷つける言葉はありません。習い性となっていたために、私の息子はそのように言うのです」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「408 粗野でなく、真理を伝える、真実の声を発し、その言葉により何人も傷つけない人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.262 (2016年12月号) 言葉の使い方 言葉でこころの状態を読める Right speech is a product of pure mind.

408. Akakkasam viññāpanim Giram saccamudīraye Yāya nābhisejō kañci Tamaham brūmi brāhmaṇam.

408. 雅(みやび)に語り明確に 真理を伝えそれにより いかなる人も傷つけぬ そをバラモンと我は説く 訳:江原通子

美しい言葉は清浄なこころから生まれる

お釈迦さまの指導に基づいて修行して、煩惱を絶った人は解脱者です。こころが完全に清らかになっているので、感情の問題も、思考の問題も起こりません。修行すると脳も徐々に開発されます。脳の開発は解脱ではありません。こころの煩惱を絶つことが解脱です。ですから、解脱者に脳の機能的な問題があるはずはないのです。解脱者の言葉は、スマートです。Akakkasam ——洗練されている。意味がしっかりと含まれているから、相手に通じるのです。相手の心がよくわからない、と困るはめにはならないのです。

Viññāpanim ——明瞭である。自我の錯覚が消えているから、自と他の差も、解脱者にはないのです。自我の錯覚があるゆえに、相手の心を傷つける気持ちが起こるのです。ですから、解脱者の言葉には、相手の心を傷つける語は一切入らないのです。

Nābhisejō kañci ——いかなる人も傷つけない。もし、人の言葉がこのような性質を持っているならば、その人は眞のバラモン(聖者)であるとお釈迦さまは説かれます。要するに、正しい言葉を使える能力を身につけるためには、心の汚れを落とす必要があるのです。

阿羅漢たるピリンダヴァッチャ長老は、果たして品のない言葉で他人を呼んだのでしょうか?

過去生の話を持ってくると、宗教的な解釈になります。私はピリンダヴァッチャ長老が生まれ育った環境の方言のせいだ、と解釈したほうが良いのではないかと思います。この解釈の差は、日本語の方言と比較してみると理解できると思います。ある地方で乱暴な言葉と受け取られる単語も、別な地方では愛語として受け取られる可能性があるのです。

言葉の表面的な意味に足を引っ張られないように気をつけましょう。相手が伝えたい気持ちはなんなのかと注意をして、人の話を聞くようにしなくてはいけないのです。

408. Akakkasam viññāpanim, giram saccamudīraye; Yāya nābhisejō kañci [kiñci (ka.)], tamaham brūmi brāhmaṇam.

408. 粗野ではなく、〔はっきりと意味を〕識知させる、真理の言葉を発し、それによって、誰であれ、傷つけないなら、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

アカッカサン	ワインニヤーパニン	ギラン	サッチャムディーライエー
Akakkasam	viññāpanim,	giram	saccamudīraye;
粗野ではなく、	[はっきりと意味を]識知させる、	言葉を	真理の
Akakkasam/akakkasa(a.m.sg.acc)[a-kakkasa]粗暴ならざる、優雅な、柔軟な←kakkasa(a)[Sk.karkasa]粗暴の、暴言の←\kr[動8]作る、する、為す、実行する、行動する、～がうまい(～に熟達している)。 viññāpanim/viññāpana(a.m.sg.acc)viññāpanī(ī)[<viññāpeti]令知の、教授する←viññāpeti(v)[vijānāti]のcaus.Sk.vijñāpayati]知らせる、教える、教授すgrd.viññāpaya;pp.viññāpita←vijānāti(v)[// viññā]了知す、了別す、識知す imper.vijāna,vijānāhi; opt.vijaññām,vijāniyam,vijaññā; fut.viññāsati; aor.vijānimsu; ger.vijāniya,viññāya; inf.viññātum; grd.viññātappa,viññeyya; ppr.vijānanta,vijānam,vijānatā,vijānatam; pp.viññāta; pass.viññāyati 知られる.caus.viññāpeti 知らしめる。. . , giram/girā(f.sg.acc)[Sk.gir]語、発語 saccamudīraye=saccam/sacca(n=f.sg.acc)[Sk.satya,sat-ya]眞実、諦、真理 nom.saccam 真実である.acc.saccam(adv)眞に、確かに.abl.saccato 真実より、実際に+udīraye/udīreti(v.opt.3sg)[ud-īreti]のべる、言う、話す.opt.udīraye; pp.udīrita; pass.udīyati [Sk.udīryate]言われる cf.udīraṇa. ;			

ヤーや	ナービサジエ	カンチ	タマハン	ブルーミ	ブルーフマナン
Yāya	nābhisejō	kañci,	tamaham	brūmi	brāhmaṇam.
それによって、	傷つけないなら、	誰であれ、	彼をわたしは、	説く。	「婆羅門」と
Yāya/ya(閏代 f.sg.inst)[Sk.yah]～である人、～であるもの nābhisejō=na/+abhisaje/abhisajjati(v.opt.3sg)[abhi-sañj]不機嫌となる、怒る opt.abhisaje; aor.Abhisajjī kañci(m.sg.acc)←ka(pron.interr 疑代)[Sk.kah](m)ko(f)kā(n)kim 何、誰、どの、tamaham brūmi brāhmaṇam.					

(26-26) Aññatarattheravatthu ある長老の物語 409

◆ yodha dīghanti imāñ dhammadesanāñ satthā jetavane viharanto aññatarattherañ ārabba kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ある長老について語られたものである。

サーヴァッティー市で、間違った見方をする婆羅門が、身体の臭いが移るのを怖れて、上衣を取って片隅に置き、家の門のほうを向いてすわっていた。すると、ある阿羅漢の比丘が食事を済ませて精舎に帰る途中、その上衣を見て、あちらこちらを観察したが誰も見えなかつたので、「これは持ち主がないのだ」と、捨てられた布であると見なして取つた。すると、婆羅門は比丘を見て、怒りながら近づいて、「禿頭の修行者め、私の上衣を取つたな」と言つた。「婆羅門よ、これはあなたのものですか。」「修行者よ、そのとおりだ。」「私は誰も見なかつたので、捨てられた布だと思って取りました。さあ、どうぞ」と婆羅門に衣を返して精舎に帰り、比丘たちにそのことをありのままに話した。

彼の言葉を聞くと、比丘たちは彼をからかって、「ご同朋よ、その衣は長かったのですか、短かったのですか、粗い布だったのですか、柔らかい布だったのですか」と訊ねた。「ご同朋よ、長かったのか、短かったのか、粗い布だったのか、柔らかい布だったのか、わかりません。私はその布に執着がありません。捨てられた布だと思って、それを取つたのです。」それを聞いて、比丘たちは師に告げた。「尊師よ、この比丘はありえないことを言って、偽りを語っています。」

師は、「比丘たちよ、彼はありのままのことを話しています。煩惱を滅し尽くした阿羅漢たちは、他人の持ち物を取りません」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「409 この世で、長いもの、短いもの、極微のもの、粗大なもの、清淨であろうとなかろうと、世間で与えられないものは取らない人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.263 (2017年1月号) 知識を汚す判断 解脱を意味する不偷盜 Discerning without judgement

409. Yodha dīgham va rassam vā Anum thūlam subhāsubham Loke adinnam nādiyati Tamaham brūmi brāhmanam

409.このいかなる長と短 細粗あるいは淨不淨※ 与えられざるを取らぬもの そをバラモンと我は説く 訳：江原通子
※subhāsubhaは「高価・安価、美・醜」などの意味に取るべき。

判断は区別してから

感情で判断しないようにと戒めていくならば、区別してから判断する方向へと、こころが成長するのです。

判断を切り捨てる訓練

ヴィパッサー実践を行なう人にとっては、判断することが修行の障害になります。判断することで、成長が止まります。純粋に区別能力のみを育てて、完成させるのです。その時、ありのままに現象を観察することができるようになります。

聖者の判断

阿羅漢は自分の身体を観察して、機能が衰えて寿命が尽きてくると、「涅槃に入らなくては」と判断するのです。これらは最小限の判断で、生きるうえで欠かせないものです。しかしその場合も聖者は決して、判断してから区別することはしないのです。どちらかというと、仕方がなく判断するような生き方です。

死を待つ時

聖者の不偷盜とは、解脱を意味します。一般人の不偷盜は、幸福に生きるための道徳なのです。道徳を守る時は、煩惱という感情と戦わなくてはいけません。

偈の解説

人々の周りには、生きるために欠かせない品物の数より、生きることに関係ない品物の数のほうが多いのです。それは、判断して区別するからです。区別能力が乱れているので、良いものだと判断したら、それが欲しくなるのです。ここから偷盜を犯す危険性が完全に消えたら、真のバラモンなのです。それが阿羅漢であり、聖者なのです。

409. Yodha dīgham va rassam vā, anum thūlam subhāsubham; Loke adinnam nādiyati [nādeti (ma. ni. 2.459)], tamaham brūmi brāhmanam.

409.彼が、この〔世において〕、あるいは、長きものを、あるいは、短きものを、微細なると粗大なるものを、淨美なると淨美ならざるもの（清淨のものと不淨のもの）を——世において与えられていないものを取らないなら、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヨーダ ディーガン ワ ラッサン ワー アヌン トゥーラン スバースバン
Yodha dīgham va rassam vā, anum thūlam subhāsubham;
彼がこの〔世において〕、長きものを、或は、短きものを、或は、微細なると粗大なるものを、淨美なると淨美ならざるものを
Yodha=yo/ya(閏代 m.sg.nom)[Sk.yah]～である人、～であるもの+iha/ida,idhari(adv)[Sk. iha]ここに,此界に
dīgham/dīgha(a.n.sg.acc)[Sk.dīrgha]長き,長いもの va/va : ① iva 如くの略 ② eva もまたの略③ vā またはの代り
rassam/rassa(a.n.sg.acc)[Sk.hrasva]短き vā/vā(adv.conj)または,或は vā. . . vā. . . ka. . . ka. . . , anum/anu(a.n.sg.acc)[〃]微
少の,微細の,原子の -thūla 細粗 thūlam/thūla:thulla(a.n.sg.acc)[Sk.sthūla]粗大の,粗末な,あらき
subhāsubham=subha/subha(a.n.sg.acc)[Sk. subhas < subh]淨,清淨の,美しき,幸福の+asubham/asubha(a.n.sg.acc)[a-subha]不淨の

ローケー アディンナン ナーディヤティ タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Loke adinnam nādiyati, tamaham brūmi brāhmanam.
世において 与えられていないものを 取らないなら、 彼をわたしは、 説く。
「婆羅門」と
Loke/loka(m.sg.loc)世,世間,世界 adinnam/adinna(a.n.sg.acc)[a-dinna]与えられざる,不与の-ādāna 不与取,偷盜 -ādāyin 与えられざ
るを取る者,盜者 nādiyati=na/+ādiyati/ādiyati : ①(v.pr.3sg)[ā-diyati=ādāti,ādeti]取る②(v)[ā-dṛ の pass]破れる,裂ける, tamaham
brūmi brāhmanam.

(26-27) Sāriputtatheravatthu サーリプッタ長老の物語(6) — サーリプッタ長老に執着はない 410

◆ āsā yassāti imam dhammadesanām satthā jetavane viharanto sāriputtatheram ārabbha kathesi.

この法話は、師がジャーヴィナ精舎に滞在しておられたときに、サーリプッタ長老について語られたものである。

サーリプッタ長老が五百人の比丘たちと一緒に、地方のある精舎に行き、雨安居に入った、ということである。人々は長老を見て、雨安居に必要な支援物を与えることを約束した。しかし、長老が雨安居の終了式を行ったあとも、すべての雨安居に必要な支援物が届けられていないので、師のもとに行こうとして比丘たちに言った。「見習い比丘たちと沙弥たちに雨安居の支援物がもたらされたら、それを受け取って送ってください。さもなければ、伝言を送ってください。」そのように言ってから、師のもとに行った。

比丘たちは話を始めた。「今、サーリプッタ長老には物への執着があると思います。というのも、『人々から雨安居の支援物(布)が布施されたら、自分の共住比丘たちに、その雨安居の支援物を送ってください。さもなければ伝言を送ってください』と、比丘たちに言ってから戻ってきましたから。」師が来られて、「比丘たちよ、何の話で今ここに集まってすわっているのですか」とお訊ねになり、「しかじかのこととござります」と比丘たちが答えると、「比丘たちよ、私の息子に物への執着はありません。そうではなく、[支援をすることで得られる]人々の功德と、見習い比丘や沙弥たちの法に適った利益が失われることがないようにと考えて、サーリプッタはそのように話したのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「410 この世でもあの世でもその人に欲望がなく、渴望なく、捉われがない人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.264 (2017年2月号) 願望の代価は苦しみ 智慧で願望を乗り越えるべき Savants run away from desire

アルボムッレ・スマナサーーラ長老

今月の巻頭偈 Dhammapada Capter XXVI. Brāhmaṇavagga 第26章 婆羅門の章

410. Āsā yassa na vijjanti, Asmim loke paramhi ca; Nirāsāsam visamyuttam Tamaham, brūmi brāhmaṇam.

410.この世かの世のもうもの すべての希求(きぐ)のなきものは 依止なく縛(ばく)を離れたり そをバラモンと我は説く
訳:江原通子

仏教用語の二つの意味

仏教用語は、いつでも二つの意味を持っています。一つは日常使う意味です。もう一つは真理を表す意味です。

Tanhā の場合は、一般的な意味は「(喉が)渴いた状態」です。英語なら thirsty, thirst と訳されます。誰でも知っている意味です。仏教で用いる、真理を表す意味は「存在をし続けさせるエネルギー」のことです。いくら生きていっても満足できず、さらに生き続けたいという気持ちから、「渴き状態」をイメージしたのでしょうか。

渴愛=願望

今月、紹介したい単語は āsā です。Āsā の一般的な意味は、願望・希望・欲しがること。英語で言えば、expect, desire です。Āsā もまた、渴愛 (tanhā) の同義語です。英語で言えば、tanhā は craving で、āsā は desire になります。

病を育む似非えせ治療

論理的に言えば、治療はいたって簡単です。ないものねだりを止めることです。願望を抱かないことです。しかし、願望・希望などを一切持たない人間になれますか? なれませんね。病気があるならば、病気をなくすことです。

無願という超越

成功に達した聖者は、この世のいかなる現象に対しても、願望を持たないのである。あの世・死×後に關するいかなる現象に対しても、願望を持たないのである。ここが nirāsā・無願に達するのです。無執着に達するのです。その状態に達したこそ真のバラモンである、と釈尊が説くのです。

410. Āsā yassa na vijjanti, asmim loke paramhi ca; Nirāsāsam [nirāsayam (sī. syā. pī.), nirāsakam (?)] visamyuttam, tamaham brūmi brāhmaṇam.

410.この世において、さらには、他 [の世] において、彼に、諸々の願望 (自己中心的な期待や思惑) が見い出されないなら、願い求め [の思い] なき者であり、束縛を離れた者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

アーサー ヤッサ ナ ウィッジヤンティ アスミン ローケ パランヒ チャ
Āsā yassa na vijjanti, asmim loke paramhi ca; Nirāsāsam [nirāsayam (sī. syā. pī.), nirāsakam (?)] visamyuttam, tamaham brūmi brāhmaṇam.
諸々の願望が 彼に、 見い出されないなら、 この 世において、 他[の世]において、 さらには、
Āsā/āsā(f.pl.nom)[Sk.āsā]希望,願望,意欲 yassa/ya(関代 m.sg.gen)[Sk.yah]~である人,~であるもの na/ vijjanti/vijjati(v.pr.3pl)
[vindati]の pass.Sk.vidyate]見出される,知られる,存在する.pr(3pl)vijjare; aor.vijjitha,vijjimsu; ppr.vijjamāna.cf.vindati. , asmim/
imā(指代 m.sg.loc)これ loke/ loka(m.sg.loc)世,世間,世界 paramhi/para[〃] : ①(adv.prep)向うに,越えて,彼方に②(a 代的 m.sg.loc)
他の,彼方の,上の instr.parena 後に abl.parato 他として,彼方に,さらに,後に-loka 他界,来世 ca/ca(conj)~と,また,しかし,~も,そして;

ニラーサヤン ウイサンユッタン タマハン ブルーミ ブラーフマナン

Nirāsayam visamyuttam, tamaham brūmi brāhmaṇam.

願い求め [の思い] なき者であり、 束縛を離れた者であり、 彼をわたしは、 説く。 「婆羅門」と

Nirāsāsam/nirāsaya(a.m.sg.acc)[nir-āsaya]無依の,依止なき←āsaya(m)[Sk.āśraya,BSk.āśaya] : ①所依,依所,棲處②意志,意向,意樂 cf.ajjhāsaya. ③ 分泌物. visamyuttam/visamyutta:visaññutta(a.m.sg.acc)[< vi-samyuj]離縛せる,離繫せる者,軛を離れたる
←samyuñjati(v)[sam-yuj]結ぶ,統一す pp.samuyutta; pass.samuyjati; caus.samyojeti, tamaham brūmi brāhmaṇam.

(26-28) Mahāmoggallānatheravatthu マハー・モッガッラーナ長老の物語(2) — マハー・モッガッラーナ長老に執着はない 411
◆ yassālayāti imam dhammadesanam satthā jetavane viharanto mahāmoggallānatheram ārabbha kathesi. vatthu purimasadisameva. idha pana satthā moggallānatherassa nittānhabhāvam vatvā imam gāthamāha —
この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、マハー・モッガッラーナ長老について語られたものである。物語は前話と同じである。ここでは師はマハー・モッガッラーナ長老に執着がないことを知って、次の時句を唱えられた。「411 その人に執着がなく、よく知って疑いがなく、深潜なる不死(涅槃)に到達した人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.265 (2017年3月号) 見た目では分かりません ひとは内面が大事です Beauty is only skin.

411.Yassālayā na vijjanti, Aññāya akathampathī; Amatogadhamanuppattam, Tamaham brūmi brāhmaṇam.

411.執する所更になく 義を了知して疑わず 不死なる道に至り得ば そをバラモンと我は説く 訳:江原通子

人間離れしていく釈尊像

釈尊在世の時は、身体の特色よりはブッダ特有の智慧の力について説明されていましたが、じわじわと身体の特色も説明されるようになりました。もっとも有名なのは三十二相の話です。ブッダには、常識では考えられない三十二種類の身体的特色があると語られたのです。

身体ではなくこころを見る

身体ではなく、こころを見なくてはいけないです。こころに煩惱が一切ないならば、煩惱が現れる可能性すらないならば、聖者です。阿羅漢です。智慧を完成しているならば、聖者です。ダンマパダ第二十六章のすべての偈において、こころ清らかにした人が聖者であり、バラモンであると強調しています。

生命のよりどころ

阿羅漢には愛着がありません。Ālaya という単語は、愛着と訳されています。Ālaya の元の意味は「家」、英語でいう home です。建物を指す house ではありません。Home とは、肉的にも精神的にも、誰もが頼りにする場所です。皆のよりどころです。すべての人間に、マイホームがあるのです。

聖者にマイホームはありません。それが大胆なポイントです。マイホームが無ければ精神的に狂ってしまうはずなのに、摩訶不思議なことに徹底的に落ち着いています。まるで、広大無辺な大宇宙そのものがマイホームになったかのように落ちています。聖者に精神的なよりどころは要りません。肉体を持っているから、適量に食べものや衣などを使うが、それにさえ執着も愛着もないのです。「使い捨て」の気持ちで使っているのです。Ālaya という単語を、執着と訳することもできます。何かに執着しないと、命が成り立たないです。ひとは衣食住薬に頼る必要があります。空気と水に頼る必要があります。眼耳鼻舌身意から入る情報に、頼る必要があります。それは「生きていきたい」という存在欲があるからです。存在欲を根絶した時点で、ものごとに頼る必要もなくなるのです。それでは、生き続けられないのです。言葉を変えると、輪廻転生ができなくなるのです。この肉体が壊れたら、涅槃に入ります。聖者には、一切の依存がないのです。

実存的危機 (existential crisis) ※

聖者にとって、存在に関わる疑義、真理に関わる疑義は一切ないです。疑がないと言われると、一般人は「覚りに達したら、なんでも知っている全智者になる」という形而上学的な落とし穴に陥りがちです。それを避けるために、実存的問題を仏教で分析しているのです。基本的には、八種類になります。

※実存的危機とは、個人が自分の存在の基礎・基盤そのものに対して疑を抱くことです。生きることに意義があるのか、目的があるのか、価値があるのか、などなどの疑問です。An existential crisis is a moment at which an individual questions the very foundations of their life: whether this life has any meaning, purpose, or value. (Wikipedia)

八種類の疑

①ブッダに対する疑: 「真理を発見して完全に存在を乗り越えた人などいるのか? あり得ないのではないか?」などなどとの疑い。ブッダとは実存的危機を乗り越えた人です。自分にその危機があっても、乗り越えた人がいるのだと知るならば、その疑から抜ける道が見えるはずです。はじめからブッダという概念に対して疑を持つと、どうしようもないのです。

②法(ダンマ)に対する疑: 真理を発見した人が、その真理を人間に語るのです。それに法と言います。一切現象のありのままの姿を法と言います。存在のありのままの姿も法と言います。これらの法を知るならば、実存的危機が解決します。最初から真理を疑うと、どうしようもないのです。

③サンガに対する疑: サンガとは真理の教えを実践して存在の問題を解決して乗り越えた人々です。そのような人々はいるはずがないと疑うと、自分自身の実存的危機はそのままです。

④修行に対する疑: 戒を守って、こころを落ち着かせて、冥想修行で集中力を育てて、真理を観察して智慧を開発して、解脱に達する道を歩むならば、存在を乗り越えられます。その修行を認めないならば、否定するならば、結果があり得ないと思うならば、その人の精神的な悩みは消えるどころか増えるばかりです。

⑤前際(過去)に対する疑: これは自分自身に過去があったのか、なかったのか、などなどと考えて困ることです。

⑥後際(未来)に対する疑: これは自分自身に死後があるのか、ないのか、などなどと考えて困ることです。

⑦前後際(現在)に対する疑: これは今・ここで自分自身に命というものがあるのか、ないのか、自分がいると言えるのか、言えないのか、などなど自分自身の存在に対することを考えて、疑って、困ることです。

⑧縁起に対する疑: 因果法則は、一切現象のありのままの姿を明らかにします。因果法則を知った人には、一切現象に対する疑が起きません。すべては因縁によって一時的に成り立って、消えていくものです。なんの見解も持つ必要はないのです。それにもかかわらず、因果法則を最初から否定して、この命は誰が作ったのか、この宇宙は誰が作ったのか、突然あらわれて消えるのでしょうか、などなどと考えて困ることです。

経典にある十六種類の疑

パーリ経典では、過去・現在・未来に対する疑をさらに詳しく説明しています。

過去に対して、①私は過去世にいたのでしょうか? ②私は過去世にいなかったのでしょうか? ③私は過去世で何になったの

か？④私は過去世でどのようになったのか？⑤私は過去世で何になり、その後何になったのか？

同じ疑問を未来に対しても、現在に対しても作ることができます。⑥私は未来に現れるのか？⑦私は未来に現れないのか？⑧私は未来に何になるのか？⑨私は未来にどのようになるのか？⑩私は未来に何になり、その後何になるのか？⑪今・現在に、私は存在しているのか？⑫今・現在に、私は存在していないのか？⑬今・現在に、私は何であるのか？⑭今・現在に、私はどのようにあるのか？⑮この命はどこから来ているのか？⑯この命はどこへ行く者になるのか？(MN.1-2, Sabbasavasuttam)

ここで紹介した八種類と十六種類のリストには、人間が抱く、また抱く可能性のある、実存的な疑問がすべてカバーされています。現代人が持っているさまざまな実存的な疑問もこのリストに入っているのです。阿羅漢に一切の疑がないというのは、これらの疑がすべて消えることなのです。阿羅漢になるとは全智者になることだと、うかつに誤解してはいけません。

「全智者でないならば、阿羅漢にも疑があるのではないか？」と邪見を持つことは間違います。ひとの名前くらい知らなくとも、どうでもいいことです。しかし阿羅漢は、存在についてすべてを知っています。人間が抱えている問題に、正しく答える能力を持っているのです。

不死に達している

不死(amata)とは涅槃の境地です。これも一般人に理解できない単語です。不死と聞いた途端、「永遠の命」と勘違いしてしまうのです。生きるとは苦です。永遠に生きるとは、永遠に苦ということです。無常の苦であった自分が修行して、永遠の苦に達したというのはおかしな話です。阿羅漢とは、存在を乗り越えて安穏に達している方です。その境地は、言葉で表現できる範囲を超えていきます。このような状態に達した人こそが、阿羅漢であり、真のバラモンなのです。

411. Yassālayā na vijjanti, aññāya akathamkathī; Amatogadhamanuppattam, tamaham brūmi brāhmaṇam.

411. 彼に、諸々の執着が見い出されず、[一切を]了知して、懷疑なき者となるなら、不死への沈潜(涅槃)を獲得した者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヤッサーーラヤー	ナ	ウイッジヤンティ	アンニヤーア	アカタンカティー
Yassālayā	na	vijjanti,	aññāya	akathamkathī;
彼に、諸々の執着が	見い出されず、		[一切を] 了知して、懷疑なき者となるなら、	
Yassālayā=Yassa/ya(閑代 m.sg.gen)[Sk.yah]～である人,～であるもの+ālayā/ālaya(m.n.pl.nom)[ā-lī](1)阿頬耶,執著,愛著,所執處(2)家,藏 na/ vijjanti/vijjati(v.pr.3pl)[vindati の pass.Sk.vidyate]見出される,知られる,存在する.pr(3pl)vijjare; aor.vijjitha,vijjimsu; ppr.vijjamāna.cf.vindati, aññāya/aññāya(a)[ājānāti の ger]了知して,開悟して←ājānāti(v)[ā-jānāti]了知する,よく知る =āññāti.opt.ājāneyyum; pp. aññāta akathamkathī/akathamkathī(m.sg.nom/acc : -ī,-in～を持っている)疑いなき←akathamkathā(f)[a-kathamkathā]疑いなきこと,無疑←kathamkathā(f)疑惑,猶予				

アマトーガダマヌッパッタン	タマハン	ブルーミ	ブルーフマナン
Amatogadhamanuppattam,	tamaham	brūmi	brāhmaṇam.
不死への沈潜(涅槃)を獲得した者であり、	彼をわたしは、	説く。	「婆羅門」と
Amatogadhamanuppattam=amata/amata(a.n 依対)[a-mata,Sk. amṛta]不死の,不死,甘露,涅槃 +ogadham/ogādha:ogadha(a.n→m.sg.acc)[Sk.avagādha < gāh]沈潜せる,潜入せる,深入せる,確固たる,堅き足場,堅固な地 +anuppattam/anuppatta,anupatta(a.m.sg.acc)[anupāpuṇāti の pp.]到達せる,得たる, tamaham brūmi brāhmaṇam.			

(26-29) Revatattheravatthu レーヴァタ長老の物語 412

◆ yodha puññañcātī imam dhammadesanam satthā pubbārāme viharanto revatattheram ārabba kathesi. vatthu “gāme vā yadi vāraññe”ti (dha. pa. 98) gāthāvāññāna vitthāritameva. vuttañhi tattha (dha. pa. Añtha. 1.98) –

この法話は、師が〔サーヴァッティー市の近くの〕東園精舎に滞在しておられたときに、レーヴァタ長老について語られたものである。物語は「たとえ人里であれ森林であれ」という詩句の註釈で詳しく述べられた〔(7-9) Khadiravaniyarevataattheravatthu アカシアの森のレーヴァタ長老の物語 98〕。そこでは次のように述べられている。

またある日、比丘たちが話を始めた。「〔レーヴァタ〕沙弥の利得はなんと素晴らしいことでしょう。一人で五百人の比丘たちのために、五百の楼閣講堂を作ったとは、なんという福徳でしょう。」師が来られて、「比丘たちは、何の話で今ここに集まっていますか」とお訊ねになり、「しかじかのことです」と「比丘たちが答えると、「比丘たちは、私の息子には、善も悪もありません。彼にとっては、どちらも捨て去られています」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「412 この世において善も悪も、いずれにもこだわりを超越し、憂い無く、欲無く、滑らかな人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.266 (2017年4月号) 善悪の超越 善も悪も孰著です Relative and absolute righteousness

412.Yodha puññañcā pāpañca, Ubho sañgamupaccagā; Asokam virajam suddham, Tamaham brūmi brāhmañam.

412.この世の福と禍(わざわい)と 両(ふた)つながらの著(じやく)を去り 無憂 無貪の清淨者 そをバラモンと我は説く
訳:江原通子

ブッダの戒め

七仏通誠偈としても知られる、ブッダの教えをすべてまとめた偈があります。

Sabbapāpassa akaranam すべての悪を犯さないこと

Kusalassa upasampadā 善に至ること

Sacittapariyodapanam 自らのこころを清めること

Etam buddhāna sāsanam これが諸仏の教えである

(DhP.183 ダンマパダーハ三偈)

この偈は、完成するまで実践できるように説かれた教えです。

普遍的な真理

偈の二行目は一般的に「善行為をすること」と訳しますが、本意は少々違うと思います。悪を犯さないように戒めるだけで、善行為です。二行目の意味は、「善に至ること」です。要するに、善い人格を築き上げることです。善行為をするだけで止まらず、善人になろうと励むのです。三行目の意味は、「自らのこころを清めること」です。こころは煩悩で汚れています。その煩悩をなくす努力をしなくてはいけない。こころを清らかにする仕事は、必ず本人がやらなくてはいけないです。他人に頼んで清らかなこころを作ってもらうなんて、あり得ない話です。

俗世間の善悪観

一般人は、この教えを「悪行為をやめて、精一杯善行為をすることである」と単純に理解して実行しているのです。「悪を犯すと不幸に陥るのだ、善を行なうと幸福になるのだ」というのは、一般的に知られている仏教の話です。だから一般の仏教徒は、五戒を守ることで悪から身を守ろうとするのです。それから、さまざまな善行為をして、功德を積もうとします。たくさんの功德が積まれたところで、解脱に達するのだと信仰しているのです。ブッダ本来の教えとは少々変わっているが、仏教徒たちはそれを気にしないのです。なぜならば、悪を犯さないこと、善を行なうことは、どう見ても善い生き方に決まっているからです。

矛盾で終わる曖昧な理解

善悪の区別は、善悪観ではなく「善悪感情」になっています。感情とは、主観的で勝手な気持ちであって、客観性のある具体的な話ではないのです。ですから、人を殺してはいけないと言っているのに、敵を倒すために闘わなくてはいけないとも言うのです。盗んではいけないと言っているのに、さまざまな工夫を凝らして宣伝して、それほど価値のない品物を高値で売ってぼろ儲けをしているのです。平和を守るために、武器を開発するのです。言葉を変えれば、「平和を好むなら、弾を始めたピストルを携帯しなさい」ということになります。

仏教的な善悪の定義

幸福な結果をもたらす行為は善行為で、不幸に陥る行為は悪行為になります。そこに矛盾があつてはならないのです。一切の行為はこころが惹き起こしているものです。貪瞋痴で汚れた行為は悪です。不貪不瞋不痴でおこなう行為は善です。それが最終的な定義です。

相対的善悪

与えられたものでなくとも取りたい、自分のものにしたい、という感情が人間のこころに既にあるから、与えられていないものを取らないことが善行為になっています。ひとは自然に嘘をついてでも自分を守りたいのです。だからこそ、がんばって嘘をつかないことは善行為になります。善が悪を養う、悪が善を養う、というような変な関係です。

この相対的な関係を支えているのは何でしょうか? 生きていきたいという存在欲です。なぜ生命は生きていきたいと思うのでしょうか? ほんのわずかな過ちでも起きたら、命が終わってしまう危険性があるからです。世にある一番脆いものは命です。脆いからこそ、命は必死で守らなくてはいけないです。命に対して愛着がなければ、守る必要もなくなります。このように、わたしたちの目の前には、相対的でなければ成り立たない現象の世界があらわれているのです。「わたし」という言葉さえも、相対的な現象です。

善悪の超越

ありのままにものごとを観察すると、現象の本当の姿を発見できます。現象が相対的であることも、瞬間瞬間に変化していくものであることも、発見するのです。その智慧によって、存在欲が無くなります。ふたたび現れることも無くなります。すべての現象は無常であると発見した人のこころから、執着が消えてしまいます。執着が消えたら、善行為も悪行為も成り

立ちません。ただ、行為だけになります。解脱者の立場から観れば、善も執著で、悪も執著なのです。

超越した人の心境

ここから存在欲が消えたら、この現象の世界で何が起きても、その人に憂い悲しみがないのです。無常を発見した人にとっては、眼耳鼻舌身意にどんな対象が触れても、こころが汚れることはあります。無常を発見した人のこころは、絵を描くことが不可能な空(そら)のようです。相対的な世界に住む人々に理解してもらうためには言葉を使わざるを得ないので、「聖者のこころは清らかだ」と表現しています。しかしこれは、不淨に対する淨のことではないのです。

聖者のこころには、善 (puñña) という執着も、悪 (pāpa) という執着もありません。この二つの執着 (ubho saṅgam) を超えています。憂い悲しみが起こらない (asokam) のです。こころは汚れなく (virajam) 無色透明できれい (suddham) です。これが眞の聖者の精神状態なのです。

412. Yodha puññañca pāpañca, ubho saṅgamupaccagā; Asokam virajam suddham, tamaham brūmi brāhmaṇam.

412. 彼が、この〔世において〕、善も、悪も、両者ともに、執着〔の思い〕を超え行つたなら、憂いなく、〔世俗の〕塵を離れる、清淨の者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヨーダ プンニヤンチャ パーパンチャ ウボー サンガムパッチャガー
Yodha puññañca pāpañca, ubho saṅgamupaccagā;
彼が、この[世において]、善も、悪も、 両者ともに、執着[の思い]を超え行つたなら、
Yodha=yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]～である人、～であるもの+idha/idha,idhañ(adv)[Sk.ihā]ここに,此界に idha-loka 此世-loka-vijaya 此世の勝伏-loka-saññin 此世想者 puññañca=puññañ/puñña(n.sg.acc)福,善,福德,功德+ca/ pāpañca=pāpañ/pāpa(a.n.sg.acc)悪き,悪,悪人+ca/, ubho/ubho(a 双数 pl)[Sk.ubhau]ニつ,双,両者 dat.gen.ubhinnam.ubhantam 両側,両端
saṅgamupaccagā=saṅgam/saṅga(m.sg.acc)[<sañj]着,染着,執着-ātiga 执着を越えたる者(=阿羅漢)
+upaccagā/upātigacchati(v.aor.3sg)[upa-ati-gacchati]超える,征服す aor.upaccagā,upaccagum;

アソーカン ウィラジヤン スッダン タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Asokam virajam suddham, tamaham brūmi brāhmaṇam.
憂いなく、〔世俗の〕塵を離れる、清淨の者であり、彼をわたしは、説く。「婆羅門」と
Asokam/asoka(a.m.sg.acc)[a-soka]無憂の,不愁の; 無憂樹 virajam/viraja(a.m.sg.acc)離塵の,塵を離れた
suddham/suddha(a.m.sg.acc)[sujjhati:pp]淨き,清淨の,純粹の-attīhaka 純八法-ānu-assin 淨觀者-antaparivāsa 淨淨辺別住-āvāsa 淨居-kālaka 純黒の-ditthi 清淨の見-vasana 清淨衣の-vipassanā 純毘鉢舍那-saṅkhārapuñja 単に諸行の集積. , tamaham brūmi
brāhmaṇam.

まずここに、順序に従った物語がある。

過去物語

昔、バーラーナシー市に住むある商人が、辺境地方に行って梅檀を仕入れてこようと、たくさんの衣や装身具などを積んで五百の荷車を率いて辺境の地へ行き、村の入り口に野営して、荒野で牛飼いをしている少年たちに訊ねた。「この村に木樵は誰かいませんか。」「いますよ。」「何という名前ですか。」「しかじかという名前です。」「その人の奥さんや子供たちの名前は何といいますか。」「しかじかという名前です。」「その人の家はどこにありますか。」「しかじかという場所にあります。」

商人は少年たちから得た情報を持って、気持ちのよい乗り物にすわってその男の家の戸口に行き、乗り物から降りて家に入り、しかじかという名前で女性を呼んだ。彼女は、「私たちの親戚の人に違いない」と急いで出てきて、座を用意した。商人はそこにすわって名前を告げ、「私の友人はどちらにいますか」と訊ねた。「森に行きました、日旦那さま。」「私の息子のしかじかと、私の娘のしかじかはどこにいますか」と全員の名前を呼びながら訊ねて、彼らに持ってきた衣や装身具などを、「私の友人が荒野から戻ってきたときに、この衣と装身具を渡してください」と言って与えた。彼女は商人に盛大なもてなしをして、夫が戻ってくると、「旦那さま、この方はうちへ来たときから全員を名前で呼んで、あれやこれやの物をくださいました」と言った。夫も商人に丁重にふるまつた。

さて、夜になって商人は寝床にすわって木樵に訊ねた。「友よ、山裾を歩いているとき、これまで何をたくさん見ましたか。」「他のものは見ません。ただ赤い枝の木はたくさん見ました。」「たくさんの方ですか。」「そうです。たくさんです。」「では、私に見せてください。」

〔次の日〕商人は木樵と一緒にその場所に行き、赤梅檀の木を切って、五百台の荷車に満載して戻るときに言った。「友よ、バーラーナシー市のしかじかという場所に私の家があります。時々私のところへいらっしゃい。他の贈り物は要りません。赤い枝の木だけを持ってきてください。」木樵は、「わかりました」と言って、時々、商人のもとへ行くときに赤梅檀を持っていった。商人は木樵にたくさんの財宝を与えた。

その後、カッサバ仏が般涅槃し、金の仏塔が建立されるとき、木樵の男はたくさんの梅檀を持ってバーラーナシー市へ行った。すると、彼の友人の商人は、たくさんの梅檀を粉にして器に満たし、「友よ、いらっしゃい。ご飯を炊くあいだ、仏塔を作っている場所に行って戻ってきましょう」と木樵を連れてそこへ行き、〔仏塔に〕梅檀による供養をした。辺境の地に住む友人も、仏塔の内陣に梅檀の木で月輪を作って奉納した。以上が彼の前世の行いであった。

現在物語

彼はそこから死没して天界に再生し、〔カッサバ仏からゴータマ仏が現れるまでの〕一つの無仏の時代をそこで過ごし、今 のブッダが現れると、ラージャガハ市の婆羅門の大家に再生した。彼の臍の中心から月輪にも似た光が発せられていた。そこで、彼にチャンダーバ(月光)という名前がつけられた。これは彼がカッサバ仏の仏塔のために梅檀の月輪を作った行為の結果であった。

婆羅門夫婦は考えた。「この息子を連れていけば、私たちは世間を食い物にできるぞ。」そこで、チャンダーバを乗り物にすわらせて、「彼の身体を手で触る者は、しかじかのような素晴らしい幸運を手に入れますぞ」と言って歩いた。百金あるいは千金を出す人々に、そのように息子の身体を手で触らせた。婆羅門夫婦はそのようにして旅をして、サーヴァッティー市に着き、郡と精舎のあいだに宿営した。

サーヴァッティー市では、五千万の聖なる弟子たちが午前に食事の布施を捧げ、午後は香、花輪、衣、医薬などを手に法話を聴きに精舎へ行くのであった。婆羅門夫婦は彼らを見て、「どこへ行くのですか」と訊ねた。「師のもとに法話を聴きに行くのです。」「いらっしゃい。そこへ行って何になるのです。私たちのチャンダーバ婆羅門の威力に等しい威力はありません。彼の身体に触れた者は、しかじかのような幸運を手に入れるのです。来て彼をご覧なさい。」

「あなた方の婆羅門の威力がどんなものか知りませんが、私たちの師こそ偉大な威力をお持ちです。」彼らはお互に説得することができなかったので、「精舎に行って、チャンダーバか私たちの師か、どちらに威力があるか知ることにしましょう」と、チャンダーバを連れて精舎に赴いた。

師はチャンダーバが自分のもとへ近づいてくるとき、彼の月光が消えるようにされた。彼は師のそばへ来たとき、炭の籠の中のカラスのようになった。そこで、婆羅門夫婦は彼を片隅に引っ張った。すると、光がはっきりと現れた。ふたたび師のそばへ連れてきた。光は前と同じように消えた。このように三度、師のそばへ来て光が消えるのを見て、チャンダーバは考えた。「このお方は光が消えることを知っているようだ。」チャンダーバは師に訊ねた。「あなたは私の光が消えることをご存知ですか。」「その通り、知っています。」「では、その力を私にください。」「出家していない者に与えることはできません。」

チャンダーバは婆羅門夫婦に言った。「そのマントラ(呪文)を覚えれば、私は全ジャンブ州で一番になれるでしょう。あなた方はここにいてください。私は出家して、数日のうちにマントラを習得します。」チャンダーバは師に出家を願い出て出家し、具足戒を受けた。すると、師は彼に三十二の身体の要素を教えた。彼は「これは何ですか」と訊ねた。「マントラの準備となるもので、暗誦するとよいでしょう。」〔'atthi imasmin kāye kesā lomā nakhā dantā taco, mamsam nhāru atthi atthi miñjam vakkam, hadayam yakanam kilomakam pihakam papphāsam, antam antagunam udariyam karīsam, pittam semham pūbbo lohitam sedo medo, assu vasā khelo siñghānikā lasikā mutta matthaluñgam'nti. 〈この身には、髪・毛・爪・歯・皮・肉・筋・骨・骨髄・腎臓・心臓・肝臓・肋膜・脾臓・肺臓・腸・腸間膜・胃物・大便、胆汁・痰・膿・血・汗・脂肪、涙・脂肪油・唾・鼻液・関節液・小便 脳みそがある〉と。〕

婆羅門夫婦は時折やって来て、「マントラは習得したか」と訊ねた。「まだ習得していません。」チャンダーバは数日のう

ちに阿羅漢果に到達して、婆羅門夫婦がやって来て訊ねたとき、「あなた方は帰りなさい。今、私は戻って来ない者(輪則から解放された者)」になりました」と言った。比丘たちは如来に告げた。「尊師よ、彼はあり得ないことを言って、偽りを語っています。」師は、「比丘たちよ、今、私の息子の歡樂は滅し尽くされました。彼は真実を語っています」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「413月のごとく、汚れなく清淨で、濁りなく澄み渡り、歡樂の生存を滅ぼし尽くした人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.267 (2017年5月号) 摘らがない心 聖者は阿耨達池(あのくだっち)の如(ごと)し Unfluctuating mnd
413.Candamva vimalam suddham, Vippasannamanāvilam; Nandībhavaparikkhīṇam, Tamaham brūmi brāhmaṇam
413 照る月のごと明澄に ひたすら清く濁りなく 生の喜悦を滅したる そをバラモンと我は説く 訳 江原通子

月の如く

聖者の心は月の如く清らかです(Candamva vimalam suddham)。月の光は優しいです。月の光に一晩じゅう身体を当てても、なんの悪影響もありません。身体を冷やしたり、温めたりする結果は超こりません。ただ、光が当たっただけで終了です。夜は暗黒なので、月の光は道を教えてくれます。月の光は、覚者の心を理解するためのたとえです。

安穏の心で躰をする

俗世間的な指導者には、自分の心に苛立ちを起こさずに、弟子に厳しい言葉をかけることはできません。弟子を厳しく頼すときは、師匠の心も汚れてしまうのです。この問題は、覚者には起きません。心は常に、安穏に住しています。厳しい言葉で躰を受けている弟子にも、覚者たる師匠の安穏に住した心を感じることができます。

不思議な湖

阿耨達池 Anotatta という仏教用語があります。ヒマラヤの麓にある巨大な湖のことです。この湖の水は完全に清らかで、温度も一定で変化しないのです。太陽の光にも、湖の水を温めることはできません。微妙なさざ波は起きてても、派手に波打つことはありません。現在も、チベットの仏教徒たちが五体投地をしながら巡礼する聖湖になっています。ヒンドゥー教でも、神々が住む場所として崇められています。仏教には神秘的な解釈は一切ありませんが、湖としての摩訶不思議さに注目しているのです。周りが寒くても、水は凍りません。波が立って暴れるのは水の性質なのに、彼は立ちません。普通の水なら汚れてしまうのですが、阿馬達池の水は汚れません。とにかく、水であるのに水を乗り越えた特色を持っているのです。覚者的心も、阿馬達池の水の如しです。 (Vippasannamanāvilam)

汚れない理由

覚者の心が二度と汚れないのには、理由があります。すべての現象は無常・苦・無我であると発見しているからです。自我は錯覚であると発見しているからです。因縁によって現象は現れては消えていくものであって、自分も他人も個体として成り立たないと発見しているからです。「私」「あなた」「彼」などの単語は、俗世間的な言語の使い方に過ぎないのだと、聖者は知っています。真義の立場から見れば、仮設された便宜上の単語に過ぎないと理解しているのです。

聖者もまた、生きるうえで眼耳鼻舌身意から色声香味触法という情報を受け取って、認識・区別はしています。しかし、それは微妙なさざ波程度で、派手な彼にはなりません。見たものは「見えた」だけで止まる。聴いたものは「聴こえた」だけで止まる。香りを感じたもの、味わったものも、「香った」「味わった」だけで止まる。身体に触れたものは「触れた」だけで止まる。思考は「考えが起きた」だけで止ま *ru* 美しいものだ、素晴らしいものだ、もっともっと欲しい、これらの対象から離れたくない、感動するから生き続けたい、などの津波のような波は起きません。その幻覚は消えてしまった、終わったのです。 (Nandībhavaparikkhīṇam)

俗世間の心と比較する

眼に対象が触れたたびに、心が荒波で揺らいでしまいます。悩み苦しみが起きるのです。眼に入った対象が美しいものでないならば、醜いもの、またはつまらないものと判断して、再び心に荒波を引き起します。執着が生まれるのです。この輪廻の循環が、覚者の心には無いのです。まさに、聖者の心は阿耨達池の如しです。心が波立たない状態に成長した人こそが、阿羅漢であり、眞のバラモンなのです (Tamaham brūmi brāhmaṇam)。

413. Candamva vimalam suddham, vippasannamanāvilam; Nandībhavaparikkhīṇam, tamaham brūmi brāhmaṇam.

413.月のように、垢(汚れ)を離れ、清淨で、清らかな心ある、濁りなき者を、生存の愉悦が完全に滅尽した者を——わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

チャンダンワ	ウイマラン	スッダン	ウイッパサンナマーワイラン
Candamva	vimalam	suddham,	vippasannamanāvilam;
月のよう	に、垢(汚れ)を離	れ、清淨で、	清らかな心ある、濁りなき者を、
Candamva=candam/canda(m.sg.acc)[Sk.candra]月-gāha,-ggāha 月蝕-maṇḍala 月輪,月-suriyā 月と日+va/iva[indecl][// BSk.viya]如く=viya,va vimalam/vimala(a.m.sg.acc)[vi-mala]離垢の,淨き suddham/suddha(a.m.sg.acc)[sujjhati:pp]淨き,清淨の,純粹の, vippasannamanāvilam=vippasannam/vippasanna(a.m.sg.acc)[vippasīdati]の pp]明淨なる,清淨の←vippasīdati(v)[vi-pa-sad]大いに喜ぶ,明朗である,清くある pp.vippasanna;caus.vippasādeti 淨化す,清める+anāvilam/anāvila(a.m.sg.acc)[an-āvila]濁りなき,清き;			

ナンディーバワパリッキーナン	タマハン	ブルーミ	ブルーフマナン
Nandībhavaparikkhīṇam,	tamaham	brūmi	brāhmaṇam.
生存の愉悦が完全に滅尽した者を	彼をわたしは、	説く。	「婆羅門」と
Nandībhavaparikkhīṇam=nandi/handi:nandi(f依具)歡喜,悦喜-kkhaya 喜の滅尽-bhavaparikkhīṇa 欅喜渴愛の有を遍尽せる=阿羅漢.-mukhī 悅面の-rāga 喜貪-samyojana 喜結-samudaya 喜の集+bhava/bhava(m)[// <bhū] : ①有,存在,生存,繁栄,幸福② bhavati のimper+parikkhīṇam=parikkhīṇa(a.m.sg.acc)[parikkhīyati]の pp]消尽した,滅尽した←parikkhīyati(v)[pari-ksi]消尽す,滅尽す.pp.parikkhīṇa.cf.parikkhaya, tamaham brūmi brāhmaṇam.			

◆ yo imanti imam dhammadesanaṁ satthā kūṇḍakoliyāṁ nissāya kūṇḍadhānavane sīvalittheram ārabbha kathesi.

この法話は、師がクンディコーリヤ市の近くのクンダーナ林に滞在しておられたときに、シーヴァリ長老について語られたものである。

あるとき、コーリヤ族の王女スッパヴァーサーは、七年のあいだ胎児を宿し、七日間のお産の苦しみの中にあり、激しい苦しみ痛みに襲われて、「このような苦しみを除くために法を説かれる、かの世尊は実に正しく覚られたお方。このような苦しみから逃れるために修行をする、かの世尊の弟子サンガは実に正しく修行する人々。そこではこのような苦しみがなくなるのだから、涅槃は実に本当の安樂」と、この三つの考えでその苦しみに耐えながら、夫を師のもとへ使いに行かせ、自分の言葉として師を礼拝し、その出来事を伝えてもらうと、「コーリヤ族の王女スッパヴァーサーは安らかなれ。安らかに健やかに、健やかな息子を産むように」と師がおっしゃった途端、彼女は安らかになり、健やかになり、健やかな息子を産んで、ブッダを始めとする比丘サンガを招待し、七日のあいだ盛大な布施を捧げた。彼女の息子も生まれた日から、水濾のついた水瓶を持って比丘サンガのために水を濾した。彼は後に、家を出て出家し阿羅漢果に到達した。

さてある日、比丘たちが法堂で話を始めた。「ご同朋よ、ごらんなさい、あのようなことを。阿羅漢への機根を具えた比丘が、あれほどの長い期間、母親の胎内で苦痛を味わったのです。いったいどれほど多くの苦しみを乗り越えたのでしょうか。」師が来られて、「比丘たちよ、いったい何の話で今ここに集まっていますか」とお訊ねになると、「しかじかのことございます」と答えたので、「比丘たちよ、その通りです。私の息子はそれほどの苦しみから解放されて、今、涅槃を明らかに覚って過ごしているのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「414 この乗り越えがたい障害である輪廻、迷妄を乗り越え、彼岸に渡り、瞑想し、欲望なく疑いを離れ、執着なく寂靜なる人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.268 (2017年6月号) 汚れの道は世の道になる 無執着に達した人は世を超越している Tumultuous life and life of calmness
414.Yo imam palipatham duggam Samsāram mohamaccagā Tiṇṇo pāragato jhāyī Anejo akathamkathī Anupādāya nibbuto Tamaham brūmi brāhmaṇam.

414.この険しく難き道なる輪廻を 修行して無知を破り超越す 摺らぎなく曖昧を払拭し 無執着により安穏に達す 彼をバラモンと我は説く 訳：スマナサーラ長老

輪廻

仏教でいう輪廻とは、知る機能の流れです。「わたし」という実体が、死後、別なところに引っ越すという原始的な話ではないのです。貪瞋痴の衝動で生きている「生命」という組織は、その衝動がある限り、変化して続くのです。生命は貪瞋痴に罠に嵌められているのだ、という事実に気づかないことは、「無知」と言います。貪瞋痴の衝動があるからこそ、生命が成り立っているのだと発見する人に、この無知がなくなるのです。無知が消えることで、いま生きる苦しみだけではなく、輪廻を繰り返すという恐ろしい苦しみも乗り越えることができるのです。(Samsāram mohamaccagā 輪廻と無知を越え)

不動

すべての現象は無常で流れるものであると発見すると心の揺らぎが無くなります。ここが不動(aneja)の境地に達したと言うのです。世の道を乗り越えることに成功した人の心から、曖昧さが完全に消えてしまうのです。(akathamkathī)

無執着

最終的に、一切の現象は無常であると発見して、いかなる現象にも執著しない、という境地に達します。その人は、究極の安穏に達します。(Anupādāya nibbuto)

414. Yomam [yo imam (sī. syā. kam. pī.)] palipatham duggam, samsāram mohamaccagā; Tiṇṇo pāragato [pāragato (sī. syā. kam. pī.)] jhāyī, anejo akathamkathī; Anupādāya nibbuto, tamaham brūmi brāhmaṇam.

414. 彼が、この障害と悪路と輪廻と迷妄を超えて行ったら、〔激流を〕超え彼岸に至った瞑想者であり、動搖なく懷疑なき者であり、〔一切を〕執取せずして涅槃に到達した者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヨーマン	パリパタン	ドゥッガン	サンサーラン	モーハマッチャガ
Yomaṇ	palipatham	duggam,	samsāram	mohamaccagā;
彼が、この障害と	悪路と	輪廻と	迷妄と	迷妄を超えて行ったら、
Yomaṇ 涅槃を待っている =yo/ya(閑代 m.sg.nom)[Sk.yah]~である人、~であるもの+imam/ima(指代 m.sg.acc)これ	palipatham/palipatha(m.sg.acc)[= paripatha,paripantha,BSk.paripantha]障碍,嶮路;ぬかるみ,染泥 cf.palipa	duggam/dugga(m.n.a.m.sg.acc)[du-ga]難路,嶮路,行き難き, samsāram/samsāra(m.sg.acc)[<samsarati]輪廻,流転	mohamaccagā=moham/moha(m.sg.acc)[Sk.moha,mogha]痴,愚痴+accagā/atigacchati(v)[ati-gacchati]	すぎ行く,超える,まさる
aar.3sg.accagā,accagamā,pl.accagum;				

ティンノー	パーーラガト	ジャーラー	アネージョー	アカタンカティー
Tinno	pāragato	jhāyī,	anejo	akathamkathī;
〔激流を〕超え	彼岸に至った	瞑想者であり、	動搖なく	懷疑なき者であり、
Tiṇṇo/tiṇṇa(m.sg.nom)←tarati : ①(v.pp)[//tr]渡る,度脱す,こえる,横切る②(v)[Sk.tvarate tvar cf.turati,turayati]急ぐ				
pāragato=pāra/pāra(n.a 依対)[//<para]彼岸,彼方,他の-gata,-gāmin,-gū 彼岸に到れる jhāyī/jhāyin(a.m.sg.nom)禪定ある,静慮する;				
禪定者,静慮者,禪師, anejo/aneja(a)[an-ejā]不動の,無動著の,無貪愛の←ejā(f)[<inj.cf.ānejja]動,動貪,動著				
akathamkathī/akathamkathī(m.sg.nom/acc : -ī,-in~を持っている)疑いなき←akathamkathī(f)[a-kathamkathī]疑いなきこと,無疑				
←kathamkathī(f)疑惑,猶予;				

アヌパーダーヤ	ニップト	タマハン	ブルーミ	ブルーフマナン
Anupādāya	nibbuto,	tamaham	brūmi	brāhmaṇam.
〔一切を〕執取せずして	涅槃に到達した者であり、	彼をわたしは、	説く。	「婆羅門」と
Anupādāya/anupādāya:anupādāya,anupādiyāna,anupādiyitvā(adv)[an-upādiyati の ger]取著なく←upādiyati(v)[upa-ā-dā]取る,執取す,執受す	nibbuto/nibbuto(a.m.sg.nom)[Sk.nirvta 実は nibbāta<nibbāti]疲滅せる,涅槃に達せる cf.abhinibbuto,parinibbuto, tamaham brūmi brāhmaṇam.			

サービスアッティー市で、ある良家の息子のスンダラサムッダ(美しい海)青年という人が、四億の資産がある豊かな家に生まれた、ということである。彼はある日の午後、香や花輪などを手に大勢の人々が法話を聞くためにジェータヴァナ精舎に行くのを見て、「どこへ行くのですか」と訊ねると、「師のもとに法を聴きに行くのです」と人々が答えたので、「私も行きましょう」と言って、彼らと一緒に行き、会衆の端にすわった。師は青年の意図を知って、次第説法を語られた。

青年は、「家に住んでいては、磨いた法螺貝のような梵行(禁欲の行)を達成することはできない」と、師の話に動かされて出家への熱望を生じ、会衆が去ったあとで師に出家を願い出た。しかし、両親が同意しなければ如来は出家させないと聞いて家に帰り、良家の息子のラッタバーラなどのように大いに努力して両親に同意させて出家し、具足戒を受けた。そして「ここに住んでも意味がない」と、そこから出てラージャガハ市に行き、托鉢に廻りながら過ごしていた。

さてある日、サーヴァッティー市では彼の両親が、ある祭礼の日に、息子の友人の青年たちが盛大な華やかさで遊んでいるのを見て、「私たちの息子には、こういうものが得難くなつた」と嘆いた。そのとき、一人の遊女がその家に来て、彼の母親が泣きながらすわっているのを見て、「奥さま、どうして泣いていらっしゃるのですか」と訊ねた。「息子を思い出して泣いているのです。」「奥さま、息子さんはどこにいるのですか。」「比丘たちのあいだで出家しました。」「還俗させればよいではありませんか。」「そうなのですぐ、彼は望みません。ここから出て、ラージャガハ市に行ってしまひました。」「もし私が彼を還俗させたら、私に何をしてくださいますか。」「この家の資産の女主人にさせましょう。」

「では、私に支度金をください」と支度金を受け取って、大勢の伴を連れてラージャガハ市に行った。スンダラサムッダ長老が托鉢に歩く大通りを探ってそこに住居を構え、朝早く上等の食事を用意して、長老が托鉢のために入ってきたときに、托鉢の食を与えた。そうして数日経ったときに、「尊師よ、ここにすわって食事をなさいませ」と言って鉢を受け取ろうとした。長老は鉢を与えた。すると、上等の食事でもてなして、「尊師よ、ここに托鉢にいらっしゃると嬉しいですわ」と言い、数日は家のベランダにすわらせて食事をさせ、少年たちを饅頭で手なずけて、「いらっしゃい。あなたがたは長老さまがいらっしゃったときに、私が止めようとしても、ここに来て埃を立てなさいな」と言った。

少年たちは次の日、長老の食事の頃に、遊女が止めても埃を立てた。遊女は次の日、「尊師よ、少年たちが止めても私の言葉を聞かず、ここで埃を立てます。家の中におすわりください」と、中にすわらせて、数日のあいだ食事をさせた。また少年たちを手なずけて、「あなたがたは、私が止めても、長老さまの食事の時間に大声をたてなさいな」と言った。少年たちは言われた通りにした。

遊女は次の日、「尊師よ、この場所ではとても大きな声がします。少年たちが、私が止めても言うことをきかないのです。屋上におすわりください」と言い、長老が同意すると、長老を前にして上の階へと上りながら途中の扉を閉めて、最上階に上がった。長老は勝れた常乞食者(乞食で得たものだけを食べるという成を守る者)ではあったが、美味への執着にとらわれて、彼女の言葉に従って七階建ての楼閣に登ったのだった。遊女は長老をすわらせた。

四十の仕草で、ブンナムカよ、女は男を誘惑する。すなわち、身体を伸ばす、身体を屈める、じゃれる、恥じらう、爪で爪を搔く、足で足を踏む、棒で地面に描く、子供を抱き上げる、子供を下ろす、遊戯する、遊戯させる、キスをする、キスをさせる、食べる、食べさせる、物を与える、物をねだる、したことを真似る、高い声で話す、低い声で話す、あからさまに話す、ひそひそと話す、踊りにより、歌により、演奏により、泣くことにより、じゃれることにより、飾ることにより注意を引きつける、見つめる、腰を振る、身体の隠れた処を揺らす、脚を開く、脚を閉じる、胸を見せる、脇を見せる、臍を見せる、目を隠す、眉を上げる、唇を噛む、〔舌を噛む〕、舌を動かす、衣を脱ぐ、衣を結ぶ、髪の毛を解く、髪の毛を結ぶという、このような女の仕草、女の媚を見せて、長老の前に立って次の詩句を唱えた。「足は漆を塗り、遊女はスリッパを履く、あなたは私の若い人、私はあなたの若い人、二人して家を出ましょう、後では老いて杖にすがるのみ。」と〔Kunālajātaka(536)〕。

長老には、「よく考えずにした私の行為は、何と罪深いことだろう」と大きな焦躁心が起った。そのとき、師は四十五ヨージャナ離れたジエータヴァナ開合にすわったままこのことをご覧になって、微笑を表された。すると、アーナンダ長老が訊ねた。「尊師よ、いったい何の原因、何のきっかけがあって、微笑を表されたのですか。」「アーナンダよ、ラージャガハの都で七階建ての楼閣の最上階で、スンダラサムッダ比丘と遊女の争いが起こっています。」「尊師よ、どちらに勝ちがあり、どちらに負けがあるでしょうか。」師は、「アーナンダよ、スンダラサムッダに勝利があるでしょう。遊女が負けるでしょう」と、長老の勝ちを明かされ、そこにすわったまま光明を〔ラージャガハ市のスンダラサムッダ長老に〕送られて、「比丘よ、両方の欲望への執着を捨てなさい」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「415 この世で欲望を捨て、家を捨てて出家し、欲望の生存を滅し尽くした人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったときに、長老は阿羅漢果に到達し、神通力によって空中に飛び上がり、屋根の尖塔の開口部を通り抜けて、師のお身体を褒め称えつつ〔ジェータヴァナ精舎に〕戻って、師を礼拝した。法堂で話が持ち上がった。「ご同朋よ、スンダラサムッダ長老は、舌で知る味のために、意志を弱くしました。しかし、師は彼の拵り所になりました。」師は話をお聞きになって、「比丘たちよ、今だけでなく前世でも、私は彼の味への執着にとらわれた心の拵り所になったのです」とおっしゃって、比丘たちに悪願されて、そのことを明らかにするために過去の事を取り出されて、「味覚より罪深いものはない、あるいは住居よりも、あるいは親密な交際よりも。家から出たカモシカをサンジャヤは味覚により虜にした。と、「カモシカ前生物語 Vātamiga-jātaka(14)」を詳しく語られて、「そのとき、スンダラサムッダはカモシカでした。この詩句を唱えて彼を解放させた王の大臣がこの私でした」と前生を結び付けられた。

テラワーダ仏教の出家だけでなく、日本の僧侶たちもよく行っている大事な義務とは「寺を守って維持管理すること」です。悪く言えば、サラリーマンになることをやめて聖職者になった、という程度の話なのです。というわけで、「出家」と「解脱」は別々な話になってしまいます。

出家の心構え

經典には、*agārasmā anagāriyam pabbajati* というフレーズが頻繁に出てきます。Agāram とは、家を持っている、家で生活している、在家である、という意味です。在家とは、「社会人」なのです。

出家生活の特色は、*anagāriyam* という言葉で表されています。「家無き」という意味です。自分を守ってくれる人も無いし、自分が守ってあげなくてはいけない人も無い。社会システムから完全に脱出しなくてはいけないです。Pabbajati は、出でいく、旅に出る、遊行する、という意味になります。現代的な単語は「ホームレス」です。すべてを捨ててホームレスになることが出家なのです。

戒律

最初に戒律が定められたのは、お釈迦さまの成道から十二年後という話があります。初期時代の出家に、形式的な戒律規範が無かったことだけは確かです。出家した方々は皆、「社会との束縛をすべて断ち切る生き方」という、出家本来の意味をよく理解していました。出家とは人間に不可能なほど大胆な決断なのだから、御馳走を探し求める、御馳走を作る、高価な衣服を身にまとう、芸術を鑑賞する権利などは一切無いと、わかっていたのです。

出家の数が増えて、仏教徒たちが出家を支えるようになると、出家の本来の意味を忘れてしまう人々も現れました。それで後には、形式的な戒律規範を設けなくてはいけなくなったのです。定めた戒律があろうとなかろうと関係なく、出家は当然、精密に道徳・戒律を守る人間にならなくてはいけないです。

四具

出家したら収入がゼロなので、常識範囲での生活さえも難しくなります。そこで、命を維持できる最小限のリミットを説いて、皆に暗記させたのです。

服の場合は、在家の人々が捨ててしまったものを拾って縫い合わせて身にまとったほうがよいのです。食事はいただいたもので間に合わせます。托鉢で受け取るのは、在家が食べて余ったものです。または、修行者に差し上げる目的でつくったものになります。住むところは樹の下、洞窟、空き家などになります。身体の調子が悪くなったら、牛の尿を飲むことを推薦しています。

四具の決まりを厳密にそのまま守るべきだというと、ジャイナ教と同じく苦行の生き方になってしまいます。だから、仏教徒たちが僧房を作つてお布施したり、御馳走を作つて差し上げたり、衣に必要な生地と、病気に罹った時に必要な薬などをお布施するならば、いただいて使うのです。そういう布施行行為によって、在家者もまた仏道の世界で重要な役割を果たすことになります。仏教は出家だけの世界でなくなるのです。

修行

仏教の出家は、束縛の多いややこしい生き方をやめて安楽な生き方にした、という言葉で表現されています。Sambādhō gharāvāśo 在家は障害が多い、abbhokāśo pabbajam 出家は空のように自由な生き方である、と言われるので、出家は度胸試しではないのです。

再生族

出家したからといって、安心することはできません。まだ凡夫なのです。在家凡夫から、出家凡夫になっただけです。出家凡夫は、凡夫という状態から再び出家して、聖者・覺者にならなくてはいけないです。修行の結果、ここに潛んでいる無明を根絶したならば、すべての問題は解決です。その人こそが本物の出家で、本物の聖者なのです。決して堕落することはありません。

ダンマパダ四一五の偈では、出家と再出家の両方が説かれています。Yodha kāme pahantvāna, anāgāro paribbaje とは出家のことです。俗世間的な欲を捨てて、家の無い生き方である出家をする。次に、kāmabhavaparikkhīṇam と説かれます。煩惱が再び現れる可能性を滅尽した、という意味です。要するに、再出家のことです。その人こそが本物の聖者であり、本物のバラモンなのです。

415. Yodha kāme pahantvāna [pahantvāna (sī. pī.)], anāgāro paribbaje; Kāmabhavaparikkhīṇam, tamaham brūmi brāhmaṇam [idam gāthādvayaṁ videsapothakesu sakideva dassisam].

415. 彼が、この〔世において〕、諸々の欲望〔の対象〕を捨棄して、家なき者として遍歴遊行するなら、欲望〔の対象〕と〔迷いの〕生存が完全に滅尽した者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヨーダ	カーメー	パハントウワーナ	アナガーロー	パリッバジエー
Yodha	kāme	pahantvāna,	anāgāro	paribbaje;
彼が、この[世において]、	諸々の欲望[の対象]を捨棄して、	家なき者として	遍歴遊行するなら、	
Yodha=yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]～である人、～であるもの+idha/idha/idhā[adv][Sk.ihā]ここに、此界に idha-loka 此世 -loka-vijaya 此世の勝伏 -loka-saññī 此世想者 kāme/kāma(m.n.pl.acc)欲,愛欲,欲念,欲情,欲樂 pahantvāna/pajahati(v. ger)[pa+hā+a](hā が二重になり、前の h が j に変わる)諦める;放棄する;見捨てる, anāgāro/anāgāra(a.m.sg.nom)[an-agāra]非家,出家 paribbaje/paribbajati(v.opt.3sg)[pari-vraj]遊行す,遍歴す opt.paribbaje;				

カーマバワパリッキーナン	タマハン	ブルーミ	ブラーフマナン
Kāmabhavaparikkhīṇam,	tamaham	brūmi	brāhmaṇam.
欲望〔の対象〕と〔迷いの〕生存が完全に滅尽した者であり、	彼をわたしは、	説く。	「婆羅門」と
Kāmabhavaparikkhīṇam=kāma/kāma(m.n 依具)欲,愛欲,欲念,欲情,欲樂+bhava/bhava(m)[// <bhū] : ①有,存在,生存,繁栄,幸福② bhavati の imper+parikkhīṇam/parikkhīṇa(a.m.sg.acc)[parikkhīyati の pp]消尽した,滅尽した←parikkhīyati(v)[pari-kṣi]消尽す,滅尽す.pp.parikkhīṇa.cf.parikkhaya, tamaham/ brūmi/ brāhmaṇam/ [idam gāthādvayaṁ videsapothakesu sakideva dassisam].			

(26-33) Jaṭilattheravatthu ジャティラ長老の物語 416 (416の因縁譚その1)

◆ yodha taṇhanti imam dhammadesanaṁ satthā veļuvane viharanto jaṭilattheram ārabba kathesi.

この法話は、師が〔ラージヤガハ市の近くの〕竹林精舎に滞在しておられたときに、ジャティラ長老について語られたものである。ここに、順序に従った物語がある。

		【pañca amitabhogā】				(4)puṇḍaka	(5)kākavalya
28	7	Buddha	(1)jotika/Jotiya	(2)jatila	(3)menḍaka		
21		Phussa					
			(DpA26-33) Atīte kira 『bārāṇasiyam』 dve bhātaro kuṭumbikā mahantam ucchukhettam kāresum. evam kaniṭṭhena tisso sampattiyo pathitā, jeṭṭhena pana ekapadeneva arahattam pathitanti idam tesam pubbakamman.				
22	1	Vipassī	tepi devalokato cavitvā 『bandhumatiyā』 ekasmim kulagehe jettho jetthova, kaniṭṭho kaniṭṭhova hutvā patiṣandhim gaṇhimsu. tesu jeṭṭhassa seno(→arahant) ti nāmam akamṣu, kaniṭṭhassa aparājītoti. so(aparājita) evam yāvatāyukam puññāni karitvā tato cuto		(DpA26-33) 『Sāketa』 gandhakutiyā karanakāleyeva pana tam attanā samānanāmako aparājītoyeva nāma bhāgineyyo upasaṅkamitvā “ahampi karissāmi, mayhampi pattim detha mātulā”ti āha. so bahumpi yācītvā pattim alabhamāno “gandhakutiyā purato kuñjasālam laddhunū vāṭṭati”ti sattaratanamayam kuñjasālam kāresi. so imasmim buddhuppāde menḍakaseṭṭhi hutvā nibbatti.		
			devaloke nibbattitvā ettakam kālam devamanussesu samsaritvā				
23	2	Sikhī					
24	3	Vessabhū					
25	4	Kakusandha					
26	5	Koṇāgamana					
27	6	Kassapa		suvaṇṇakāropi taṇkhaṇeyeva bhariyāya saddhiṁ kalaham karonto nisimmo hoti....so bhariyāya kopena “tava satthāram udake khipitvā gacchā”ti āha. iti so sattakkhattum jātakāle udake pātanam labhi.			
					(DpA18-10) Evam vipassībuddhakāle puññakammapā katvā tato cuto devesu ca manussesu ca samsaranto imasmim bhaddakappe 『bārāṇasiyam』 mahābhogakule nibbattitvā bārāṇasiseṭṭhi nāma ahosi.		
28	7	Gotama	『rājagahe』 jātadivase panassa sakalanagare sabbāvudhāni pajalim̄su, Athassa nāmagahaṇadivase sakalanagarassa ekapajjotabhūtātā jotikotveva nāmam̄ kariṇsu. (→arahant)	『bārāṇasi』 Tassa jātadivase gabbhamalassa dhowitvā anapanītātāya kesā jātī hutvā athamsu, tenassa jatilotveva nāmam karim̄su. ↓Mahā Kaccāna, Kaccāyana ↓『takkasila』 jaṭilasēṭṭhi (→arahant)	(DpA18-10) so tato cuto devaloke nibbattitvā devamanussesu samsaranto imasmim buddhuppāde 『bhaddiyanagare』 setṭhikule nibbatti. (→sotāpatti)		

過去物語

昔、バーラーナシー市に二人の兄弟資産家がいて、大きなサトウキビ畑を作らせた atīte kira bārāṇasiyam dve bhātaro kuṭumbikā mahantam ucchukhettam kāresum。さてある日、弟がサトウキビ畑に行って、「一本は兄に見せよう。一本は私のものにしよう」と二本のサトウキビの茎を切り、汁が出ないように、切ったところを縛って持った。その当時、サトウキビを機械で搾ることは行われていなかった、ということである。先端または根元を切って立てたときに、漉し器付きの水瓶から濾されて出る水のように、自然に汁が流れ出るようになっていた。

弟の資産家が畑からサトウキビの茎を持って戻ってくるとき、ガンダマーダナ山で独覚が入定から出て、「今日は誰に愛護を与えるようか」と思案していると、彼が自分の智の網に入ったのを見て、また彼が布施を与えることが出来ることを知り、鉢と衣を持って神通力で空を飛んでやって来て、彼の前に立った。彼は独覚を見て心が淨められ、上衣を自分より高い地面の上に広げて、「尊師よ、ここにおすわりください」と独覚をすわらせた、「鉢を下にさげてください」と言って、サトウキビの茎の縛っていたところを解いて鉢の上にかざした。汁が滴り落ちて鉢を満たした。

独覚がその汁を飲み終わると、「お上人さまは私の汁を飲んでくださって良かった。兄上がサトウキビの代金を持ってくるように言ったら、代金を払おう。もし功德の分け前を持ってくるように言ったら、功德の分け前を与える」と考えて、「尊師よ、鉢を下にさげてください」と、もう一度〔兄の分の〕サトウキビの縛りを解いて、汁を布施した。「私の兄はサトウキビ畑から他のサトウキビを持ってきて食べるだろう」という考えは彼には全くなかった。しかし、独覚は最初のサト

ウキビの汁を飲んだので、次のサトウキビの汁は他の者たちと分かち合おうと考えて、受け取ったまま【飲まずに】すわった。

彼は独覚の様子からそれとわかり、五体を地につけて礼拝して、「尊師よ、私が差し上げた最上の汁の功徳によって、天界と人間界で幸福を享受したのち、最後にあなたさまが到達された境地を得られますように」と誓願を立てた。独覚は「そうなるように」と言って、「あなたが望み願ったことは、すべて成就せよ、あらゆる思いが満たされよ、十五夜の月のように。」“icchitam patthitam tuyham, sabbameva samijjhato. sabbe pürentu sañkappā, cando pannaraso yathā. そなたが望み願ったことは、すべて成就せよ、あらゆる思いが満たされよ、〈光の雫〉の宝珠のように。”“icchitam patthitam tuyham, khippameva samijjhato. sabbe pürentu sañkappā, manijotiraso yathā”ti. —”という二つの詩句によって感謝の法話をしながら、彼が自分の帰る様子を見るようにと念じて空を飛んでガンドマーダナ山に帰り、五百人の独覚たちにそのサトウキビ汁を分け与えた。

彼はその奇跡を見てから兄のところへ行き、「どこへ行っていたのだ」と問われると、「サトウキビ畑を見に行っています」。「おまえがサトウキビ畑に行ったのか。それなら、一本でも二本でもサトウキビの茎を持って帰ってくれば良かったのに」と兄に言われたので、「その通りです、兄さん。私はサトウキビの茎を二本取りました。しかし一本は、独覚さまに会ったので、私のサトウキビの茎から出た汁を捧げ、その後で『代金かまたは功徳の分け前をあげよう』とあなたのサトウキビの茎からの汁も捧げました。代金を受け取りますか。それとも功徳の分け前ですか」と言った。「独覚さまは何をなさったのか。」「私のサトウキビの汁を飲んでから、あなたのサトウキビの汁を持って、空中を飛んでガンドマーダナ山にお帰りになり、五百人の独覚さまたちに与えられました。」

彼はそのことを話すうちに、とめどなく歓喜に身体の毛が逆立ち、「これによって、独覚さまが感得した法を私も理解できますように」と誓願を立てた。このように、資産家の弟は三つの幸運を願った。兄の方は一言で阿羅漢果を【得られるように】願った。これが彼らの前身の行いである evam kaniñhena tisso sampattiyo patthitā, jetñhena pana ekapadeneva arahattam patthitanti idam tesam pubbakammam.

彼ら兄弟は命の限り生きて、その生から死没して天界に再生し、一つの無仏の時代を過ごした。彼らが天界にいるときに、ヴィバッシン仏が世に現れた。彼らも天界から死没して、バンドウマティー市の、とある【裕福な】家で、兄は兄となり、弟は弟となって生をうけた。二人のうち、兄はセーナ **sena** という名前になった。弟はアパラージタ **aparajita** であった tepi devalokato cavitā bandhumatiyā ekasmim kulagehe jettho jetthova, kaniñtho kaniñthova hutvā patisandhim ganhimsu. tesu **jetthassa senoti** nāmam akamsu, **kaniñthassa aparajitoti**。彼らは成人すると家督を継いで過ごしていたが、「ブッダ」という宝が世に現れた。法という宝とサンガという宝も世に現れた。布施を捧げよ、功徳を積め。今日は月の八日だ、今日は十四日だ、今日は十五日だ、布薩を行いたまえ、法を聴きたまえ」と、法のお触れ係がバンドウマティー市で触れ廻っているのを聞き、大勢の人々が午前に布施を捧げ、午後は法を聴くために出かけていくのを見た。

資産家セーナが、「みなさんはどこへ行くのですか」と訊ねると、「師のもとへ法を聴きに行くのです」と人々が答えたので、「私も行こう」と、彼らと一緒に行き、会衆の端にすわった。師は彼の心映えをお見通しになり、次第説法を語った。セーナは師の法を聴いて出家に熱意をおこして、師に出家を願い出た。すると、師は彼に、「あなたに面倒を見るべき親族はいますか」とお訊ねになり、「おります、尊師よ」と答えると、「それでは、その人々の面倒を見てからいらっしゃい」とおっしゃった。

セーナは弟のところへ行き、「何でもこの家に属するものは、すべてあなたのものにしなさい」と言った。「あなたはどうなさるのですか、兄上。」「私は師のもとで出家するつもりです。」「兄上、何をおっしゃるのです。私は母が死んでからは母のように、父が死んでからは父のように、あなたを見ています。この家はとても豊かです。家にいても功徳を積むことはできます。どうかそんなことはしないでください。」「私は師のもとで法を聴きました。その法は家の真ん中にいては満たすことができません。私は出家します。あなたはとどまりなさい。」このようにセーナは弟をとどまらせて、師のもとで出家して具足成を受け、ほどなくして阿羅漢果に到達した。

弟は、「兄上が出家したご供養をしよう」と、七日間、ブッダを始めとするサンガに布施を捧げ、兄を礼拝して言った。「尊師よ、あなたさまは自分の生存からの出離を成し遂げました。しかし、私は五つの感官の欲望に縛られて、家を出て出家することもできません。私が家に住んでいてもできる、相応しい大きな善行を教えてください。」すると、兄の長老は弟に、「結構なことです、賢者よ。師のために香房(ブッダの居室)を作りなさい」と言った。弟は、「かしこまりました」と同意して、さまざまな木材を運ばせ、柱などにするために細工させて、一つは金で飾らせ、一つは銀で飾らせ、一つは宝石をちりばめ、というようにすべてを七宝で飾らせて、それらの材料で香房を作らせ、七宝で飾らせた屋根瓦で屋根を葺かせた。

香房を作っているとき、自分と同じ名前のアパラージタという甥がやってきて、「私も作ります。叔父さま、私にも功徳の分け前を与えてください」と言った gandhakutiyā karanakāleyeva pana tam attanā samānanāmako **aparajito** yeva nāma bhāgineyyo upasaniñkamitvā “ahampi karissāmi, mayhampi pattim detha mātulā”ti āha。。「甥よ、与えることはできません。他の人々と一緒にいるのを私は作るのです」と断った。甥は何度も頼んだが、分け前をもらうことができなかつたので、「香房の前のクンジャラ講堂を作ることにしよう」と、七宝でクンジャラ講堂を作らせた。彼が今のブッダが現れたとき、メンダカ長者となって再生したのである so bahumpi yācītvā pattim alabhamāno “gandhakutiyā purato kuñjarasālam laddhūm vatthati”ti sattarananayam kuñjarasālam kāresi. so imasmiñ buddhuppāde **menḍakasetṭhi** hutvā nibbatti。 [(18-10) Menḍakasetṭhi hivatthu メンダカ長者の物語 252]

ところで、香房には七宝で作られた三つの大きな窓があった。アパラージタ家長はそれらの窓に向かって、下には漆喰で仕上げをした三つの蓮池を作らせ、四種の香りのある水で満たし、五色の花々を植えさせた。如来が中にすわったとき、風の勢いで立ち上がる花粉の糸がお体に降りかかるように、香房の尖塔には最上の赤い金でできた水盆があった。珊瑚でできた最上端の冠瓦の下に宝石でできた屋根瓦があった。このようにして、それは孔雀が【屋根の上で】踊っているかのように輝いていた。七種類の宝石のうち、碎いたほうがよいものは碎き、他はそのままにして、踝の高さまで香房の中に敷き詰め、周囲にも満たした。

このように香房を完成させて、アパラージタ家長は兄の長老に近づいて言った。「尊師よ、香房が完成しました。その享受を願っております。ブッダが享受されることによって、大きな果報があると聞いておりますから。」兄の長老は師に近づい

て、「尊師よ、この資産家が香房を作らせたということです。享受されることを願っております」と言った。師は座から立ち上がり香房に向かわれたが、香房を取り巻いて敷き詰められた宝石の山をご覧になって、楼門のところに立ち止まられた。そこで、資産家アバラージタは「尊師よ、お入りください」と言った。師はそこに立ったままで、三度目に勧められたときに、アバラージタの兄の長老をご覧になった。

兄の長老は師がご覧になったときの様子でその意図を知り、弟に言った。「さあ、弟よ、『私が護衛をするでしょう。あなたさまは心置きなくお住まいください』と師に言いなさい。」弟は兄の言葉を聞いて、五体を地につけて師を礼拝し、「尊師よ、人々が樹の下で一夜を過ごして、後を顧みずに出発するように、あるいは河を渡ったあと筏を顧みずに捨てるように、そのようにあなたさまは心安くお住まいください」と言った。

どうして師は立ち止まられたのだろうか。師には次のようなお考えがあった、ということである。「ブッダたちのもとには、午前中、大勢の人々がやってくる。彼らが宝石類を持って出ていくとき、私は止めることができない。『僧房にあれだけの宝石が散り敷かれているのを自分の支援者たちが持ち去っても止めなかつた』と、資産家が私に敵意を抱いて、そのため悪道に落ちることになるかもしれない」と、このような理由で、立ち止まっておられたのである。しかし、資産家アバラージタが、「尊師よ、私が護衛をするでしょう。あなたさまはお入りください」と言ったので、中へ入られた。資産家は香房の周囲に護衛を立てて、その人々に言った。「みなさん、衣の隠しや、籠や袋に入れて宝石を取って出していく者たちは止めなさい。しかし、手で持って出していく人々は止めてはなりません。」

バンドウマティー市の中でも告げ知らせた。「私は香房の周囲に七宝を撒き散らした。師のもとで法を聴いて帰るときに、貧しい人々は両手に一杯にして持って行きなさい。安樂に暮らしている人々は片手で持って行きなさい」と。彼にはこのような考えがあった、ということである。「信心のある人は法を聴きたいと思って行くだろう。信心のない人々も財宝への欲望から出かけていき、法を聴いて苦しみから解放されるだろう」と。それゆえ人々を愛護するために、そのように告げ知らせたのである。大勢の人々が、彼が言ったようにして宝石を取った。一度目に散り敷いた宝石が尽きると、三度目まで、踵の高さに宝石を散り敷かせた。

また資産家は、師の足元に瓜の大きさの、価値が測り知れないマニ宝を置かせた。それには次のような考えがあった、ということである。「師のお体から出る金色の輝きと一緒にマニ宝の輝きを見る人々には、飽きるということがないだろう」と。それゆえそのようにしたのである。大勢の人々は飽きることなく見つめた。

さてある日、一人の間違った見方をする婆羅門が「師の足元にはとても高価なマニ宝が置かれているそうだ。それを奪おう」と考えて精舎に行き、師を礼拝するためにやってきた人々に混じって入った。資産家は彼が入ってくる様子で「マニ宝を盗ろうとしている」と察して、「ああ、どうか盗らないでほしい」と考えた。婆羅門は師を礼拝するかのようにして師の足元に手を置きマニ宝を盗って、帯の中に隠して出でていった。資産家は、婆羅門に対して心を喜ばすことができなかつた。彼は法話が終わったとき師に近づいて、「尊師よ、私は三度、香房を取り巻いて躍の高さまで七宝を撒きました。それをとって行く人々に、私は怒りを覚えませんでした。心はますます清らかに喜ぶばかりでした。ところが今日、「ああ、あの婆羅門がマニ宝に近づいて盗らないでほしい」と思いましたが、その婆羅門がマニ宝を盗って去ったとき、心を喜ばすことができませんでした。」師は彼の言葉をお聞きになって、「在家信者よ、なんとあなたは、自分の所有物を他人に持ち去られないようにすることができるのですよ」とおっしゃって、方法を授けられた。

彼は師に授けられた方法を用いて、師を礼拝し、「尊師よ、今日からは、私の所有物を衣の裾のほつれ糸にいたるまで、私を凌駕して何百人の王たちでも泥棒たちでも奪うことがありませんように。火も私の所有物を燃やしませんように。水も押し流しませんように」と願を立てた。師も彼に「そうなるように」と感謝の法話をされた。彼は香房ができた祝賀を行つて、八百六十万の比丘たちに精舎の中で九カ月にわたり布施を捧げ、最後に全員に三衣を捧げた。サンガの新米比丘の三衣ですら、千金の値のするものであった。

彼はこのように寿命のかぎり福德を積んで、その生から死没して天界に再生し、これまでの時を神々と人間の世界で輪廻し、今のブッダが現れたとき、ラージャガハ市の長者の家の生をうけて、九カ月と半月のあいだ母の胎内で過ごした *so evam yāvatāyukāpūññāni karitvā tato cuto devaloke nibbattitvā ettakāp kālāp devamanussesu sāmsaritvā imasmiñ buddhuppāde rājagaha ekaśmiñ seṭṭhikule pāṭisandhiñ gahetvā addhāmāsādhike nava māse mātukucchiyañ vasi..*

現在物語—ジョーティヤの話

彼が生まれた日に〔ラージャガハ〕都中のあらゆる武器が炎を上げた *jātadivase panassa sakalanagare sabbāvudhāni pajjalimso*。あらゆる身につけた装身具もほのう炎を上げたかのように光を放った。都は一つの光のかたまりのようであった。長者は朝早く、王に奉仕するために出かけていった。そこで、王は長者に訊ねた。「今日、すべての武器が炎を上げた。都が一つの光のかたまりのようになつた。この理由を知っているか。」「知っております、陛下。」「長者よ、どういうわけか。」「私の家にあなたさまの下僕が生まれました。彼の福德の威光によるものです。」「それは盗賊になるのではないか。」「そんなことはございません、陛下。福德大きく〔過去世で〕誓願を立てた者です。」「ならば、適切に養うがよい。これを彼のミルク代にしなさい」と、毎日千金を下陽した。

さて、彼の名付けの日には都中が一つの光輝になつたため、「ジョーティヤ(光輝)」と名付けた *athassa nāmagahaṇadivase sakalanagarassa ekapajjotabhūtātā joti koteva nāmam karimso*。また、彼が成人したとき、家を建てるために地面が清められていると、サッカの宮殿が熱を帯びた。サッカは「これはどういうことだろう」と思案して、「人々がジョーティヤの家の場所を決めようとしている」と知り、「ジョーティヤは彼らによって作られた家に住まないだろう。私がそこへ行くのがよからう」と、大工の姿をしてそこへ行き、「何をしているのですか」と言った。「ジョーティヤの家の家の場所を決めているのです。」「やめなさい。彼はあなたがたが建てた家には住まないでしよう」と言って、十六カリーサの土地を見つめた。その途端、その土地は遍處壇(瞑想を行うための場所)のように平坦になつた。次に「この場所に、大地を割って七宝でできた七階建ての楼閣が立つように」と念じて見つめた。その途滑、楼閣が立つた。さらに「これを囲んで、七宝でできた七重の塀が立つように」と念じながら見つめた。そのような塀が立つた。それから「これらの塀の端に如意樹が立つように。楼閣の四隅に四つの宝の壺が立つように」と念じて見つめた。すべてがそのようになつた。

ところで、宝の壺のうち一つは直径ヨージャナの大きさであった。一つは三ガーヴタ(四分の三ヨージャナ)、一つは半ヨージャナ、一つは一ガーヴタの大きさであった。菩薩が生まれたときの宝の壺は〔すべて〕口の大きさは一つであったが、下

は大地の端まで広がっていた。ジョーティヤが生まれたときの宝の壺の大きさは語られていない〔のでわからない〕。すべての壺は、口を切られたターラ椰子の実のように、中身がぎっしり詰まって立っていた。楼閣の四隅には、若いターラ椰子の幹ほどの太さの、黄金でできた四本のサトウキビの茎が生じた。それらには宝石でできた葉と金でできた節があった。ジョーティヤの前世の善行を示すために、これらのサトウキビの茎が生じた、ということである。

七つの楼門では七夜叉が護衛を担当した。第一の楼門にはヤマモーリンという夜叉が、自分の眷属の千の夜叉たちと一緒に護衛に立った。第二の楼門はウッパラという夜叉が自分の眷属の二千の夜叉たちと一緒に、第三の楼門はヴァジラという夜叉が三千の夜叉たちと、第四の楼門はヴァジラバーフという夜叉が四千の夜叉たちと、第五の楼門はサカタという夜叉が五千の夜叉たちと、第六の楼門はカタッタという夜叉が六千の夜叉たちと、第七の楼門はディサームカという夜叉が七千の夜叉たちと一緒に護衛に立った。このように楼閣の中にも外にも堅い警備があった。

「ジョーティカ(ジョーティヤ)のために七宝でできた七階建ての楼閣が立ったそうだ。七重の壙と七つの楼門と四つの宝の壺が立った」と聞いて、〔マガダ国〕ビンビサーラ王は長者の印の傘蓋を送った。彼はジョーティヤ長者と呼ばれるようになった。

さて、前世で彼と一緒に善行を積んだ女は、ウッタラクル国に再生した。すると、神靈たちが彼女をそこから連れてきて、〔ジョーティヤ長者〕寝室にすわらせた。彼女は来るときに、米一ナーリの升と三つの光る石を持ってきた。彼らの生涯にわたって、その一ナーリ升からのご飯が常にあった。もし彼らが百合の荷車を米で満たしたいと望めば、その一ナーリ弁からそれだけの米が出た。ご飯を炊くときは、米を鍋に入れてその光る石の上に置くと、その途躍、光る石は炎を上げて燃え上がり、ご飯が炊き上がると火は消えるのであった。その合図によって、ご飯が炊きあがったことを知ることができた。カレーなどを調理するときも、同じような具合であった。このように、その光る石であらゆる食べ物が料理された。ジョーティヤ夫妻はマニ宝の光で暮らしていたので、火やランプの光というものを知らなかった。

「ジョーティヤにはしかじかのような栄華があるそうだ」と全ジャンブ州に知れ渡った。大勢の人々が乗り物などを使って見にやってきた。ジョーティヤ長者は来る人来る人に、ウッタラクル国のご飯を炊かせて与えさせた。「如意樹から衣を取りなさい。装身具を取りなさい」と告げさせた。三ガーヴタの宝の壺の口を開けさせて、「一生暮らすのに必要な財宝を取りなさい」と告げさせた。全ジャンブ州の人々が財宝を取って去っても、宝の壺は指一本ほども減らなかった。これは、前世で香房の周囲に砂のように敷き詰めた宝石の果報だった、ということである。

このように大勢の人々が、衣や装身具と財宝を望むだけ取って行くので、ビンビサーラ王はジョーティヤの楼閣を見たいと思っても、大勢の人々が来るために、機会が得られなかった。しばらくして、人々が望むだけ取って去っていったために人が少なくなったとき、王はジョーティヤの父親に言った。「あなたの息子の楼閣を見たい。」父親は、「かしこまりました、陛下」と言って、帰って息子に話した。「息子よ、王さまがおまえの楼閣を見たいとおっしゃっている。」「よろしくうござります。いらしてください。」王は大勢の従者を率いてそこへ行った。第一の楼門で、掃除をしてゴミを捨てる女召使いが王に手を差し伸べた。王は「長者の奥方だ」と思って恥じらい、彼女の腕に手を置かなかった。同様に、その他の楼門でも女召使いたちを「長者の奥方たちだ」と考えて、彼女たちの腕に手を置かなかった。

ジョーティヤが来て出迎え、礼拝し、王の後ろに立って、「お先にお進みください、陛下」と言った。しかし、王にはマニ宝の大地が百人の落ちる深淵のように見えた。王は、「この長者は、私を捕らえるために、落とし穴を掘ったのだ」と思えて、足を踏み出すことができなかった。ジョーティヤは、「陛下、これは落とし穴ではありません。私の後ろからお進みください」と、王の前に出た。王はジョーティヤが進んだときに大地を踏んで、一番下の階から順番に楼閣を眺めて歩いた。

そのとき、アジャータサットウ王子も、父王の指を掴んで歩きながら考えた。「なんと私の父上は愚かなことか。家長に過ぎない者が七宝でできた楼閣に住んでいる。こちらは、王になんでも丸太で出来た家に住んでいる。私が今、王にならたら、この人にこの楼閣に住むことを許さないだろう」と。

王が最上階に上ったときに、朝食の時間になった。王は長者に話しかけて、「大長者よ、ここで朝食を食べよう」と言った。「わかつております、陛下。陛下の食事は用意しております。」王は十六の香りのある水が満たされた水瓶で水浴して、宝石でできた長者がすわる幕屋が用意されると、長者がすわる長椅子にすわった。それから、王に手を洗う水を差し出し、十萬金の値のする黄金の器に軟らかいミルク粥を盛って王の前に置かせた。王は「食事だ」と思って食べ始めた。

長者は「陛下、それは食事ではございません。軟らかいミルク粥です」と言って、別の黄金の器に食事を盛って、最初の器の上に置かせた。それというのも、湯気の立ちのぼるものを吃べるのは、気持ちの良いものだからである。王は味の良い食事を食べながら、いくらでも食べられるので、どれだけ食べたかわからなかった。すると、長者は王を礼拝し合掌して、「陛下、そこまでにしてください。それ以上は消化することができません」と言った。王は長者に言った。「家長よ、なぜ自分の〔出した〕食事に慎重にするのか。」「陛下、これはあなたさまだけに慎重にしているのではありません。軍隊の全員にも、これと同じ食事と同じカレーを差し上げます。ですが、私は不名誉を怖っています。」「どうしてか。」「もし陛下にお身体の倦怠だけでもあれば、『昨日、王は長者の家で食事をした。長者が何か企んだに違いない』という言葉を怖れているのです、陛下。」「では、食事を下げなさい。水を持ってきなさい。」

王が食事を終えると、王の従者たち全員が同じ食事をたべた。王は気持ちのよい会話をするためにすわり、長者に話しかけた。「この家に、長者の奥方はいないのか。」「おります、陛下。」「どこにいるのか。」「寝室にすわっていて、陛下がお越しになったことを知りません。」王は朝早く、従者たちと共に来たのであるが、妻は王が来たことを知らなかった。そこで、長者は「王さまは私の妻に会いたいと思っている」と妻のところへ行き、「王さまが来られた。あなたは王さまに会うべきだ」と言った。妻は臥せたまま、「旦那さま、王さまというのはどうなですか」と言った。「王さまというのは私たちの支配者だ」と長者が答えると、妻は不満な気持ちになって、「私たちに支配者があるとは、私たちの善行はよくなされなかったのだわ。信心なく善行を行なったので、私たちは栄華を得たけれど、他人の支配を受けるように生まれついたのだ。きっと私たちは信心なく布施を施したに違いない。これはその果報だわ」と言い、「旦那さま、私は今、何をいたしましょくか」と言った。「妻よ、〔王さまを〕扇いでさしあげなさい。」長者の妻が棕櫚の葉の団扇を持っていき、王を扇いでいると、王のターバンの香りが風に乗って彼女の両目に滲みた。すると、彼女の両目から涙が流れた。それを見て、王は長者に言った。「大長者よ、女というものは浅はかなものだ。『王さまが私の夫の栄華を奪うかもしれない』と怖れて泣いてい

るらしい。彼女を安心させなさい。私はあなたの栄華に用はない。」「陛下、妻は泣いているではありません。」「では、どうしたというのか。」「あなたさまのターバンの香りが彼女の目に滲みたのです。それで涙を流したのです。彼女はランプの光も火の光も見たことがなく、マニ宝の光だけで食べたりすわったり臥せたりしているのです。でも、陛下はランプの光でおすわりになるのでございましょう。」「そのとおりだ、長者よ。」「では、陛下、今日からはマニ宝の光でおすわりください」と大きな、瓜ほどの大きさの、値の測り知れないマニ宝を王に与えた。王は長者の家を眺めて、「ジョーティカの栄事は実に素晴らしい」と言って帰っていった。以上がジョーティカの話である *rājā geham oloketvā "mahatī vata jotikassa sampatti"ti vatvā agamāsi. ayam tāva **jotikassa** uppatti.*

現在物語—ジャティラの話

次はジャティラの出生が知られるべきである。

バーラーナシー市のある長者の娘がとても美しかった、ということである。彼女が十五か十六の年頃になったとき、〔両親は〕護衛のために一人の侍女をつけて、七階建ての楼閣の最上階の寝室に住まわせた。長者の娘がある日、窓を開けて外を眺めていると、空を飛んでいたヴィドヤーダラ(天人の一種)が見て、彼女に愛着を起こし、窓から中に入り、娘と同棲した。娘は同棲するうちに、ほどなく子供を身籠った。すると、侍女がそれを見て、「お嬢さま、これはどういうことですか」と言ったが、「放っておいて。誰にも言つてはだめよ」と言われたので怖れて黙っていた。娘は十月が経つと男の子を産み、新しい器を持ってこさせて、そこにその赤子を寝かせ、その器に蓋をしてその上に花輪を置いてから、「これを頭に載せていって、ガンジス河に流しなさい。『これは何ですか』と問われたら、『お嬢さまのお供物です』と答えなさい」と侍女に命じた。侍女は言われた通りにした。

ガンジス河の下流では二人の女が水浴びをしていたが、新しい器が水に運ばれてくるのを見て、一人が、「あの器は私のものだわ」と言った。もう一人は、「あの中のものは私のものだわ」と言った。器が彼女たちのところまで来ると、それを取り上げて岸に置いて蓋を開け、赤子を見て、一人が、「あの器は私のものだと言つたのだから、赤ん坊は私のものだ」と言った。もう一人は、「あの中のものは私のものだと言つたのだから、私の赤ん坊だ」と言った。彼女たちは言い争い、取扱所に行ってそのことを訴えたが、政判官たちも設定することができなかつたので、王のもとへ行った。

王は彼女たちの言葉を聞いて、「あなたは赤子を取りなさい。あなたは器を取りなさい」と言った。赤子を得た女はマハーハ・カッチャーヤナ長老の支援者であった。それゆえその子を「あの長老さまのもとで出家させよう」と考えて養った。その赤子が生まれた日にお産の汚れを洗つたが、取れなかつたために、髪の毛が渦を巻いていた。それゆえ、人々はその子に「ジャティラ」と名前をつけた *tassa jātādivase gabbhamalassa dhovitvā anapanītatāya kesā **jatītā hutvā atthamsu**, tenassa **jatīlotveva nāmam kariṁsu.*** 彼が足で歩き回るようになった頃、長老がその家に托鉢に来て入った。在家信女は長老をすわらせて、食べ物を捧げた。長老は男の子を見て、「在家信女よ、この男の子はあなたが得たのですか」と訊ねた。「その通りです、尊師よ。この男の子をあなたさまのもとで出家させようと養いました。彼を出家させてください」と言って長老にジャティラを託した。

長老は「いいでしよう」と言ってジャティラを連れていきながら、「この子には在家の栄華を享受する福徳があるだろうか」と觀察し、「彼には大きな福徳がある。大きな栄華を享受するだろう。しかし、今は幼いので、智慧が熟していない」と考えて、彼を連れてタッカシラー市の支援者の家に行った。支援者は長老を礼拝して立ち、ジャティラを見て、「尊師よ、あなたさまはその子を得られたのですか」と訊ねた。「その通りです、在家信者よ。彼は出家するでしょう。でも今は幼いので、あなたのもとで預かってください。」「かしこまりました、尊師よ」と、在家信者はジャティラを養子にして面倒を見た。

ところで、その在家信者の家には十二年のあいだに品物が溢れるようになっていた。彼は別の村へ行くときに、すべてのその品物を店に持つていき、ジャティラを店にすわらせて、それぞれの品物の値段を教えて、「これやあれやをしかじかの値をもらって渡すように」と言って出かけた。その日、タッカシラーの都に住む神靈たちが、何もかも、胡椒やクミンに到るまで必要になり、在家信者の店に向かっておしかけた。ジャティラは十二年のあいだに溢れるようになった品物をたった一日で売った。資産家の在家信者が戻ってきて店に何もないのを見て、「息子や、おまえはすべての品物を失ったのか」と言った。「失ったのではありません。すべてお父さまに言われたとおりに売りました。これがしかじかのものを売ったお金です。これがしかじかのものの……。」

資産家は喜んで、「どこでも生きていける男はかけがえがない」と言って、自分の家に年頃の娘がいたので、その娘をジャティラに与えて、「彼のために家を作りなさい」と人々に命じて、家ができあがると、「行きなさい。あなたは自分の家に住みなさい」と言った。さて、ジャティラが家に入ろうとするとき、片方の足で敷居を踏んだ途端、家の後ろの地面が割れて、八十尺の高さの金の山が立ち上がった。王は「ジャティラ青年の家で、地面を割って金の山が立ち上がった」と聞いて、ジャティラに長者の印の傘蓋を送った。こうして彼は「ジャティラ長者」となった。

ジャティラ長者には三人の息子があった。彼は息子たちが成人したとき、出家したいという気持ちを起こしたが、「もし我々と等しい資産を持つ長者の家があるならば、息子たちは出家を許すだろう。もしなければ許さないだろう。いったいジャンブ州に我々と等しい資産を持つ家柄はあるだろうか」と調べるために、黄金でできたタイルと、黄金でできた羊飼い棒と、黄金でできた鎖とを作らせて、家臣たちの手に持たせて、「これらを持って、何かを見物しているかのようにしてジャンブ州の地表を旅して、我々と等しい資産を持つ長者の家があるかないかを見極めて戻ってきなさい」と派遣した。

彼らは旅を続けてバッディヤ市に着いた。すると、メンダカ長者が彼らを見て、「君たち、何をしながら旅しているのですか」と訊ねた。「あるものを見物して旅しているのです」と答えると、「彼らがあののようなものを持って何かを見物しながら旅することはないだろう。国を調べながら旅しているのだ」と知って、「君たち、私の家の裏庭に入つて見物したまえ」と言った。ジャティラ長者の家臣たちはその8カリーサの広さの場所で、前に述べたような、象や牡牛ほどの大きさで、尻で尻をぶつけながら地面を割って出てきた金の羊たちを見て、その羊たちのあいだを觀察して出てきた。〔(18-10) *Mendakasetthivatthu* メンダカ長者の物語 252〕

すると、メンダカ長者が「君たち、見物して旅しているものを、あなたがたは見ましたか」と訊ねた。「はい、見ました。旦那さま」と家臣たちが答えると、「では行きなさい」と別れを告げた。彼らはそこから戻り、自分たちの〔ジャティラ〕長者に「君たち、我々と等しい資産を持つ長者の家を見つけましたか」と言われると、「旦那さま、あなたさまの資産が何

ほどのものでしょうか。バッティヤ市のメンダカ長者には、「しかじかのような繁栄があります」とすべての出来事を話した。それを聞いて、ジャティラ長者は満足し、「まず一つの長者の家は見つかった。他にもあるだろうか」と十万金の値のする毛氈(もうせん)を家臣たちに持たせて、「君たち、行って、他の長者の家を調べなさい」と送り出した。家臣たちはラージャガハ市に行き、ジョーティヤ長者の家から程遠くない場所に、材木の山を作つて火をつけて立つた。「何をしているのですか」と訊ねられると、「私たちは一枚の高価な毛氈を売つてゐるのですが、買い手がいません。持つて歩いていても盜賊たちが怖いので、これを焼いてから帰ろうと思っているのです」と答えた。すると、ジョーティヤ長者が彼らを見て、「あの人々は何をしているのか」と訊ね、その次第を聞くと、彼らを呼ばせて、「その毛氈の値はいくらですか」と訊ね、「十万金の値打ちになります」と彼らが答えると、十万金を与えさせて、「楼門を掃除しているゴミ捨ての女召使いに与えなさい」と彼らの手に毛氈を持たせて「女召使いのところへ行かせた。女召使いは毛氈を受け取ると、泣きながら主人のもとへ行き、「罪がないのに私を罰するのは、適當ではございませんでしよう。どうして、私にこのような目の粗い毛氈をお送りになったのですか。どのように私はこれを着たり羽織つたりできましよう」と言った。

長者は、「私はそのためにあなたに送つたのではない。それを卷いて、あなたが寝るときの足元に置いて、横になるときに香りの水で洗つた足を拭くために、あなたに送つたのだ。それもすることはできないかね。」女召使いは、「それなら使うことができますわ、ご主人さま」と言って下がつた。ジャティラ長者の家臣たちはこの出来事を見て、自分たちの長者のもとへ帰り、「君たち、長者の家で何を見たかね」と言われると、「旦那さま、あなたさまの富はどれほどのものでしょうか。ラージャガハ市のジョーティヤ長者には、しかじかのような繁栄がございます」と、ジョーティヤ長者の家のあらゆる繁栄を語り、そのできごとを知らせた。

ジャティラ長者は彼らの言葉を聞いて喜び満足して、「今、私は出家を許してもらおう」と王のもとへ行き、「陛下、私は出家したいと思います」と言った。「よかろう、大長者よ。出家しなさい。」ジャティラ長者は家に帰り息子たちを呼ばせ、黄金の握り棒と金剛の切っ先のついた鋤を長男の手に置いて、「息子や、家の後ろの金の山から黄金の塊を掘り出しなさい」と言った。長男は鋤を持って行き、金の山を打つた。それは平らな岩を打つたかのようであった。父は彼の手から鋤を取り上げて、真ん中の息子の手に渡して行かせた。真ん中の息子が金の山を打つたときも、平らな岩を打つたときのよう、びくともしなかつた。すると、父の長者はその鋤を一番下の息子の手に置いて、金の山に行かせた。彼が鋤を持って打つて叩くと、粘土の塊が打たれたときのようになつた。すると、長者は、「息子よ、来なさい。それで十分だ」と言って、他の二人の兄たちを呼ばせて、「この金の山は、お前たちのために生じたのではない。私の末の息子のために生じたのだ。彼と一緒に、一つに心を合わせて財産を使いなさい」と言った。どうして金の山は上の兄弟たちのために生じなかつたのか。どうしてジャティラは生まれたときに、水に落ちたのか。それは自分の【過去世で】犯した行為のためであった。

過去物語——金細工職人と三人の息子

カッサパ正等覚者の仏塔が作られていたとき、一人の煩惱を減し尽くした阿羅漢が仏塔の場所に来て観察し、「みなさん、どうして仏塔の北の入り口が完成していないのですか」と訊ねた。人々は、「金が足りないのです」と言った。「私が村へ入って勧進してきましょう。あなた方は熱心に仕事をするように。」阿羅漢はそう言って、市内に入り、「ご婦人方、旦那さま方、あなた方の仏塔の一箇所に金が足りません。金をください」と大勢の人々に勧進しながら、金細工職人の家に行つた。金細工職人はちょうどそのとき、妻と喧嘩をしながらすわっていた suvanṇakāropi tañkhaneyeva bhariyāya saddhiṁ kalaham karonto nisinno hoti。すると、長老は彼に、「仏塔であなたさまがたがつけた入り口に金が足りません。それを知らせにきました」と言った。しかし、金細工職人は妻に腹を立てていたので、「おまえの師を水に落として行つてしまえ」と言った so bhariyāya kopena “tava satthāram udake khipityā gacchā”ti āha。すると、妻は彼に、「あなたときたら、あまりにも後先考えない事をしてしまいました。私に怒っているなら、私を叱るか叩くかするべきです。どうして過去・未来・現在のブッダたちに憎しみを抱くのですか」と言った。

金細工職人はその途端、後悔の念に捉えられ、「尊師よ、私をおしください」と言って、長老の足元にひれ伏した。「友よ、私はあなたに何も言われませんでした。師に赦しを請いなさい。」「何をして赦しを請いましょうか、尊師よ。」「黄金の花々を三つの瓶に入れて舍利室の中に撒き、洗つた衣をまとい、髪を洗つて、赦しを請いなさい、友よ。」金細工職人は、「かじこまりました、尊師よ」と言って黄金の花々を作り、三人の息子のうち、一番年上の息子を呼んでこさせて、「来なさい、息子よ。私は師に憎しみの言葉を言つてしまつた。だから、この花々を作つて舍利室に撒いて赦しを請おうと思う。お前も私の友となっておくれ」と言った。すると、長男は、「あなたは私のせいで、憎しみの言葉を言わされたわけではありません。あなた一人でなさいませ」と言って、一緒にしようとした。真ん中の息子を呼ばせて同じように言ったが、彼もまた同じように答えて、一緒にしようとした。そこで、末の息子を呼ばせて同じように言った。末の息子は、「父のするべき仕事は息子の義務です」と、父の友となり花々を作つた。金細工職人は一尺の大きさの花々を三つの瓶に入れて舍利室に撒き、洗つた衣と洗つた髪で、師に赦しを願つた。(過去物語終わり)

このようなわけで、彼はその後の七回の生まれ変わりで、それぞれ生まれたときに水に落とされることになった iti so sattakkhattum jātakāle udake pātanam labhi。しかしそれは、彼の現世の生まれで最後になったが、今生でもその業の残達のために、水に落ちたのである。彼の二人の息子たちは、黄金の花々を作つたときに仲間になろうとした。彼らにはそのために、金の山が生じなかつた。しかし、ジャティラの末の息子は一緒に作ったために、「金の山が」生じたのである。

このように、彼は息子たちを戒めて、師のもとで出家し、数日のうちに阿羅漢果に到達した。師は、その後、五百人の比丘たちとともに托鉢に歩いて、ジャティラの息子たちの家の戸口に行かれた。息子たちはブッダを始めとする比丘サンガに、半月のあいだ食事の布施を捧げた。比丘たちは法堂で話を始めた。「ご同朋ジャティラよ、今でもあなたは八十尺の金の山と息子たちに執着はありますか。「ご同朋よ、私にはそれらのものに執着も慢心もありません。」比丘たちは、「あのジャティラ長老はありえないことを言って、偽りを語っています」と話した。師は彼らの話を聞きになって、

「比丘たちよ、私の息子にはそれらのものに執着も慢心もありません」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「416 この世で執着を捨てて、家なき境涯に遍歴し、執着の生存を滅した者、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

(26-34) Jotikattheravatthu ジョーティカ長老の物語 416 (416の因縁譚その2)

◆ yodha tanhanti puna imam dhammadesanañ satthā veluvane viharanto jotikattheram ārabbha kathesi.

この法話は、師が〔ラージャガハ市の近くの〕竹林精舎に滞在しておられたときに、ジョーティカ長老について語られたものである。

アジャータサットウ王子がデーヴアダッタと一緒にになって父王〔ビンビサーラ〕を殺して王位についたとき、ジョーティカ長者の楼閣を奪おう」と戦の支度をして出発したが、マニ宝の堀に映った従者たちを連れた自分の姿を見て、「家長は私と戦う用意をして、軍隊を連れて出てきた」と思い、あえて近づくことができなかった。ジョーティカ長者はその日、布薩日の齋戒を守って、朝早く朝食を済ませると、精舎に行って師のもとで法を聴きながらすわっていた。第一の楼門で護衛に立っていたヤマカモーリン夜叉は、アジャータサットウ王を見ると、「どこへ行くのですか」と言って、従者ともども撃破し、四方八方に追撃した。

王はまさに精舎に逃げた。すると、ジョーティカ長者が王を見て、「陛下、どうされたのですか」と言って、座から立ち上がった。「家長よ、あなたは自分の家来たちに私と戦えと命じここへ来て、法を聴くふりをしてすわっていた。」「陛下、それでは私の家を奪おうと思って行かれたのですか。」「その通り、私は行ったのだ。」「私が望まないのに、千人の王たちが家を奪おうとしてもできません、陛下。」アジャータサットウ王は、「では、あなたは王になるつもりか」と怒った。長者は、「私は王ではありません。しかし、私の所有物は衣の裾のほつれ糸でも、私が欲しなければ、王たちも盜賊たちも奪うことはできません。」「では、どうしたら私はあなたの望みにしたがって奪えるだろうか。」「陛下、では私のこの十本の指に二十の印章付き指輪がありますが、これらを私はあなたに与えません。もしできるならば、奪ってみなさい。」

そこで、アジャータサットウ王は地面にしゃがんでもうつむいてから飛び上がり、十八尺の所に上がって立ち、さらに飛び上がって八十尺の所に上がった。このように王は大力の持ち主であったが、いろいろに動いてみても、印章は一つすらも引き抜くことはできなかった。すると、長者は王に「陛下、上衣を広げなさい」と言い、〔広げた上衣の上で〕指をまっすぐに伸ばした。二十個の印章は指から外れた。

長者は王に、「陛下、このように、私の所有物は、私が望まなければ奪うことはできません」と言ったが、王の振る舞いに俗世を厭う心を生じて、「私に出来をお許しください」と言った。アジャータサットウ王は「彼が出来すれば、簡単に彼の楼閣を奪えるだろう」と考えて、一つ返事で、「出来しなさい」と言った。

ジョーティカ長者は師のもとで出家して、ほどなくして阿羅漢果に到達し、ジョーティカ長老と呼ばれた。彼が阿羅漢果に到達した途端、彼のすべての栄華は消えてなくなった。彼のサトウラカーヤーという名の妻は、神々が〔元の〕ウッタラクル国に連れて帰った。

さてある日、比丘たちがジョーティカ長老に話しかけて、「ご同朋ジョーティカよ、あの楼閣や妻に執着があるでしょう」と訊ねると、彼は、「ご同朋よ、ありません」と答えたので、比丘たちはそのことを師に告げた。「尊師よ、彼はありえないことを言って、偽りを語っています。」師は、「比丘たちよ、私の息子にはそれらに執着はありません」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「416 この世で執着を捨てて、家なき境涯に遍歴し、執着の生存を滅した者、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.270 (2017年8月号) 渴愛の世界 無執着に達する方法 The world of attachment

416.Yodha tanhāñ pahantvāna, Anāgāro paribbaje; Tanhābhavaparikkhīnam, Tamaham brūmi brāhmañam.

416.世の渴愛(タンハ)を捨て去りて 家なく遊行を志し 渴愛の生起尽滅す そをバラモンと我は説く 訳：江原通子

渴愛を捨てる

「やるつもりです」というような、「つもりつもりの哲学・人生論」は仏教ではありません。

渴愛の発見 初級編

手に取った品物を捨てられるか否かをチェックすることで、「執着はここにあるものである」と簡単に経験することができます。

渴愛の発見 中級編

自分と一緒に生活している人々や生き物に対して「渴愛の発見」を実践してみるのです。ひとが完全に正しい人間関係を築いていると仮定しましょう。それでも、そこに渴愛が働いているのです。その渴愛を発見しましょう。

渴愛の発見 上級編

家族とその他の生きものに対して自分の義務を果たしています。義務を果たすからといって、それは終わりのない仕事です。自分が相手かどちらかが死ぬまで、果たすべき義務が続くのです。よく観察すると、無意味な行為に見えてしまいます。結果は「なんとか頑張って死ぬまで生きました」ということだけ。しかし、余計なことをしなくとも、生まれたものは死ぬまで生きています。当たり前のことです。そこで、その人は自分のここに生まれる俗世間にに対するさまざまな渴愛——大胆な渴愛から、微妙でわかりにくい渴愛まで——を発見するのです。

覚悟

執著に値する俗世間のすべてを捨てることに決めます。それを仏教用語では、「出家」と言います。

「俗世間の生きかたこそ唯一正しい行為である」と思っている人々にとっては、家も家族も仕事も仕事を捨てることはけしからん生きかたに見えるかもしれません。出家という行為がけしからんのではなく、出家を非難する人々の感情的な哲学こそがけしからんことなのです。

捨てて出家をする

介護の必要な親などがいるならば、「在家出家」を選ぶのです。在家でありながら出家というのは、少々わかりづらい矛盾

した単語です。在家として金儲けを目指して、執着や感情に負けて生活はしません。自分がいなから命が危うくなる人々に、欠かせない義務を果たしながら、自分自身は修行者に相応しい生きかたをする。この生きかたは仏教用語でgihibrahmacārī 在家梵行者と言います。自分が捨てることで、生活できなくて死ぬほどの人物がいらない場合は、すべてを捨てて出家するのです。

無執着はこころの成長

出家した人は、ものと人物を捨てたのですが、こころにある執着した性質を無くしていません。こころはまだ、ものに依存したいという気持ちでいるのです。依存したいが依存させてもらえない、という状態も苦しみの種になります。

出家者はここで、解脱を目指して観察を進めます。節度を超えないで四具を使用します。解脱に達するまで、生きていなくてはいけないからです。

出家は修行として「自己観察」を行います。品物と人物の観察は、以前おこないました。最後に観察するべきなのは、自分自身のことです。執着は自分自身にあるのです。自分自身が生きているから、執着も起きている。では、「私は何に執着しているのでしょうか？ 私とは何なのか？」と観察します。私とは、肉体（色）という組織、感覚（受）という組織、概念（想）という組織、衝動（行）という組織、認識する（識）という組織で出来上がっています。結局は、色受想行識に執着していたのです。色受想行識は組織であって、変化しない個体ではありません。原因によって現れて、原因が消えると無くなるものに過ぎません。瞬時に無くなるものに執着するのは愚かなことです。生きるとは、色受想行識の流れなのです。存在欲とは、この流れをどうしても維持したいという衝動（行）です。要するに、自己回転するためのカラクリです。生きることは「苦」なので、このカラクリはいりません。すべては無常であると発見する修行者は、色受想行識の組織に対しても執著を捨てるのです。その人に、これ以上、捨てるものはありません。一切の現象に対する執着を捨てるとは、完全たる解脱・自由に達したことです。その人が本物の聖者であり、本物のバラモンなのです。

416. Yodha tanham pahantvāna, anāgāro paribbaje; Tanhābhavaparikkhīnam, tamaham brūmi brāhmaṇam.

416. 彼が、この〔世において〕、渴愛〔の思い〕を捨棄して、家なき者として遍歴遊行するなら、渴愛〔の思い〕と〔迷い〕生存が完全に滅尽した者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヨーダ	タンハン	パハントゥワーナ	アナガーロー	パリッバジエー
Yodha	tanham	pahantvāna,	anāgāro	paribbaje;
彼が、この[世において]、	渴愛〔の思い〕を	捨棄して、	家なき者として	遍歴遊行するなら、
Yodha=yo/ya(閏代 m.sg.nom)[Sk.yah]~である人,~であるもの+idha/idha/idhān(adv)[Sk.ihā]ここに,此界に idha-loka 此世-loka-vijaya 此世の勝伏-loka-saññin 此世想者 tanham/kāma(m.n.pl.acc)欲,愛欲,欲念,欲情,欲楽 pahantvāna/pajahati(v. ger)[pa+hā+a](hāが二重になり,前の h が j に変わる)諦める;放棄する;見捨てる				
/, anāgāro/anāgāra(a.m.sg.nom)[an-agāra]非家,出家	paribbaje/paribbajati(v.opt.3sg)[pari-vraj]遊行す,遍歴す opt.paribbaje			

タンハーバワパリッキーナン	タマハン	ブルーミ	ブラーフマナン
Tanhābhavaparikkhīnam ,	tamaham	brūmi	brāhmaṇam.
渴愛〔の思い〕と〔迷い〕生存が完全に滅尽した者であり、	彼をわたしは、	説く。	「婆羅門」と
Tanhābhavaparikkhīnam=tanhā/tanhā(f)[Sk. trṣṇā cf. tasiṇā]渴愛,愛,愛欲-bhava 愛有+bhava/bhava(m)[// < bhū]: ①有,存在,生存,繁栄,幸福② bhavati の imper+parikkhīnam/parikkhīṇa(a.m.sg.acc)[parikkhīyati の pp]消尽した,滅尽した←parikkhīyati(v)[pari-kṣi]消尽す,滅尽す.pp.parikkhīṇa.cf.parikkhaya Tanhābhavaparikkhīnam/, tamaham brūmi brāhmaṇam.			

(26-35) Naṭaputtakattheravatthu 舞踊家だった長老の物語(I) — 舞踊への執着がなくなった長老 417

◆ hitvā imam dhammadesanam satthā veluvane viharanto ekam nataputtakaṁ ārabba kathesi.

この法話は、師が〔ラージヤガハ市の近くの〕竹林精舎に滞在しておられたときに、舞踊家だった長老について語られたものである。

彼はある舞踊を踊りながら巡業をしていたが、師の法話を聴いて出家し、阿羅漢果に到達した。彼がブッダを始めとする比丘の群れと一緒に托鉢のために〔都に〕入ろうとするとき、比丘たちがある舞踊家の息子が踊っているのを見て、長老に訊ねた。「ご同朋よ、彼はあなたが何度も踊っていたものを踊っています。あなたにはそれに愛着があるでしょう」と訊ね、長老が「ありません」と答えると、「尊師よ、彼はありえないことを言って、偽りを語っています」と師に告げた。師は彼らの話を聞きになつて、「比丘たちよ、私の息子はあらゆる束縛を乗り越えたのです」とおっしゃつて、次の詩句を唱えられた。「417人の束縛を捨て、天の束縛を越え、あらゆる束縛から離れた人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.271 (2017年9月号) 存在の要(かなめ)である束縛 束縛を断つと自由になる Attachment is an essential element of life

417. Hitvā mānusakam yogam, Dibbam yogam upaccagā; Sabbayogavisamyuttam, Tamaham brūmi brāhmaṇam.

417. 人間界の縛(ばく)を棄て 天界の縛ものりこえて すべての縛を離れたる そをバラモンと我は説く 訳: 江原通子

Yoga 束縛

生命には、生きていきたいという存在欲があります。生きていきたいならば、何かに必ず依存しなくてはいけないのです。生きていきたいから、依存するものに激しく執着するのです。ひたすら依存するだけで、自分自身が病んでいることに気づかないのです。「依存する対象から離れない」という精神状態を、お釈迦さまは yoga 束縛という言葉で説かれています。

依存する対象

素的な話なら、人は家族・財産・知識・能力、云々に頼っているのだと言えます。ブッダの智慧で説明するならば、それらはすべて、色声香味触法という六つのカテゴリーに入ります。

意は勝手に活動する

意は対象に絶えず依存しているのです。意は勝手に仕事をします。たとえば、「午後九時から十時まで妄想します。十時を過ぎたら妄想をやめます」なんてことはできません。「午前中なら怒ります。午後は何が起きても怒りません」という話は成り立たないです。この例で、意は勝手に、法という対象に依存して活動していることを理解できると思います。

四種類の束縛

お釈迦さまは、yoga 束縛というテーマを特別に取り上げて説法することもあります。その時、四種類の束縛を説かれています。

① Kāmayoga 欲という束縛。色声香味触に束縛されていることです。

② Bhavayoga 存在という束縛。存在欲のことです。

③ Dīṭhiyoga 見解という束縛。生きるために見解・概念が必要になります。良し悪しを判断して、それに従って生きなくてはいけないです。皆、自分の見解が正しいと思っているのです。強烈な束縛です。

④ Avijjāyoga 無明という束縛。皆、無明を喜んでいます。生命は無明に支配されて、無明に管理されて、無明の指令に従って、無明の奴隸になって生きています。生命に、自由は一切ないです。束縛の親分は無明です。

解脱

一切の束縛を根絶することが解脱です。それは簡単にできる仕事ではありません。愛着を捨てることも難しいのに、束縛を完全に断つことはなおさら難しいのです。しかし、解脱とは束縛を根絶することなのです。

如実知見

ここでの働きを知り尽くしていたお釈迦さまは、私たちに完全無欠のプログラムを教えているのです。このプログラムを実行すれば、束縛を根絶することが可能になります。それが、ものごとをありのままに観察することです。思考も妄想も知識も私見も判断も一切はさまないで、ありのままに「生きる」という過程を観察してみるのです。いくら失敗しても、訓練すれば上達します。正しく観察できることに、如実知見といいます。

如実に観察すると、「一切の現象は無常である、苦である、無我である」と発見します。「生きるとは、原因がそろって一時に現れる瞬間の現象に過ぎない」と発見します。「瞬間の現象に執着することによって、輪廻転生の苦しみがあるのだ」と発見します。その結果、存在欲が減って、「何としても生きていきたい」という気持ちが消えてしまいます。ここから束縛が消えます。解脱に達します。

束縛は、「はい、捨てます」という感じで捨てられるものではありません。ブッダの説かれた、智慧が頗れるプログラムを実行しなくてはいけないです。

人間界の束縛 Mānusakam yogam

Mānusakam yogam とは、人間界にかかわる一切の束縛です。人間界と天界の生命は、眼耳鼻舌身意で色声香味触法に依存して生きているのです。その束縛を捨てるのだと説かれています。

天界の束縛を超える Dibbam yogam upaccagā

すべての束縛を絶つことに挑戦できない人は、せいぜい梵天の優れた喜悦感を目指して、眼耳鼻舌身の世界に対する束縛を捨てることにします。成功したければ、冥想実践してサマーディ状態に達しなくてはいけないです。価値の低いものを捨てて、価値の高いものを取ったのです。Dibbam yogam upaccagā というフレーズで、サマーディ世界（梵天界）に対する束縛も超えるべきであると説かれています。

一切の束縛から離れる Sabbayogavisamyuttam

価値の低いものから価値の高いものへと、束縛の対象を変えていく修行者は、ある観察をしなくてはいけないです。いま、自分が嵌っている束縛の短所を徹底的に観察するのです。

このような観察をおこなう修行者は、「束縛とは何であろうとも、結局は悩み苦しみを司る原因である」と発見するのです。束縛は現実的で自分に経験があるものです。それを根絶すれば、言葉すら成り立たない涅槃の境地に達するのです。一切の束縛を根絶した人が、真のバラモン（真の聖者）なのです。

417. Hitvā mānusakam yogam, dibbam yogam upaccagā; Sabbayogavisamyuttam, tamaham brūmi brāhmanam.

417. 人間としての束縛を捨棄して、天〔の神〕としての束縛を超えて行つたなら、一切の束縛について束縛を離れた者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヒトウワー マースサカン ヨーガン ディッパン ヨーガン ウパッチャガー

Hitvā mānusakam yogam, dibbam yogam upaccagā; Sabbayogavisamyuttam, tamaham brūmi brāhmanam.

捨棄して、人間としての 束縛を 天〔の神〕としての 束縛を 超えて行つたなら、

Hitvā/jahāti;jahati(v. ger)[// hā]捨つ,断す. aor. jahi ; imper. jaha, jahassu ; opt. jahe, jaheyya ;

fut. jahissāmi, hassāmi, hāhasi ; ger. hitvā, hitvāna, jahitvā, jahetvā ; inf. jahitum ; pp. hīna, jahita ;

pass. hāyati, hāyate, hīyati ; ppr. hīyamāna ; caus. hāpeti. cf. hāni, hāyin, jaha mānusakam/mānusaka(a.m.sg.acc)

[=mānusa]人の; 人類 f.mānusikā,n.pl.mānusikāni yogam/yoga(m.sg.acc)[yuj]軛,束縛,繫縛; 結合,関係,瑜伽,瞑想,観行,修行,努力, dibbam/dibba(a.m.sg.acc)[Sk.divya=diviya.cf.deva]天の,神の,天的の yogam/yoga(m.sg.acc) upaccagā/upātīgacchati(v.aor.3sg)[upati-gacchati]超える,征服す aor.upaccagā,upaccagum;

サッバヨーガウイサンユッタン

Sabbayogavisamyuttam,

一切の束縛について束縛を離れた者であり、

Sabbayogavisamyuttam=sabba/sabba(a.代的 m.n 持)[Sk.sarva]一切の,すべて,一切のもの+yoga/yoga(m 夢)[yuj]

+visamyuttam/visamyutta:visāññutta(a.m.sg.acc)[< vi-samyuj]離縛せる,離繫せる者,軛を離れたる, tamaham brūmi brāhmanam.

(26-36) Naṭaputtakatheravatthu 舞踊家だった長老の物語(2) — 快楽と不快を捨てている長老 418

◆ hitvā ratīñcā imāñ dhammadesanāñ satthā veļuvane viharanto ekāñ naṭaputtakamyeva ārabbha kathesi. vatthu purimasadisameva. idha pana satthā, “bhikkhave, mama putto ratīñca aratiñca pahāya tīti vatvā imam gāthamāha — この法話は、師が〔ラージャガハ市の近くの〕竹林精舎に滞在しておられたときに、舞踊家だった長老について語られたものである。

物語は前のものと同様である。しかし、ここでは師は、「比丘たちよ、私の息子は快楽と不快とを捨てています」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「418 快楽と不快とを捨て、清涼で、とらわれなく、あらゆる世間に打ち勝った勇者、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終ったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.272 (2017年10月号) 快不快を捨てる 依存を消すと解脱 Beyond pleasure and displeasure

418. Hitvā ratīñcā aratiñcā, Sītibhūtam nirūpadhim; Sabbalokābhībhūmī vīram, Tamaham brūmi brāhmañam.

418. 楽と不楽を共に棄て いとすやすかに依著なし すべての世界に勝てる雄者(をさ) そをバラモンと我は説く
訳: 江原通子

私は死にたくない

「ひとが死ぬのは当たり前のことですが、自分は死にたくない」という気持ちが、こころの中に潜んでいる。この矛盾した感情は、束縛のせいで起きるものなのです。

感情の流れは停止しない

個人の知識と感情は、宇宙の法則にも生命の法則にも関係ありません。死にたくないと思う人が死なないわけでも、いま死にたいと思ったから死ぬわけでもありません。

流れを変えてみる

物質の変化の流れは、太刀打ちできないものです。それでも私たちは工夫して、ある程度まで自然の流れを変えつつ生活しています。しかし、自然に打ち勝つことはできません。こころの流れは、生命が「私・個人」という言葉で認識しているものです。それは自分で変えられます。自由に変えられるが、感情のせいでこころの流れは管理できないほど暴れているのです。ひとは感情の奴隸になって生きています。こころがこのような状況であるならば、転生が不安になります。

輪廻とは苦の転生です

生きることは苦であります。生まれては死ぬ、生まれては死ぬ、という生死の流れは、苦の流れであります。ですから、輪廻転生とは生命の法則かも知れませんが、ありがたいことではないのです。

束縛の発見 (rati 欲)

何かを見たとしましょう。それを気に入ってしまう。Rati の感情が生まれるのです。それで、その見たものを欲しくなりたり、自分で所有したくなったりします。所有するところまで行かなくても、気に入ったので、こころにはインパクトが入ります。そのインパクトの影響で、考えたり、妄想したり、感情の流れを変えたりするのです。思考・妄想の流れを自分自身で起こしているのに、自己管理はできなくなっている。その対象が頭から離れないのです。要するに、「見たものが自分のこころの流れを変えてしまった」ということです。

Rati 欲を束縛として説明すると、色声香味触だけではなく、意の流れに触れる概念(法)も入れなくてはいけないです。憑りつかれた対象によって、意の流れが変わります。変わった思考・妄想の流れが起きます。好みの知識・哲学・信仰などがあれば、それらによってもこころの自由が失われます。それらも束縛になります。

束縛の発見 (arati 不快)

色声香味触法は外の世界ということになるので、何に触れるかと自分では分からぬ。触れた対象が期待外れのものであるならば、不快感をおぼえてしまいます。それに合わせて、「嫌」という感情が起きて、思考・妄想が流れます。こころが弱くなります。ですから、arati 不快感も束縛なのです。

仏道を実践する出家者も、好みの対象を欲して暴走しているこころを、制御して止めなくてはいけないです。戒律を守らなくてはいけないので、自由に生きることもできません。蚊に刺されても、蚊を殺すことはできません。明らかに、好みと言える環境ではないのです。そこで不快感をおぼえたら、煩惱が現れた、ということです。束縛が現れた、ということです。束縛を絶つ目的でおこなった修行の結果、束縛が新たに現れたとは話にならない矛盾でしょう。修行者は、環境が不便で苦しくても、不快感をつくらず、あえて精進するのです。

好みくない、苦しい環境に置かれて arati 不快感をおぼえる人々は皆、競争に負けます。敗者になるのです。

聖者のこころ

聖者のこころには、rati 欲という束縛も、arati 不快という束縛もありません。聖者は、眼耳鼻舌身意も、色声香味触法も、無常の流れであると発見した方々です。無常に執着することは成り立たないと、発見している方々です。ですから、こころは束縛を脱して自由になっているのです。こころは対象によって搖らぎません。静寂に達している sītibhūtam のです。こころとは、対象に依存して「知る」という機能の流れです。対象が無ければ、知ることも認識も起きません。一般人のこころは、対象に依存しているだけではなく、対象から離れることもできません。何にも依存しないこころを作ることに成功した nirūpadhim 聖者は、そのゆえに全世界(輪廻転生)を超越した sabbalokābhībhūmī 真の英雄 virām なのです。このような人こそ真の聖者・真のバラモンであると、お釈迦さまは説かれるのです。(Tamaham brūmi brāhmañam)

418. Hitvā ratiñca aratiñca, sītibhūtam̄ nirūpadhim; Sabbalokābhībhūm̄ vīram̄, tamaham̄ brūmi brāhmanam.

418. 欽楽も、不満も、〔両者ともに〕捨棄して、〔心が〕清涼と成った者を、〔心の〕依り所（依存の対象）なき者を、一切の世を征服する勇者を——わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヒトゥワー ラティンチャ アラティンチャ スイープータン ニルーパディン
Hitvā ratiñca aratiñca, sītibhūtam̄ nirūpadhim;
[両者ともに]捨棄して、 欽楽も、 不満も、 [心が]清涼と成った者を、 [心の]依り所なき者を、
Hitvā/jahāti;jahati(v. ger)[// hā]捨つ,断つ ratiñca=ratiñ/rati(f.sg.acc)[// <ram]樂,喜樂+ca/ca(conj)~と,また,しかし,~も,そして
aratiñca=aratiñ/arati(f.sg.acc)[a-rati]不樂,不快+ca/, sītibhūtam̄=sītibhūtam̄=sīti/sita : ①(a 依対)[Sk.śīta]寒き,冷き-āluka 寒さを感じ
る-odaka,-odika 冷水の-kāla 寒時-naraka 寒地獄-bhīruka 寒冷を恐れる-valāhaka 寒雲の: ②(n)[BSk. //]帆
+bhūtam/bhūta(m.sg.acc)←bhavati(v.pp)[bhū] ある,存在する nirūpadhim/nirūpadhi : nirupadhi(a.m.sg.acc)[nir-upadhi]依止なき,無
依の,依著なき,生質なき-sukha 無依樂;

サッパローカービブン ウィーラン タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Sabbalokābhībhūm̄ vīram̄, tamaham̄ brūmi brāhmaṇam̄.
一切の世を征服する 勇者を 彼をわたしは、 説く。 「婆羅門」と
Sabbalokābhībhūm̄=Sabba/sabba(a.代的 m.n 持)[Sk.sarva]一切の,すべて,一切のも+loka/loka(m 依処)世,世間,世界
+abhibhūm̄/abhibhū(n.a.sg.acc)[cf.abhibhavati]勝利,征服せる vīram̄/vīra(m.sg.acc)[//]英雄,雄者,勇者-āṅgarūpa 英雄の四肢の姿を
した,英雄的な, tamaham̄ brūmi brāhmaṇam̄.

(26-37) Vaṅgīsatheravatthu ヴァンギーサ長老の物語 419-420

◆ cutim yo vedīti imam dhammadesanaṁ satthā jetavane viharanto vaṅgīsatheram ārabbha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ヴァンギーサ長老について語られたものである。

ラージャガハ市の婆羅門でヴァンギーサという者は、死んだ人々の頭蓋骨を叩いて、「これは地獄に再生した者の頭蓋骨である、これは畜生の胎内に生まれた者の、これは餓鬼界に、これは人間界に、これは天界に生まれた者の頭蓋骨である」と知ることができた。

婆羅門たちは、「この者によって、我々は世間で食べていくことができる」と考えて、ヴァンギーサに二枚の赤い布を着させて、彼を連れて地方を遍歴しながら、人々に言った。「彼はヴァンギーサという婆羅門で、死んだ人々の頭蓋骨を叩いて、生まれ変わった所を知ることができるのだ。自分の親族たちの生まれ変わった所を訊ねてみなさい。」人々は財力に応じて、十ナカハーバナ金貨、二十、百〔カハーバナ金貨〕を与えて、親族たちの生まれ変わった場所を訊ねた。彼らは次第にサヴァッティー市に着いて、ジェータヴァナ精舎の近くに宿営した。

彼らは、大勢の人々が朝食を食べてから、香や花輪などを手に法を聴きに行くのを見て、「どこへ行くのですか」と訊ねると、「精舎に法を聴きに行くのです」と答えるので、「そこへ行って何をするのですか。私たちのヴァンギーサ婆羅門に等しい者はありません。死んだ人々の頭蓋骨を叩いて、それぞれ生まれ変わった所を知ることができますよ。あなたがたの親族たちの生まれ変わった所を訊ねてみなさい」と言った。

人々は、「ヴァンギーサが何を知っているというのですか。私たちの師に等しいものはありません」と答えた。婆羅門たちは、「ヴァンギーサに等しい者はいない」と言い、話が大事(おおごと)になり、人々は、「来なさい。今あなたがたのヴァンギーサか私たちの師か、どちらが多くを知っているか、たしかめようじゃないか」と、婆羅門たちを連れて精舎に向かった。

師は彼らが来ることをお見通しで、地獄、畜生、人間界、天界と、四つの場所に再生した四つの頭と、煩惱を滅し尽くした阿羅漢の頭蓋骨と、これら五つの頭蓋骨を持ってこさせて順番に並べ、彼らが到着すると、ヴァンギーサにお訊ねになった。

「あなたは頭蓋骨を叩いて、死んだ人々の生まれ変わった所を知るそうですね。」「その通り、私はわかります。」「これはどんな人の頭蓋骨ですか。」ヴァンギーサは頭蓋骨を叩いて、「地獄に再生した人です」と答えた。すると、師は彼に「素晴らしい、素晴らしい」と称賛の言集を与え、その他の三つの頭蓋骨についてもお訊ねになり、ヴァンギーサがためらうことなく答えるたびに、同じように称賛の言葉を与えてから、五番目の頭蓋骨を見せて、「これはどんな人ですか」とお訊ねになった。ヴァンギーサは、叩いても生まれ変わった場所を知ることはできなかった。すると、師は彼に、「ヴァンギーサよ、わからないのですか」とお訊ねになり、「はい、私にはわかりません」と彼が答えると、

師は、「私はわかります」とおっしゃった。すると、ヴァンギーサは懇願した。「私にそのマントラ(呪文)を教えてください。」「出家していない者には教えることはできません。」ヴァンギーサは、「このマントラを習い覚えたら、全ジャンブ州で私が最高の者になれるだろう」と考えて、仲間の婆羅門たちに、「あなた方はそこで数日過ごして下さい。私は出家します」と、彼らと別れて師のもとで出家し、具足戒を受けて、ヴァンギーサ長老と呼ばれるようになった。さて、〔先輩比丘たちは〕彼に三十二の身体の要素についての瞑想の主題を与えて、「マントラの準備の瞑想を学びなさい」と言った。

〔atthi imasmim kāye kesā lomā nakhā dantā tāco, māmsam nhāru aṭṭhi aṭṭhimiñjam vakkam, hadayam yakanam kilomakam pihakam papphāsam, antam antagunam udariyam karīsam, pittam semham pubbo lohitam sedo medo, assu vasā khelo siṅghān ikā lasikā mutta mathaluhāgam'nti. 〈この身には、髪・毛・爪・歯・皮、肉・筋・骨・骨髄・腎臓・心臓・肝臓・肋膜・脾臓・肺臓、腸・腸間膜・胃物・大便、胆汁・痰・膿・血・汗・脂肪、涙・脂肪油・唾・鼻液・関節液・小便脳みそがある〉と。〕

ヴァンギーサ長老がそれを復習していると、時々、仲間の婆羅門たちが、「マントラは覚えたか」と訊ねたが、「覚えるまで待ちたまえ」と答えているうちに、数日のうちに阿羅漢果に到達し、ふたたび婆羅門たちに訊ねられると、「ご同間よ、今、私はマントラを学ぶ必要がなくなりました」と答えた。

これを聞いて、比丘たちは、「尊師よ、彼はあり得ないことを言って、偽りを語っています」と師に告げた。師は、「比丘たちよ、そのように言ってはなりません。比丘たちよ、今、私の息子は、死と生まれ変わりに精通したのです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「419 衆生の死と生を完全に知り、執着なく、よく歩み、覚った人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」「420 その人の行方を神々もガンドッパも人間も知らない、煩惱を滅した、敬うべき人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.273 (2017年11月号) 生死を見極めること 解脱者の行方は認識範囲に入らない Beyond the limits of relativity

419.Cutim yo vedīti sattānam, Upapattiñca sabbaso; Asattām sugatām buddham, Tamahām brūmi brāhmanam.

420.Yassa gatim na jānanti, Devā gandhabbamānusā; Khīnāsavam arahantam, Tamahām brūmi brāhmanam.

419.あまねく有情の死と再生 如実に知りて無執着 まこと幸せなる覚者 そをバラモンと私は説く

420.赴くところ人天(にんでん)も 音楽神(ガンドッパ)さえ知るを得ず 煩惱尽きし阿羅漢(アラハンタ) そをバラモンと私は説く 訳:江原通子

三種類のブッダ

解脱に達した聖者のことを阿羅漢(araham)と言います。お釈迦さまも阿羅漢です。しかし、人類のなかで解脱に達する道を初めて発見した先駆者であり、修行者みなとの指導者であるお釈迦さまに敬意を抱いて、阿羅漢と呼ぶよりは「正等覚者

(sammāsambuddha)」と呼んでいるのです。正等覚者と呼ばれるためには条件が二つあります。一つ目は、人類のなかで、自分一人で解脱に達する道を発見して、解脱に達することです。二つ目は、発見した真理を一般人に理解できるように語れる能力を持っており、なおかつ他人を指導することができます。

もしも、優れた人格者が自分一人の努力で真理に達したとしても、真理は決して言葉にならないので、他人に言語を通じて

伝えることは不可能です。その場合、自分の覚りの智慧は自分だけのものになります。言語能力の壁を破ることができない聖者たちのことを、独覚者 (pacceka-buddha) と呼ぶのです。しかし、正等覚者の教えが世にある間、独覚者は現れません。これで、覚りに達した聖者たちは正等覚者・独覚者・阿羅漢の三種類になります。みな覚者なので、ブッダという言葉は三種類の聖者たちいずれにも使えます。

解脱に勝劣はない

勝劣は、認識能力が相対的な範囲にとどまっている時にだけ現れる概念です。一切の現象を乗り越えたならば、相対性も乗り越えて真理に達しているのです。解脱の智慧は比較対象になりません。解脱に勝劣があると誰かが議論しているとしたら、その方が相対的な範囲を超えてないことだけは確かです。要するに、語っている本人が解脱に達していないのです。

マクロスケールの輪廻

仏教では、物質の輪廻を宇宙スケールで語っています。宇宙は気が狂うほど長い時間をかけて膨張するのです。その時間は、一劫 (eka-kappa) と言われます。それから、膨張が止まります。時間的に、一劫かかります。それから、一劫かけて破壊していきます。破壊された状態で、空の状態で一劫とどまります。それからさらに、収縮が始まります。その間に、私たちが観察する物質宇宙が現れます。収縮が終わると、宇宙が破壊され、空の状態で一劫もちます。それから膨張のサイクルが始まります。宇宙の輪廻に対して仏教は興味がないのです。ですから、収縮破壊・膨張・膨張維持・膨張破壊・収縮維持・収縮破壊……というサイクルだけ迫っています。

生命の輪廻転生

生命とは、個人の命というよりも、「こころ」というエネルギーの流れを意味するものです。こころは物質と絡み合って活動します。だから、生命は宇宙の輪廻のサイクルに挟まれているのです。依拠する物質の形に合わせて、こころの働き範囲も変化します。宇宙が破壊していくと、こころの活動範囲もそれに合わせて変わります。物質が空くうになったところで、こころはやむを得ず、一時的に物質に依存しないことにします。

ミクロでこころの流れを観察する

「手を伸ばして、カップを取る。」このシンプルな行為をおこなうために、こころは気が狂うほどたくさんの感覚データを認識して、判断しているのです。「カップを取りたい」という意思決定の認識と、「カップを取った」という意思決定の認識は、まったく違うものです。無数の感覚データが現れては消えた。認識もまた、現れては消えていった。つまり、一つの物質の組織の中で、生命が無数回、生・死・生・死の輪廻をしたということなのです。

瞬間に変身する自分

それぞれの瞬間で、生きている自分は、いつでも別々な人格、別々な存在なのです。知識や感情で無理をして、「すべて『私』という唯一の人間だ」と、勝手に決めつけています。データを調べてみると、違う結論に達することになります。

法則を発見して覚る

完全に (sabbaso) 生命の (sattānam) 死・消えること (cuti) と生・現れること (upapatti) を知っている・発見している (vedi)。その結果、いかなる現象にも執著は起こらないことになっている (asattam)。感情に流される今まで、ロボットのように生きることをやめて、正しく存在を観察するという道を歩んだ (sugatam)。その結果、目覚めた人になった (buddham)。その人こそ、真のバラモン・聖者であると、私 (釈尊) が説く (tamahām brūmi brāhmaṇam)。

相対性を超えると概念は成り立たない

われわれの心のなかにあるすべての知識、すべての概念は、そのように相対的に成り立っているのです。相対性を超えた、何一つ成り立たないのです。解脱者は、相対性を超えた人です。知識の次元を破った人です。概念の制限を破った人です。ですから、「解脱者は死後、どこへ往くのか?」という疑問は、そもそも成り立たないのです。相対性を破った人こそ、真のバラモンであり、聖者なのです。

419. Cutim yo vedi sattānam, upapattiñca sabbaso; Asattam sugatam buddham, tamahām brūmi brāhmaṇam.

419. 彼が、有情（生類）たちの死滅を、さらには、再生を、全てにわたり知ったなら、[一切に]執着なき者であり、善き至達者たる覚者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

チュティン ヨー ウェーディ サッターナン
Cutim yo vedi sattānam,

死滅を、彼が、知ったなら、有情（生類）たちの
Cutim/cuti(f.sg.acc)[Sk.cyuti<cyu]死没,没-carimaka死を最後とする[出入息]-citta死心 yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]~である人,~であるもの vedi/vindati(v.aor.3sg)[// vid,vind]知る;見出す,所有す sattānam/satta : ①(a)[sajjati sañj:pp]懸着せる,執着の,固着の②(m.pl.gen)[sat]有情,衆生,靈③(a)[sapati śap:pp]呪(のろ)われた,呪詛せる④(num)七, upapattiñca=upapattiñ/upapatti(f.sg.acc)[<upapajjati] : ①往生,再生,轉生②機會 [= uppatti]-bhava起有,生有+ca/ sabbaso/sabbaso(adv)[sabba の sg.abl]あまねく;

ウパバッティンチャ サッバソー

upapattiñca sabbaso;

再生を、さらには、全てにわたり

Asattam sugatam buddham, tamahām
[一切に]執着なき者であり、善き至達者たる
Asattam/asatta(a.m.sg.acc)[a-satta<sajjati の pp]執着なき←sajjati(v)[sañj の pass]着す,執着す;躊躇す.aor(2sg) sajjitho,asajjitho; pp.satta : ① sugatam/sugata(a.m.sg.acc)[su-gata]よく行ける,幸福なる;善逝[如来十号の一]-aṅgula善逝の指-civara仏衣-vidatthi 仏ちゃん手,仏の張手(手のさしわたし)-vinaya善逝の律,善逝の調伏 buddham/buddha(a.m.sg.acc)[bujjhati の pp]覚った,目覚めたる,覚知せる;覚者,仏陀,仏, tamahām brūmi brāhmaṇam.

420. Yassa gatim na jānanti, devā gandhabbamānusā; Khīnāsavam arahantam, tamaham brūmi brāhmaṇam.

420.天【の神々】たちが、音楽神や人間たちが、彼の赴く所を知らないなら、煩惱が滅尽した者であり、阿羅漢（人格完成者）であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヤッサ ガティン ナ ジャーナンティ デーワー ガンダッバマーヌサー
Yassa gatim na jānanti, devā gandhabbamānusā;
彼の 赴く所を 知らないなら、 天【の神々】たちが、 音楽神や人間たちが、

Yassa/ya(閏代 m.sg.gen)[Sk.yah]~である人,~であるもの gatim/gati(f.sg.acc)[〃]趣(しゅ:衆生が自己の業(ごう)によって得る生存の状態、また世界),行方,死去-gata 趣に行ける-nimitta 趣相 na/ jānanti/jānāti(v.pr.3pl)[〃 jñā]知る, devā/deva(m.pl.nom)[〃]天,神,王,天皇,陛下 gandhabbamānusā=gandhabba/gandhabba(m相):①乾達婆,音楽神,ガンダルヴァ②音楽師+mānusā/mānusa(a.n.m.pl.nom)[Sk.mānusa]人の,人間の;人間,人(f)mānusī 人女(pl)mānusā 人々-yoga 人間の束縛。;

キーナーサワン アラハンタン タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Khīnāsavam arahantam, tamaham brūmi brāhmaṇam.
煩惱が滅尽した者であり、 阿羅漢（人格完成者）であり、 彼をわたしは、 説く。 「婆羅門」と
Khīnāsavam=Khīṇa/khīṇa(a 有持)[khīyati の pp]尽きたる,滅されたる.khīṇā jāti 生は已に尽きた.-āsava 漏尽の,漏尽者[阿羅漢]-vāda 私語+āsavam/āsava(m.sg.acc)[āsrava <ā-sru]漏,流漏,煩惱,酒-kkhaya 漏尽. arahantam/arahant(m.sg.acc)[Sk.arhant,arahati :ppr]阿羅漢,應供, tamaham brūmi brāhmaṇam.

◆ yassāti imam dhammadesanam satthā veluvane viharanto dhammadinnam nāma bhikkhunī ārabba kathesi.

この法話は、師が〔ラージャガハ市の近くの〕竹林精舎に滞在しておられたときに、ダンマディンナー比丘尼について語られたものである。

ある日、まだ彼女が在家のときに、夫のヴィサーク在家信者が師のもとで法話を聴いて、不意果に到達して考えた。「私はすべての財産をダンマディンナーに委ねるべきだ。」ヴィサークは、それより以前は、家に戻って来ると、ダンマディンナーが窓から眺めているのを見て、微笑んでいた。ところがその日は、窓のところに立っているダンマディンナーを見ようとせずに家に帰った。

ダンマディンナーは「これはどういうことかしら」と考えたが、「まあいいわ。食事のときにわかるでしょう」と食事の時間に食べものを夫に勧めた。夫は、他の日には「おいで、一緒に食べよう」と言ったものだが、その日は黙ったまま食べた。ダンマディンナーは「何かの理由で怒っているに違いない」と考えた。すると、ヴィサークは、窓で立っているダンマディンナーを見ようとせずに家に帰った。

ダンマディンナーは「怒っている人が所有物を与えることはないわ。これはどういうことかしら」と思い、「でもあなたさまはどうなさるのですか、旦那さま」と言った。「私は、これからは何も面倒をみないつもりだ。」「あなたさまが吐き出した唾を、誰が受け取りますか。そういうことでしたら、私に出来をお許し下さい。」

夫は、「良いだろう、妻よ」と同意して、立派な支度をして、彼女を比丘尼の僧院に連れていく、出家させた。彼女は具足戒を受けて、ダンマディンナー長老尼となった。彼女は人里離れた生活を好む性質であったので、比丘尼たちとともに地方に行き、そこで暮らすうちに、ほどなくして無碍解とともに阿羅漢果に到達し、「今や、私によって親族の人々が福德を積むだろう」と考えて、ふたたびラージャガハ市に戻った。

ヴィサーク在家信者は彼女が戻ってきたことを聞いて、「どうして戻ってきたのだろう」と比丘尼の僧院に行き、ダンマディンナー長老尼を礼拝して一隅にすわり、「尼僧よ、在家生活が恋しくなったのですか、と言うのは相応しくな彼女に質問をしてみよう」と考えて、預流果についての質問をした。彼女はその質問に答えた。在家信者は同様にして、他の道果(一来果、不還果)についても質問し、さらに「自分の達している不選果を越えて」阿羅漢果について質問したとき、ダンマディンナーは、「あなたには行き過ぎです、ご同朋ヴィサークよ」と言い、「知りたいと望むのでしたら、師に近づいてその質問をするとよいでしょう」と言ったので、在家信者は長老尼を礼拝して立ち上がり、師のもとへ行き、問答のすべてを世尊に話した。

師は、「私の娘、ダンマディンナーはよく語りました。私もその質問に答えるのに、まさにそのように答えたでしょう」とおっしゃって、法を説き明かしつつ次の詩句を唱えられた。「421 その人の前にも後ろにも、中間にも何ものもなく、無一物で、執着なき人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.274 (2017年12月) 時間という束縛 無常の現象に執着しないことが解脱です Time friezes the freedom of mind.

421.Yassa pure ca pacchā ca, Majjhe ca natthi kiñcanam; Akiñcanam anādānam, Tamaham brūmi brāhmaṇam.

421.過去世(すぎしよ)も 来世(きたらんよ)にも はた現世(いま)も 無一物にて無執著 そをバラモンと我は説く 訳：江原通子

無執着と「空」

過去について、聖者のこころになんの捉われ・拘り・執着もありません。無執着です。Natthi kiñcanam ナッティ キンチャナンとは、何もない・空くうという意味です。テーラワーダ佛教は、それほど空 suñña, sūnya という言葉に拘らないので、注釈書は「空」という意味ではなく、「執着が一切ない」という解説をするのです。過去に対してこころが空であると解説する場合、その解説にさらに解説が必要になります。解説のプロは、さらに解説が必要になるような解説はしません。ですから、「聖者のこころには執着がない」と理解しなくてはいけないのです。

過去とは何か？

時間とは実在するものではなく、頭の中で推測して現れる概念です。時間を示す場合、その時間は何かの現象に依存しなくてはいけないのです。たとえば「江戸時代」と言えば、それは時計の示す時間ではありません。その時代を理解するために、参考にしているのは現代人の生き方なのです。ですから、人間がいなかったならば、「江戸時代」は存在しません。

聖者が思う過去とは、世界の過去でも、宇宙の過去でも、生命の過去でもありません。五蘊の過去なのです。現代的に言い換えれば、自分自身の過去なのです。

聖者にとって、「今」とは瞬間・瞬間変化して流れる色受想行識という五つの組織です。そのなかで一つの現象さえ、とどまることも、変化しないことも、あり得ないです。だから、今の瞬間でも、聖者に「私」はいません。存在しません。こころは「空」なのです。過去の色受想行識の流れについても、同じ気持ちです。過去の色受想行識の流れに対しても、こころは「空」なのです。過去にも「私」はいませんでした。

お釈迦さまの説法を勉強すると、一般人にとっては気が狂うほど遠い過去の出来事まで、目の前で起きている出来事のごとく明確に説明することができたのです。しかし、瞬間・瞬間、因縁法則によって変化してゆく現象の流れに対して、一切執着は起きないのです。

比較することで理解してみましょう。我々にも過去があります。史実として一部は憶えていますが、それもいい加減で明確に正しくは憶えていないのです。それだけではなく、自分の過去の史実に対して、愛着を持ったり、怒り憎しみを抱いたり、恥を感じたりするのです。一般人は「私の過去」として過去を思い出すのです。聖者には「私」がいません。あるのは、ものごとの流れのみです。

将来を予測する

計画を立てたり、金儲けをしたり、家を建てたり、スポーツをやったり、食べ物を気にしたりする場合は、将来のことを妄

想しているのです。いま現在の楽しみのため、いまの瞬間に充実感を得て安穏に生きるため、それらの仕事をやっているわけではないのです。これが、将来に執着して激しく悩み、怯え、不安になる一般人のこころなのです。

将来「私」はいない

聖者にとって、「私」はいないのです。あるのは瞬間に変化し続ける色受想行識の流れなのです。一般人であれ聖者であれ、生まれたものは死にます。聖者の今現在の色受想行識の流れは、死で分解するまで生滅変化して流れます。聖者にとって、過去に「私」がいなかっただけではなく、将来にも「私」はいません。ここには安穏に達していて、揺らがないのです。将来のイメージという妄想概念はないので、怯えも不安も喜びも期待も一切ありません。

Majhe 真ん中

過去・将来に比較する真ん中なので、「現在」という意味になります。

残念なことに、一般人には執着がないと何もできない、という弱点があります。いま空腹を感じたらご飯を食べればよいのに、その食べるご飯に執着してしまう。執着がなければ、何を食べて何を避けるべきかと判断することすらできない。金に執着がなければ、仕事に執着がなければ、仕事をすることができなくなる。子供に執着しなければ、子育てができなくなるのです。なぜ残念かというと、この執着のせいで悩み苦しみが現われてくるからです。成功・失敗という概念に悩まされて、期待通り・期待外れ・期待以上・想定外などの相対的な概念に嵌められて、精神的に悩むのです。一般人は、現在にも執着しているのです。

聖者の今（現在）

実は、聖者にはいま現在も存在しない、と理解したほうがよいのです。現在すら存在しないとは、一般常識的には理解に苦しむ話かもしれません。一切の現象は、絶えず生滅変化して流れています。いかなる現象の命も、瞬間に限られるのです。ガラスの寿命は何年も続くだろうと思うかもしれません、ガラスは地水火風でできているのです。地水火風の命は瞬間です。聖者の色受想行識は、瞬間瞬間、変化していく流れです。だから、いまの瞬間であっても、「私」はいない。「空」なのです。執着は起きないのです。

421. Yassa pure ca pacchā ca, majhe ca natthi kiñcanam; Akiñcanam anādānam, tamaham brūmi brāhmaṇam.

421. 彼のものが、過去にも、未来にも、[その]中間（現在）においても、何ものも存在しないなら、無一物の者であり、無執取の者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ヤッサ プレー チャ パッチャー チャ マッジエー チャ ナッティ キンチャナン
Yassa pure ca pacchā ca, majhe ca natthi kiñcanam;
彼のものが、過去にも、未来にも、[その]中間（現在）においても、存在しないなら、何ものも
Yassa/ya(閏代 m.sg.gen)[Sk.yah]～である人、～であるもの pure/pure(adv.prep)[pura : ②の loc または Mg.nom 形]前に、過去に-
java 行先者-jāta 前生の-jāta-paccaya 前生縁-bhatta 食前-samaṇa 行先沙門 ca/ca(conj)～と、また、しかし、～も、そして
pacchā/pacchā(adv)[Sk.paścā,paścāt]後に、背後に、西方に ca/ majhe/majjha(a.m.sg.loc)中の中間の、現在の;中正の道、中国
loc.majhe 中間に、間に。 ca/ natthi=na/+atthi/atthi : ①(v.pr.3sg)[Sk.asti<as]ある、存在する
pres.1sg.asmi,amhi,2sg.asi,3sg.atthi;1pl.asma,amha,amhāse,asmase,2pl.attha,3pl.santi,imp.atthu;opt.3rd.siyā,
assa,assu(pl)siyūm,siyamsu,assum.2nd.siyā,assa,assasi,assu(pl)assatha.1st.siyā,siyā,assam(pl)assāma.aor.āsirā,āsi,āsuṁ;ppr.santa,sa
māna,loc.sati.-bhāva 存在②[Sk.asti]有,存在 kiñcanam/kiñcana(a.n.sg.nom)[kin-cana=kiñci]何か、何ものか、障礙、障;

アキンチャナン アナーダーナン タマハン ブルーミ ブラーフマナン
Akiñcanam anādānam, tamaham brūmi brāhmaṇam.
無一物の者であり、無執取の者であり、彼をわたしは、説く。「婆羅門」と
Akiñcanam/akiñcana(a.m.sg.acc)[a-kiñcana]無所有の、何物もなき。cf. ākiñcañña←ākiñcañña(n)[a-kiñcana-ya]無所有。-āyatana 無所
有處 anādānam/anādāna(n.sg.acc)[an-ādāna]無取、無取著, tamaham/ brūmi/ brāhmaṇam/

(26-39) Aṅgulimālattheravatthu アングリマーラ長老の物語(2) — アングリマーラ長老は象を怖れない 422

◆ usabhami imam dhammadesanam satthā jetavane viharanto aṅgulimālattheram ārabbha kathesi. vatthu “na ve kadariyā devalokam vajanti”ti (dha. pa. 177) gāthāvāṇṇanāya vuttameva. vuttañhi tattha —

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、アングリマーラ長老について語られたものである。物語は、「心卑しい人々は神の世界に行かない」という詩句の註解で語られた通りである。そこで次のように語られた。【(13-10) Asadisadānavatthu 比類なき布施の物語 177】

比丘たちはアングリマーラに訊ねた。「ご同朋よ、凶暴な象が傘蓋を持って立っているのを見て、恐れたでしょう。」「ご同朋よ、私は恐れませんでした。」彼らは師に言った。「尊師よ、アングリマーラは偽りを語っています。」師は、「比丘たよ、私の息子、アングリマーラは恐れていません。煩惱を滅した牡牛たちのうちの最上の牡牛で、私の息子にも似た比丘たちは恐れません」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「422 最高の牡牛、勇者、偉大な聖者、勝利者、欲を離れ、汚れを落とした者、目覚めた人、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

No.276 (2018年2月号) 完全な禊（みそぎ） 自らのこころを清めること Perfect ablution

422.Usabham pavarām vīram, Mahesiṃ vijitāvinam; Anejam nahātakam buddham, Tamaham brūmi brāhmaṇam.

422.いとも氣高し牛の王 勇者、大仙、征服者 不動、禊なす覺者 そをバラモンと我は説く 和訳 江原通子／補訳 スマナ サーラ長老

犯罪と解脱

仏典では、人の本名よりあだ名を使います。アングリとは指、マーラとは首飾り。指の首飾りをしていたので、アングリマーラと呼ばれたのです。本名はGagga Mantānīputtaですが、ほとんど忘れられています。精神的に完全に壊れた人ならば、解脱に達するどころか修行することもできないはずでしょう。では、なぜアングリマーラは覺りに達したのでしょうか？

生贊の供儀

当時のインド社会では、バラモンはエリートで知識人だったのです。アングリマーラもまた、超エリートの学校で教育を受ける優秀な青年バラモンでした。他の生徒たちは学校を最優秀で卒業したアングリマーラのことを妬んで、師匠に彼の悪口を吹き込んだのです。我が子のように愛していた愛弟子に裏切られたと勘違いした師匠は、アングリマーラが誰かに殺されるように計画を練りました。弟子にこのように言ったのです。「わしは神様に千人の人を生贊に捧げる約束をした。しかし歳なのでその約束を守れない。わしの代わりに生贊の儀式を行ってくれれば、それがそなたの学費代わりになるだろう。」バラモン学校では、学費は卒業後に払う習慣になっていたのです。師匠を信じ込んでいたアングリマーラは、真剣まじめな気持ちで人殺し（生贊儀式）を始めたのです。彼は生まれつき武芸の才にも溢れていたので、誰にも倒すことはできなかつたのです。結果として、アングリマーラはコーサラ国民みなを脅かす殺人鬼になりました。しかし、彼を精神的にいかれた人だと断定することはできないのです。

真理の探究と性格

「仏教を学んで修行して解脱に達するために必要な資格はなんでしょうか？」と問われたところで、お釈迦さまは「謙虚であること」という一つの条件だけを挙げました。世界は殺人鬼アングリマーラに怯えていたが、不思議なことに超一流の知識人でもあった彼には、「謙虚さ」という解脱の条件が完璧に備わっていたのです。仲間の学生に妬まれていたが、アングリマーラはそれにも気づかないほど謙虚な人だったのです。

罪を犯しても悪人にならないこと

ひとは罪を犯したとしても、「悪人」になってはならないのです。悪人とは、自分の罪を認めない、罪を正当化する、言いわけをする、自我を張ることです。自分が犯した罪を素直に認める人は、救いがたい悪人ではないのです。自分の罪を認めて懺悔することが仏教の常識です。仏教徒は、仏像の前に手を合わせるたびに懺悔をします。朝昼夜、真夜中でも、時間に関係なく懺悔をします。罪を犯したことがあっても、戒律を守って真剣に生活しても、懺悔をします。自分が気づかなかつた罪に対しても、懺悔をするのです。この習慣を通して、必死に謙虚な人間になろうとするのです。謙虚でなければ、解脱に達することはできません。

アングリマーラに出会ったお釈迦さま、「君は無知ゆえに人生をあてもなく走り続けている。目的に達した私は、勝利を得て止まっているのだ」という意味の言葉を告げました。その一言で、アングリマーラの目が覚めたのです。知らないことは誰からでも教えてもらうという謙虚さがあったからこそです。釈尊の一言で、生贊のために人を殺す行為を止やめたのです。それから、ブッダの言葉を学び実践して、覚りに達しました。ひとは罪を犯しても、悪人になってはいけないのです。

聖者も迫害を受ける

アングリマーラ尊者は在家の時、常識を超えるほどの罪を犯したのです。解脱に達してもまだ肉体は残っているので、悪業は肉体に苦を与えるのです。誰かがカラスを追い払おうと投げた石すら、アングリマーラ尊者の身体に当たったのだと言わっています。尊者は確立された忍耐によって、悪業の結果を受けていました。しかし、聖者に怪我をさせて、人々が新たな罪を犯すことに強烈な憐れみを抱いていたのです。

ある日の托鉢中、アングリマーラ尊者は難産で死にかけていた妊婦さんの姿を目りました。その女性を助ける方法があるでしょうかと、釈尊に尋ねたのです。お釈迦さまは、「では、『生まれてからこの方は、意図的に生命を奪ったことがあります。この真理の力で苦しみがなくなりますように』と妊婦の前で唱えてください」と仰ったのです。アングリマーラ尊者は、「私はかつて殺人鬼でしたから、そのような文句を唱えられません」と答えました。お釈迦さまは文章を訂正して、「聖者として生まれてからこの方は、意図的に生命を奪ったことがありません。この真理の力によって、あなたの苦しみがなくなりますように。胎児が幸福になりますように」という文句を教えてあげたのです。尊者がその文句を妊婦さんの前で唱えると、たちまち、無事に子供が生まれました。この経典は、いまも安産のために唱えられています。

王牛

インド文学の場合は、牛という単語は必ず家畜動物のために使う、という決まりはないのです。「偉大なる人」という表現の場合にも、偉大なる牛・王牛などの言葉を使うのです。一般人とは桁違いの性格を持っている人、という意味になります。

ですから、阿羅漢は「偉大なる王牛 (usabham pavaram)」なのです。

勇者

「勇者 (vīram)」とは、悪条件を乗り越えて勝利を収める人のことです。解脱に達する場合は、こころの本能である煩惱に打ち勝たなくてはいけないです。それは俗世間のどんな勝負よりも難しい闘いです。エベレスト制覇する人も、煩惱があるからこそ頑張っているのです。闘っているのです。ですから、勇者たちの中で本物の勇者は解脱者なのです。

仙人

釈尊は、具体的に分かりやすく、解脱に達する道を語っています。曖昧な言葉を使わず、疑が起きないように明確に、完全に道を語るので。その道順で修行すれば、人は確実に解脱に達します。(謙虚であることが唯一の条件です。) ですから、解脱に達した聖者こそが本物の「仙人 (mahesim)」なのです。

征服者

修行して解脱に達することも、厳しい戦いです。眼耳鼻舌身意という六ヶ所で、こころは色声香味触法の攻撃を受けているのです。こころは汚れて、悩み苦しみに陥ります。また、罪を犯してしまいます。そのように、生命は輪廻転生の罠に嵌められているのです。修行者はその罠を突破するため、戦争に挑みます。色声香味触法の攻撃を受けても、こころが被害を受けないように、しっかりと守る訓練をするのです。やがて勝利を得ます。色声香味触法がいくら攻撃をしても、自然に攻撃をかわして、こころを安全に安穩に保つことができる能力が身につくのです。それが「解脱に達した」ということです。ですから、本物の「征服者 (vijitāvinam)」は解脱者なのです。

不動

俗世間で俗人として生きるために、こころの揺らぎが欠かせないエネルギーになるのです。こころを激しく揺らしたからと言って、得る結果は悩み苦しみ不安以外に何もありません。存在欲がある限り、輪廻転生するのです。仏道の修行者はこの俗世間の道をやめて、色声香味触法によってこころが揺らがないように保つ技を身につけるのです。存在欲(渴愛)を断つのです。その結果、こころは何が起きても揺らがない安穏な境地に達するのです。煩惱によって揺らがないので、解脱者のこころは「不動 (anejam)」と言えますが、涅槃に入るまで普通の認識の流れがあるのです。しかし、認識してもこころが貪瞋痴の刺激を受けて揺らぐことはないのです。

禊 (みそぎ)

バラモンたちは、聖なる河に入って身体を清めます。河に入って沐浴すれば、こころの汚れまで洗い流せるのだと信仰しているのです。本当の禊とは、こころの汚れである煩惱を断つことです。煩惱を断つ具体的な方法をお釈迦さまが説かれています。釈尊の説かれたとおりに修行して、修行者はこころの煩惱を完全に洗い流すのです。智慧が顕れて真理を発見することで、こころは二度と汚れないようになります。解脱者こそが、完全な禊 (nahātakam) をおこなった人なのです。

422. Usabham pavaram vīram, mahesim vijitāvinam; Anejam nhātakam [nahātakam (sī. syā. kam pī.)] buddham, tamaham brūmi brāhmaṇam.

422. [勇猛果敢な] 雄牛たる最も優れた勇者を、[一切の] 征圧者たる偉大なる聖賢を、不動の沐浴者(梵行終了者)たる覚者を——わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

ウサバン	パワラン	ウィーラン	マヘースイン	ヴィジターウィナン
Usabham	pavaram	vīram,	mahesim	vijitāvinam;
〔勇猛果敢な〕雄牛たる	最も優れた	勇者を、	偉大なる聖賢を、	〔一切の〕征圧者たる
Usabham/usabha[Sk.ṛśabha,cf.āśabha,isabha,esabha,nisabha] : ①(m.sg.acc) 牛,牛王 ②(n)長さの単位[20yatthi=140肘]				
pavaram/pavara(a.m.ag.acc)[pa-vara,Sk.pravara]最頂の,もっともすぐれた vīram/vīra(m.sg.acc)[//]英雄,雄者,勇者-āṅgarūpa 英雄の四肢の姿をした,英雄的な, mahesim=mahā/Mahā-(a持)大なる+isim/isi(m.sg.acc)[Sk.ṛṣi]仙,仙人,仙者,仏,聖者(sg)voc.ise; (pl)nom.isayo; acc.ise.isayo; gen.isīnam,isinam-tta 仙人たること-sattama 第七仙[過去七仏の第七,釈尊] vijitāvinam/vijitāvin(a.m.sg.acc)[vijita-āvin]已勝の,大勝せる,征服せる;				

アネージヤン ナハータカン	ブッダン	タマハン	ブルーミ	ブラーーフマナン
Anejam nahātakam	buddham,	tamaham	brūmi	brāhmaṇam.
不動の 沐浴者(梵行終了者)たる	覚者を	彼をわたしは、	説く。	「婆羅門」と
Anejam/aneja(a.m.sg.acc)[an-ejā]不動の,無動著の,無貪愛の nahātakam/nahātaka(m.sg.acc)[Sk.snātaka]=nhātaka 洗浴者,梵行終了者,淨行者 buddham/buddha(a.m.sg.acc)[bujjhati の pp]覚った,目覚めたる,覚知せる,覚者,仏陀,仏, tamaham brūmi brāhmaṇam.				

あるとき、世尊は〔身体の〕風によって病気になられ、ウパヴァーナ長老を、湯をもらうために、デーヴァヒタ婆羅門のもとへ送られた。ウパヴァーナ長老は出かけていき、師が病気になられたことを話して、湯を想望した。それを聞いてデーヴァヒタ婆羅門は心喜ばせ、「私のもとに正しく覚られたお方が湯のためにお弟子をお遣わしになるとは、なんと私は得をしたことだろう」と、湯桶の天秤棒を家来に担がせ、椰子蜜の容器をウパヴァーナ長老に渡した。長老はそれを家来にもたせて精舎に帰り、師を温かい湯で沐浴させ、湯で椰子蜜を溶いて世尊に捧げた。世尊の病はその途端、安らかになった。

婆羅門は[考]えた。「いっさい誰に布施の品物が与えられたら、大きな果報があるのだろう。師にお訊ねしよう。」婆羅門は師のもとへ行ってそのことを訊ねながら、次の詩句を唱えた。「誰に布施の品は捧げられるべきか、誰に捧げられたものが大きな果報をもたらすか、どのように、供儀を捧げる者にとってどのように、捧げ物により繁栄するのか。」と。

すると、師は彼に、「このような婆羅門に捧げられたものが、大きな果報をもたらすのです」と婆羅門に明らかにしようと、次の詩句を唱えられた。「423前世の住まい方を知り、天界と地獄を見、そして再生の滅に至り、智慧を完成した聖者であり、あらゆる完成を成し遂げた者、その人を私は婆羅門と呼ぶ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。婆羅門も心淨らかになり、〔仏・法・僧〕の帰依処に立って、在家信者であると宣言した。

婆羅門の章の註解 終わり

No.277 (2018年3月号) ブッダ特有の智慧 脳みそで理解できない解脱 Ineffable freedom

423.Pubbenivāsaṁ yo vedi, Saggāpāyañca passati; Atho jātikkhayam patto, Abhiññāvositu muni;Sabbavositavosānaṁ Tamaham brūmi brāhmanam.

423前(さき)の世を知り 天界と 地獄をも見て解脱して 明智(みょうち)まどかな牟尼(ムニ)聖者 全ての執着終えし者 そをバラモンと我は説く 訳:江原通子 補訳:スマナサーーラ長老

自ら体験しなくては

解脱とは、一切の概念を超える境地です。完全なる自由の境地です。対照的な現象世界を乗り越えた境地です。ですから、人間の知識範囲に入らない境地なのです。そのように語っても、人々の知りたがる気持ちは消えません。ですから、解脱について聞きたがるのです。この場合は、お釈迦さまえ、否定形で肯定的概念を示すような最弱の方便を使わざるを得なかつたのです。リンゴを説明するために、「バラの花と違いますよ」と言うのはウソではありません。事実です。しかし、人はリンゴを理解したのでしょうか? 理解していないのです。バナナとは違いますよ、と言っても同じことです。完璧な方法は、本物のリンゴを見せて食べさせてあげることです。その人に、説明する必要はないのです。仏道と仏法(本物のリンゴ)とは、人に解脱を体験させる方法です。

過去生を知る智慧

今月は、『ダンマパダ』最後の偈の解説になります。『ダンマパダ』26章は、覚りに達した聖者はどのような人格でしょうかと、釈尊の説かれた言葉を集めたセクションです。最後の偈は、解脱者一般の説明ではなく、お釈迦さまご自身の能力を説明しているのです。この偈では、極力否定形を使わず、解脱を語ることに努力しています。最初の言葉は、pubbenivāsaṁ yo vediです。これは、過去生を知る能力のことです。ブッダに具わった超越した智慧の一つです。一般人にその能力が無いのは当然です。話を聞く人が信じるか否定するか、理解するか否かはわかりません。一応、肯定的に、釈尊に具わった超越した智慧を発表するのです。

お釈迦さまは修行中、観察能力が超越レベルに達したところで、自分自身の過去の生まれを遡って見ることにしたのです。一回二回だけの過去ではないのです。無数劫にわたって、自分の過去生を観察したのです。劫とは宇宙の時間単位です。無数には、その意味とともに数学的な定義もあります。数字の数え方はいろいろありますが、だいたい 10^{120} です。経典によれば、数学的に 60 無数劫年まで過去を観察したという話です。さらに遡れば、いくらでも過去を観察できるので、「過去には限りがない、始点は成り立たない」ということで止めたのです。

また、自分に過去があるという事実は、他人にも過去があるという証拠にならないので、他の生命のことも観察してみたのです。この場合は、いろいろデータサンプルを取って観察いただろうと思います。なぜならば、すべての生命の過去を調べることは実行不可能で成り立たないからです。とにかくお釈迦さまは、自分の前にいる人が輪廻転生してどのような過去を流れてきたのかと、ご自分の超越した智慧でご存じなのです。お釈迦さまはこの能力を、人々を解脱へ導くために使われたのです。

生死の回転と業を知る智慧

次のフレーズは saggāpāyañca passati です。直訳は、「天界と地獄を知っている」。意味は、さまざまな天界の状況を直接観察して知っていることと、それらの天界に生まれるために必要な業も知っていることです。地獄の場合も同じです。どのような罪を犯した生命が、どのような地獄(悪趣)に墮ちて、どのように苦しむのかと知っているのです。お釈迦さまは自分がおこなった観察の仕方を説かれているのです。

まず、自分の過去を観察して、輪廻転生では始原が成り立たないことに達する。それから、他の生命の過去を観察するのではなく、死にかけている人々を観察対象にするのです。世の中で、いまわの際の生命はいくらでもいます。その生命が死んで、どこに生を受けたのかと観るのです。それから、その生命が死ぬまでどのような生き方をしていたのかと調べて、新たな生を惹き起こした力(業)はどのようなものであったかと観る。このケーススタディを無数におこなうことで、生命の行方を説くことができるようになったのです。「どのような生き方をする生命が天界に赴くか?」「どのような生き方をする生命が悪趣に陥るのか?」と明確に語れる能力を獲得された釈尊は、他の生命の行方を観察したデータから、さらに業論を導き出したのです。

解脱には差がありません

このような能力は、一般人には不可能です。正自覚者に特有の能力です。修行者も、サマタ瞑想とヴィパッサナーを完成まで実践すると、いくらか過去を観られる可能性があります。しかし、そのためには、修行者があえて過去を観ることに集中しなくてはいけないのです。こころを過去まで遡らせるときは、当然リミットがあります。正自覚者と弟子の阿羅漢たちの間で、超越した智慧の能力差があります。正自覚者と等しくはならないのです。しかし、智慧の差はあったとしても、ブッダと弟子たちの「解脱」に差は無いのです。解脱とは一切の執着を捨てることなので、差は成り立たないのです。ブッダとして覚っても、阿羅漢として覚っても、解脱には差がありません。

生の滅とは執着の滅

次のフレーズは、三番目の智慧を示す *atho jātikkhayam patto* です。直訳は、「(ふたたび) 生まれることは無くした」。生命は死を迎えると、生きることに執着があるから、また新たな生を結ぶのです。いまの生で、いまの肉体と環境に依存して、こころが認識回転しています。死とは、いまの肉体のなかで認識回転をストップすることです。まず、環境（色声香味触法の世界）を認識できなくなる。次に、自分自身の肉体を認識できなくなるのです。その瞬間、こころが別な環境で認識をスタートします。ですから、死とは「こころが別なところで認識回転を始めたこと」という意味にもなります。

生命は、生きるとはどのような働きなのかと、客観的にありのままに観察しないのです。感情の奴隸になって、色声香味触法を追い求めて、必死なのです。生きることに強い執着を持っているが、それにすら気づかない。生きることばかり考えて、生きることに極力集中するのです。観察してみるならば、生は死がなければ成り立たないし、死は生がなければ成り立ちません。生死は相対的に依存している、コインの裏と表のようなものです。ですから、執着のある生命が死を迎えた後、次の場面は生になるのです。解脱に達するとは、無明のせいで無期限に流れる生死の回転を停止することです。生死を回転させる衝動が、執着です。一切の無常たる現象に対して、執着が無くなったら、生死の回転は終了するのです。*Jātikkhayam patto* とは、生死の回転を惹き起こす執着を根絶することです。

知るべきことを知り終えた

次のフレーズは、*abhiññāvoso muni* です。「知るべきこと知って、実行すべきことを実行し終えている仙人（牟尼）」という意味です。知るべきことと言っても、俗世間に限った知識範囲ではないのです。ひとは真理を知るべきです。牟尼・仙人とは、それを知り終えている方なのです。「人間は不完全である」とは有名なフレーズです。仏教的に修正するならば、「生命は皆、悉く不完全である」となります。人間に限らず、神々・梵天などなど超越した生命さえ、不完全です。不完全な生命には、いつでも「物足らない」という気持ちがあるので、輪廻転生するはめになるのです。輪廻転生と言っても、自分の希望通りに生まれ変わることはできません。死後、どこに生まれるのかということは、こころに蓄積されている業のエネルギーで決定されるのです。特別なプログラムを実行しない限り、一般的の生命には自分が死後、期待するところに新たな生を結ぶことはできないのです。

「知るべきことは知り終えている、実行すべきことは実行し終えている」とは、不完全であった生命が完全に達したということです。ですから、人間でも生命でもないのです。強いて言えば、牟尼・仙人です。

命いのちの実家を破壊すること

次のフレーズは、*sabbavositavosānam* です。まず、「修行が完成している」という意味で理解しましょう。それから、詳しい解説に入ります。*Vosita* とは、直訳すると「住んでいた」となります。ここは仏教なので、人が住む家のことではありません。生きることが回転する中心点を指しているのです。私たちは、精神的に何を中心にして、何を頼りにして、何をホームベースにして、生きているのでしょうか？ 第一は「私がいる」という実感です。そこから、頑張らなくては、成功しなくては、健康でいなくては、知識・財産・権力などを手にしなくては、等々の生きる衝動が限りなく現れるのです。

「何を目指して、あなたは生きているのか？」と訊けば、さまざまな答えが返ってくるでしょう。しかし、誰も第一の答えを出さないので。第一の答えとは、「私がいる」です。この実感から、欲・怒り・慢・嫉妬・恨み、等々の千五百の感情が現れてくるのです。感情とは即ち、煩惱のことです。生命は煩惱を実家にして、輪廻転生しているのです。地獄に墮ちようが、天界に赴こうが、人間に戻ろうが、実家は自分自身のこころにある煩惱です。解脱に達するとは、煩惱を根絶することです。二度と実家に戻りませんと、実家を破壊することです。もっと理解しやすく言い換えるならば、「私がいる」というあの実感が、跡形もなく消えるのです。それは否定的な単語ではないのです。なぜならば、「私がいる」実感が私たちにあっても、この気持ちは錯覚なのです。幻覚なのです。真理を知らないから、錯覚を作り、錯覚が現実であると勘違いして、限りのない輪廻転生を回転して、苦しんでいただけです。すべては錯覚のせいです。

では最後に、*sabbavositavosānam* を直訳してみましょう。「住むところはすべて住み終えた」です。（もう飽きたので、二度と住む気持ちは無いのです。）

結論として、*tamaham brūmi brāhmaṇam* 「この条件がそろった人こそが、真のバラモン（聖者）であると私（ブッダ）が説く」のです。

鵜呑みにしないこと

以上の説明は、「お釈迦さまはどんな人？」という質問への答えになりますが、正自覚者特有の智慧以外は、すべての覚者に当てはまります。この偽は、お釈迦さまが否定形を極力避けて説かれたものです。否定形を使っているのは、*jātikkhayam patto* という一ヶ所だけです。しかし、肯定の表現を使っても、否定形で肯定的概念を示しても、一般人には解脱者のこころは理解しがたいということには変わりありません。たとえば、「自分には自らの過去生を観察できる能力がある」と言われても、聞いている人はどう理解すればよいのでしょうか？ いろいろな反応が考えられます。①私にはそんな能力はありません。②それはあり得ません。③事実であると証明しなさい。④すごい、脱帽だ。⑤尊い方だ、拝みましょう、従いましょう。⑥私には関係がありません……などなどです。要するに、解脱者のこころの状況を理解していないのです。三番目の反応をさらに分析しましょう。現代人は、証明されたら信じる性格です。しかし、人が明確に「私の過去生の名前は〇〇です。仕事、住んでいた場所、寿命、家族環境、死因は……」などなどと言っても、どのように実証するのでしょうか？ 過去の出来事はすでに終わっているので、参考にするデータが無いのです。

助かる条件が一つだけあります。釈尊は、決して嘘をつかないのです。決して、人をだますことはありません。Yathā vādī

tathā kārī 語るごとく行う yathā kārī tathā vādī 行うがごとく語る性格なのです。したがって、tathāgata 如来と言います。しかし、釈尊はものごとを鵜呑みにすることを禁止しています。ですから、やっと達することのできる結論は、「釈尊が説かれた言葉だから事実でしょう。しかし、私には理解できない」です。ひとには、釈尊が説かれた実践方法を実行して、各自で解脱に達するより他の道はないのです。

423. Pubbenivāsam̄ yovedi, saggāpāyañca passati, Atho jātikkhayam patto, abhiññāvositomuni; Sabbavositavosānam̄, tamaham̄ brūmi brāhmañam̄. Brāhmañavaggo chabbisatimo niñthito.

423. 彼が、過去（前世）の居住を知ったなら、かつまた、[人々が死後に赴く] 天上と悪所を〔あるがままに〕見るなら、さらには、生の滅尽を得た者であるなら、〔あるがままの〕証知が完成された牟尼であり、一切が完成された完成者を、わたしは、彼を「婆羅門」と説く。

プッペーニワーサン ヨー ウエーディ サッガーパーヤンチャ パッサティ
 Pubbenivāsam̄ yo vedi, saggāpāyañca passati, 天上と悪所を、かつまた、見るなら、
 過去(前世)の居住を 彼が、知ったなら、 天上と悪所を、かつまた、見るなら、
 Pubbenivāsam̄=Pubbe/pubbe(prep)[pubba②:loc.]前に、以前に-ananussuta 前代未聞の-kata 宿作の-kata-vāda 宿命説-kata-vādin 宿命論者-kata-hetu 宿作因-ñāna 宿智、過去に関する智-nivāsānussati 宿住隨念-nivāsa-ñāna 宿住智+nivāsam̄/nivāsa(m.sg.acc)[< nivasati]居住、住所 cf.nevāsika-ñāna 住所 yo/ya(関代 m.sg.nom)[Sk.yah]~である人、~であるもの vedi/vindati(v.aor.3sg)[// vid,vind]知る;見出す,所有す。, saggāpāyañca=sagga/sagga(m) : ①天,天界,天国,天上-āpāya 天界と苦界-āvaraṇa 天障-kathā 生天論,天の話-kāya 天身,天衆-gāmin 生天者-magga 上天の道-loka 天界②鳥の一種+apāyañ/apāya(m.sg.acc)[// < apa-i] : ①苦界,苦処,無幸処,悪処,悪趣-gamanīya,-gāmanīya 亜趣に至るべき-gamanīya dosa 嘴-gamanīya moha 痴-gamanīya rāga 貪②離去,損減,失敗,危険-kusala 離去に巧み,損減善巧-mukha 失敗の原因+ca/ passati/passati(v.pr.3sg)[paś Sk.paśyati]見る;見出す,知る,

アトー ジャーティックヤン パットー アビンナーヴォースィトー ムニ
 Atho jātikkhayam patto, abhiññāvositomuni;
 さらには、生の滅尽を得た者であるなら、証知が完成された牟尼であり、
 Atho/atho, atha(ind)時に、また athāparam̄ さらにまた atha kho そこで、時に、さて atha ca pana 然るに、それにも拘わらず atha vā あるいはまた jātikkhayam=jāti/jāti(f.依属)[// cf.janati]生,誕生,生れ,血統,種類 instr.abl.loc.jātiyā,jaccā; abl.jātito; loc.jātiyam-kkhaya 生の滅尽-kkhetta 生誕刹土-thaddha 生傲慢-thera 階級による長老-paññā 生得慧-pabhava 生の発生-puppha 樹花の名-bhaya 生の怖畏-bhūmi 自然の土地-mada 生の驕慢-lesa 種似-vāda 出生論,血統説-sampanna 具足-sambhava 生の起源-samsāra 生死輪廻-ssaraññā 前生追憶の智,宿命智。+k/+khayam/khaya(m.sg.acc)[Sk.ksaya]尽,滅尽,滅尽 khaye ñāna 尽智-ānupassanā 尽滅隨觀-dhamma 尽法,滅尽の法-virāga 尽滅離貪 patto/patta : ①(n)羽毛,翼,葉,琴柱②(m.n)[Sk.pātra]鉢,器③(a.m.sg.anom)[pāpuñāti:pp.Sk.prāpta]已得の,得たる,得達の-parihāni 已得退-yogakkhema 涅槃に達せる,軋安穩を得たる←pāpuñāti(v)[pa-āp cf.Sk.prāpnoti]得る,達す,到達す。④(m)=patti,pattika 歩兵-ānīka 歩兵隊, abhiññāvositomuni=abhiññā/abhiññā : ①(f.有持)[< abhijānāti,Sk.abhijānā]神通,通,通智,証智-anuyoga 神通徵問-kathā 神通論.-kusalā 神通善心.-cittā 神通心.-cetānā 神通思.-ñāna 神通智.-paññā 神通の慧.-pādaka-jhāna 神通の基礎禪.-bala 神通力.-vosāna-pāramī 通智究竟完成②(a)abhiññā [abhijānāti の ger]証知して-pariññeyya 知解して遍知されるべき+vosito/vosita(a.m.sg.nom)[vi-osita<ava-sā の pp.cf.vusita,vyosita]完成せる,終結せる,完結せる muni/muni(m.sg.nom)[//]牟尼,寂默,黙者,賢人-dassana 牟尼の見-muni 牟尼牟尼-sattama 第七の牟尼,釈迦仏。;

サッバヴォースィタヴォーサーナン タマハン ブルーミ ブラーフマナン
 Sabbavositavosānam̄, tamaham̄ brūmi brāhmañam̄.
 一切が完成された完成者を、 彼をわたしは、 説く。 「婆羅門」
 Sabbavositavosānam̄=sabba/sabba(a.代的 m.n 依処)[Sk.sarva]一切の,すべて,一切のも+vosita/vosita(a.m 有持)+vosānam̄/vosāna(n→m.sg.acc)[vi-osāna]最終,終結,完了 vosānam̄ āpajjati 終りに至る,終結す antarā vosānam̄ āpajjati 終結の中途に至る,中絶す, tamaham̄ brūmi brāhmañam̄.

Brāhmañavaggo chabbisatimo niñthito. 婆羅門の章が第二十六となり、〔以上で〕終了した。